
Cross world ~交錯する世界~

百花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Cross world ～交錯する世界～

【Nコード】

N8917M

【作者名】

百花

【あらすじ】

『超小説版ケロロ軍曹＋black&whiteであります』から3ヶ月。

10月になった奥東京市に現れた者達とは……。

死神・宇宙人・エクソシスト。そして能力者

出会うはずのなかった彼らに待ち受ける運命が今、幕を開ける。

最強クロスオーバー小説。遂に解禁！！

はじめに

皆さんこんにちは。作者の百花です。
この小説は

ケロロ軍曹

B L E A C H

D ・ G r a y ・ m a n

を原作とした二次創作ですが注意点がございます。

注意点1

B L E A C H に関しては現世組（黒崎一護・石田雨竜・茶渡泰虎・井上織姫）と朽木ルキア・阿散井恋次。

D ・ G r a y ・ m a n に関してはアレン ウォーカー・リナリー・ラビ・神田ユウ・ブックマン・アレイスター クロウリー
3世・ハワード リンク。ちよい役でコムイ リー。

以上のメンバーのみが登場します。

ケロロ軍曹はほぼオールキャストです。

注意点2

主人公がオリジナルキャラクターです。またオリジナルキャラクターが大量に出現します。

味方側（主人公側）のキャラクターはオリジナル登場人物紹介に紹介があります。

注意点3

時間軸ですが――

ケロロ軍曹は原作20巻以降、アニメ6thシーズン以降。超劇場版のエピソードを経験。

D・Gray-manはティモシー登場編以降、サードエクソシスト登場前。

BLEACHはアニメオリジナルと同じ様に時間軸不明。ただし――
護が虚化^{ホロウ}を使うことが出来る。

――となっております。

また、前作『超小説版ケロロ軍曹+black&whiteであります』を踏まえたシーンがありますのでご一読をお勧めします。

以上が注意となっております。

それでも大丈夫な方は本編をどうぞ。

オリジナルキャラクター紹介

茨田 弥々華

前作の主人公。

赤い瞳が特徴的な17歳女子。

学校に行かず仕事をしている。

能力は黒白風華。

身長150cmで痩せ形。髪が短く、中性的な顔立ち。

明朗快活で男っぽい性格。若干忘れっぽい。ガサツ。

英語がほぼ完璧に話せる。

一人称はあたし

「Appdsco」アプリデユスコという団体に所属する「能力者」。

今はAppdsco署員、エクソシスト、護廷十三隊のアシスタント、そしてケロロ小隊の一員として慌ただしい毎日を送る。

リップ アドバンス

弥々華の友人でありチームメイト。

17歳女子。

身長161cmで痩せ形。

優しく真面目。少し引つ込み思案だが芯の通った性格。

緑色のロングヘアと同色の目が特徴。

お菓子づくりが趣味。

一人称は私。

「Appdsco」アプリデユスコという団体に所属する「能力者」。

今はAppdsco署員、エクソシスト、護廷十三隊のアシスタント、として慌ただしい毎日を送る。

ティト イクス

16歳男子。

弥々華のチームメイトでリップの幼なじみ。

身長180cm。割合筋肉質。

普段は冷静沈着な頭脳派を装うも実際は短気で怒りっぽい。

また若干皮肉屋の気がある。

アプデユスコ

「A p d s c o」という団体に所属する「能力者」。

A p d s c o 署員とガルル小隊の一員を掛け持ちし慌ただしい毎日を送る。

アプデユスコ

A p d s c o について

主人公である弥々華やリップ、ティトはA p d s c oと呼ばれる組織に加入している。

A p d s c oとはA b i l i t y p e r s o n d i s p a t c h , s p a c e c o n t r o l o f f i c e (能力者派遣・空間管理署)の略で

- ・能力者を依頼者に派遣する
- ・様々な平行世界を管理する

事が主な仕事である。

また空間管理の一環としてケロン軍や護廷十三隊、黒の教団などに能力者を派遣。友好関係を結んでいる。

弥々華とリップ、ティトは空間管理兼能力者派遣部署、A - 1 1 3 小隊所属である。

能力者について

弥々華・ティト・リップやA p d s c oに所属する殆どの人間は能力者である。

能力者とは、世界の万物が発するオーラと呼ばれるエネルギーを使い、個人にあつた能力を使うことが出来る。

また能力解放という技を使用するとその能力の本当の力を用いる事が出来る。

第一話 多分これが全ての始まり（前書き）

やっと本格始動です。

第一話 多分これが全ての始まり

「歩かなければ駄目」

少女の頭の中に響く声。

この鬱蒼うつそうと繁る森の中をどのくらい歩いただろうか。

少女には分からない。

はあ……疲れた。

もう歩きたくない。

少女はその場に座りこんだ。

手のひらに顔を埋めると頭が冷たい。

早く帰りたいと少女は思った。

でもどこに帰るの？

少女にはそれすら分からなかった

「足を止めるな」

少女の頭の中にまたも響く声。

「たどり着け」

「嫌……もう歩くのやだ」

「我が儘を……」

たしなめられるような声色に少女はむくれた顔をした。

「ほってはおけない」

「ほら、立て」

促されるまま少女は立ち上がる。

歩きたくないのに。

「もうすぐ着く」

見えない存在に導かれるように少女の足がフラフラと進む。

「ほら、見えてきただろう？」

見えない存在が少女の背中を押した。

少女はよろけつつ前に飛び出した。

森は後ろに消え、目の前には開けた草原が広がっている。

そして、その中心にそれはあった。

「なんだよ……これ？」

あったのは真っ黒い石。でもただの石ではない。真っ黒で光沢がある宝石みたいに深みのある色。

「綺麗……」

高さは3m位だろうか。

墓石にも見えるが綺麗な石だ。

少女はしばらくその石の周りを回った。

横幅も1.5mはありそうでなんだか一枚岩のドアのようだ。触りたくなってきた。

少女はゆっくり右手の指先を伸ばす。

触っては駄目なような、だけど触らずにはいられない誘惑。

少女少し躊躇して、でも耐えきれない感覚が手を押し付けた。

「う……」

にゆるりとした感覚が手首までを包む。

気持ち悪い……！！

少女は思わず手を引き抜こうとするが抜けない。

それどころかだんだん引き込まれてく。

意味分かんないよ……！！

少女は慌てて左手をつつかえ棒がわりにしようと、左手を着く。だがその左手すら中にひきこまれる。

「い……嫌……！！」

押してダメなら引いてやれ。

少女の脳裏に唐突にそんな言葉が浮かぶ。

「や、それは違うな」

急に冷静になって自分にツツコミを入れた。だがもしかしたら。通り抜けられる？

肘まで石に浸かった腕を見て少女は決心した。

両足に力を込め、体を前に出す。

体は簡単に前に進んだ。

これ……行けるかも。

息を止めて、顔をつける。

水に顔をつけたような感覚に息が止まる。
怖いけど止まらない。

そのまま少女は手を伸ばし突き進んだ。

1歩目。

2歩目。

そして3歩目。

なんだか温かいお風呂にでも入っているような感じだ。
5歩目を踏み出すと指先にひやりとしたような感覚。

さらにもう1歩踏み出すと腕全体が冷たい風に当たる。

少女は足を速めた。

今度は肩と頭。

そして全身が風に吹かれる。

「あり？」

落ちる……！

出口はなぜか空中にあった。

やば……これ死ぬかも……！

つか死にたくない……！

落下する体。

意味分かんない……！

「ああああああああ……！」

少女の絶叫が落ちていく。

死ぬな。これ。

近づく大地に少女は目を閉じた。

「——うぐあっ!!」

自分の呻き声と頭の痛みで少女——茨田弥々華^{まつだもちか}は目を覚ました。体を起こし、頭を抑えながら辺りを見回す。

背後のベッド。

正面の本棚。

右側の机と椅子。その奥の窓。

「夢？」

小さく呟いた言葉は図らずも掠れていた。

「痛たた」

弥々華は同じトーンの声で吐き出すと腰をさすりながら立ち上がった。

あんな夢じゃ二度寝する気にもなれない。

舌打ちしながら顔を洗い、長袖の黒いＴシャツとジーンズと言うラフな服装に着替える。

お腹減った。

食堂に朝ご飯でも食べに行こう。

弥々華はそう思い机に置いてあった携帯電話を取る。

「うわっ!!」

弥々華は跳ね上がる心臓を抑えた。

畜生!! 誰だよこんなナイスタイミングで電話かけてきた奴はあ。

腹立たしげに携帯を開くと液晶には『署長』の文字が踊る。

「げ……仕事かな？」

明らかに嫌な顔をしつつ弥々華は通話キーを押した。

同じ建物に住んでいるのだから居留守や着信拒否も無駄に過ぎない。

「はい。もしもし」

【茨田だな? 任務が入った。10分後に署長室に来い】

「了解……」

弥々華はいかにも面倒くさそうな声で言い残すと電話の電源キーを押し込んだ。

食堂にご飯食べに行く暇は無いか。

弥々華は冷蔵庫から固形栄養食を取り出すと缶の紅茶で流し込む。
1分で朝食は終了。

クローゼットから制服の黒いコートを取り出すと勢い良く羽織り標準装備の入ったウエストバッグを腰に巻き付ける。

さらに靴に足を蹴り込むと、少女は後ろ手でドアを締めた。

「入れ」

ノックに答えた声はシリアスな低音。少女はドアノブを捻ってドアを押した。

音もなくスムーズにドアが開く。

ドアの前に置かれた机。その後ろに座った男性の名前と階級は机に乗ったネームプレートが示していた。『リドアイル キース 空間管理兼能力者派遣部署署長』。異様に長い肩書きの青年に弥々華は頭を下げた。

「おはようございまーす」

「残念だがもう昼だぞ」

間髪いれず返したのはリドアイルではない。立っていたもう1人の青年を弥々華は力を込めて睨み返す。

ティト イクス。

弥々華が所属するA-113小隊の小隊員。青髪青眼を持つ背の高い男だ。

「昼まで寝てたのか？ にしては身長変わってねえみたいだけど」
彼が発した皮肉に弥々華はたじろぐ。

「おま……身長が1日2日で変わるかつ」

弥々華の頬が赤く染まる。

クソッ自分がちょっとばかりせが高いからってバカにしゃがってえ
く！！

弥々華は今にも沸騰しそうな心を必死に抑えた。

「そんな事は知ってる。それともオレがそんな事も知らないバカだ
とでも思ったのか？ 身長が足りない奴は脳みそも足りないんだ
な」

「うつさい！！ 身長と脳みそは関係無いし！ って言うかそん
ぐらい知ってるわ。 バカテイト」

我慢は終わり即座に沸騰。機関銃のように反論が発射される

「いい加減にしろ！！ 任務の説明をさせてもらいたいのだが」
怒声を上げたのはキースだった。

「「スイマセンでした」」

弥々華とテイトはキースを注視すると観念したように頭を下げた。

T o b e c o n t i n u e d

第一話 多分これが全ての始まり（後書き）

オリキャラしか出ていせんがちゃんと原作のキャラクターも登場します。

感想お待ちしています。

一言やツッコミ。荒らしでない批評も受け付けています。

第二話 任務開始

「それでは任務の説明を——」

「ごめんなさい！！ 遅れました」

突然降って湧いた大声に弥々華は思わず振り向いた。

「あ……リップ」

額からうつすら汗を流し、頬を紅潮させた少女が頭を下げていた。濃い緑の髪が風に揺れている。

「だ……大丈夫か？」

ティトがリップと呼ばれた少女に駆け寄る。

リップは「大丈夫だよ」と言いながらティトの肩に捕まった。

いくら幼なじみだからってこの扱いの差は無いんじゃないの？

流石に。弥々華はなんだか悔しくなり腕を組む

「署長。遅れてごめんなさい。寝坊してしまいました」

「次からは気を付けろよ」

「はい」

リップはティトの肩から手を話すと弥々華の隣に立った。

「はあ……これで全員だな。まあ良いか、任務の説明を始める」

キースはそう言つと机の上に溜まったたくさんの書類の中から数枚を抜き出した。

「今回の任務は空間から消失した人間^{ロスト}の搜索、及び原因の究明だ」

また面倒くさい任務なこと。

弥々華は明後日の方向を見やる。

「それで失踪者なんだが……」

キースの顔が明らかに曇る。

「これを見てくれ」

弥々華に手渡されたのは1枚の書類。

「失踪者リスト？」

それは名前がずらずらと羅列されているだけのごく簡単な書類だっ

た。

「アレノ ウォーカー・リナリー リー？ ラビ・神田ユウ・ブツ
クマン・アレイスター クロウリー 3世・ハワード リンク、朽
木ルキアに阿散井恋次！？」

一気に読み上げた声が裏返る。

「署長！！ なんの冗談ですかこれは！！」

「弥々華……落ち着きなつて」

「うつさい、リップ！！」

「落ち着け！！ 茨田ッ」

急に怒鳴られ、弥々華の体は思わず硬直した。

「アドバンスの言うとおりだ。少し落ち着け」

キースは小さくため息を吐くともう1枚の書類を振る。

「残念だがこれは冗談じゃない。黒の教団や護廷十三隊から搜索依頼が来てる」

キースは椅子に腰掛け直す。

「少し落ち着いたな」

「……はい」

弥々華はさつき裏返った声で怒鳴ったせいか、署長に怒鳴られたせいか声が出なかった。

「失踪したのは昨日の20時から翌朝9時の間だ。詳しい事は向こうの責任者に聞くように」

キースは目を閉じながら最後の書類を折る。

「とりあえず分かっている事は以上。なにか質問は？」

特に無いので弥々華は無言で時計をチラリと見た。

時計の針は12時30分を差している。

「それじゃ弥々華とティトは教団、リップは瀨霊廷に行くように。話は通してある。あとそのリストは持ってって良いから」

「……ティトと一緒にだよ。」

弥々華はあからさまに嫌な顔をした。

キースはそれを黙殺する。

「……はい」

弥々華、リップ、ティトは返事を返し、部屋から退出しようとした。

「幸運を祈る」

署長の穏やかな呟きに弥々華は背中を押された気がした。

「なんでお前と一緒になんだよ」

ここは空間転移室。平行世界を行き来する『空間転移装置』のある部屋だ。

「あたしが知るか。恨むなら署長でも恨んだら？」

弥々華は適当に返しながら空間転移装置にくつついたキーボードに文字を打ち込んでいく。

空間コード『D G - 1 1 ・ A b l a c k o r d e r 』。

よしこれで間違いナシつと。

弥々華はエンターキーを人差し指で押し込み近くの指紋読み取り装置に手を叩き付けた。

「ほら、いつまでうじうじしてるんだよ。置いてくぞ？」

「うっせー。うじうじなんてしてねえよ」

ティトは呟くように言つと空間転移装置に駆け込んだ。

「つまりこういう事ですね。アレン達が任務に行った。そしてイノセンスと思われる物質を発見、その後消息が掴めなくなった」

「かい摘んで言うそうだね」

弥々華の言葉に陰鬱な顔をしたコムイ室長が頷く。

AKUMAと呼ばれる生物兵器を狩るエクソシスト、彼らを率いるトップとは思えない表情だ。

その理由は溺愛してる妹が行方不明者の1人になってしまったからだろう。

「それで場所は？」

「ロンドンの郊外だよ。ここから方舟を使って、そこから馬車で1時間くらいのところだ」

「馬車っすか」

ティトの顔が明らかに曇る。

「あれ嫌いなんだよなあ」

弥々華にしか聞こえない小さな声でティトが呻いた。

「方舟は使えますか？」

「勿論、すぐ使えるように準備してあるよ」

「分かりました」

弥々華はそう言って立ち上がった。

ティトも立つ。

「弥々華君、ティト君。必ずみんなを見つけ出してくれ」

「分かってます」

出た声は酷く冷静だった。

「心配しないで、室長。Apd scoの威信に掛けて必ず見つけ出します」

弥々華とティトは軽い礼をし室長の部屋を後にした。

「やっと着いた……」

かなり前に敵から奪った空間転移装置『ノアの方舟』、馬車を使い継ぎ弥々華とティトは森の前にたどり着いた。

弥々華はコートの襟元に首をうずめる。

ちなみにさっきの死にそうな声はティト。どうやら馬車に酔った様子。

「これだからこの世界は苦手なんだ」

「あんまり愚痴んなよ。カッコ悪い」

確かにこの世界は文明が遅れている。19世紀末程度のレベルらしい。

とは言っても文句を言われて笑ってられるほどじゃない。そのくらい弥々華はこの世界が好きだった。

「行くぞ」

ティトの声に弥々華は現実に戻る。

そうだ。行かなきゃ。

弥々華とティトは森の中に足を踏み入れた。

森の中はあんまり明るくないけどまだ歩きやすかった。

ティトが能力『龍炎翔苛^{りゅうえんしょうか}』の炎で足元の雪を溶かしていることが大きな理由だ。

ただし寒さと妙な沈黙が続くせいで弥々華には結構大変に感じた。

どのくらい歩いただろう。

「疲れた」

足が冷たく顔が冷気で痛い。何より倦怠感が体を包む。

「根性無し」

ティトの声に弥々華は口を開いた。

「うつさい」

弥々華が口を開くと倦怠感が少し楽になった。

そしてまた沈黙。

テイトが雪を溶かす焼けるような音と足音だけが響く。

「もうちょいかな」

「知らね」

「テイト」

「なんだ」

「しりとりする？」

「誰がするか」

「喋れないと気が変になりそうなんだもん。こんなに静かだとね」

「オレは静かな方が良い。理解したら黙ってる」

「理解しなきゃ喋り続けていいの？」

「発狂してもいいから黙れ」

「それひとつ」

会話はそこで強制終了。

弥々華は斜め上に目をやると口を閉じた。

また無言で歩き出す。

相変わらずテイトは酷い。なんでこんな奴と小隊組んでるんだろ。

そっぴや A p d s c o でテイトとリップと署長しか知ってる人いな
いっけ。

自分の交友の狭さに弥々華は頭を抱えてしまう。

「うわッ！」

考え事をしているとなにかに固いものにぶつかる。

「テイトか。なにいきなり立ち止まってんのさあッ」

「ボケツとしてるお前が悪いんだろ。とにかく見ろ、これ」

テイトが指差す方向に自然を移す。

「足跡？　しかもたくさんある」

「これ、行方不明者の足跡じゃねえか？　新しすぎる訳でもねえ

し、古くもねえし」

「そっかも……この足跡サイズもばらついてるし」

「とりあえず足跡辿るか。なにか掴めるかも知れねえ」

「そうだね、そうしよう」

「ここ……」

森が途切れた。足跡はまだ続いている。
目の前には広い雪原。
そして。

「夢と……同じ？」

真っ黒い巨大な石碑があった。

「どうした？」

弥々華は急な脱力感に体を折る。

「テイト」

「なんだ」

「ここ、やだ。怖い」

「あの石か？」

「うん」

弥々華は思わずしゃがみ込む。

「夢見たんだ。春とか夏の景色だったけど、ここと同じ場所の」
鮮明に夢で見た景色が蘇る。

「みんなは、あの中にいる」

弥々華は石碑を指差して叫んだ。

「アレの中にいるんだッ！！」

「落ち着けよ、あの石は建物の入り口か何かなのか？」
テイトが弥々華の手首をつかんだ。

「違う。多分空間転移装置の一種かも。夢の通りなら」
テイトに引かれるまま弥々華はゆっくり立ち上がる。
「触れば分かるかも」

「そうか」

ティトが弥々華の手を引く。

石碑にだんだん近付いていく。

「夢とか……正気か？」

「多分正気だよ。多分ね」

「そこを念押しするなよ……」

石碑の大きさも色艶も明らかに夢と同じ。この状況に弥々華は混乱していた。

「とりあえずリップに連絡すつか。もし同じ物がありや可能性も高
いだろ」

「さんせー」

ティトはウエストバッグから携帯を取り出すと少しボタンを押し耳
に当てた。

「あ、リップか？」

通じたようだ。

「ああ、現場に着いたんだが妙な物見つけてな。黒い馬鹿でかい石
なんだが」

ティトは俯き神妙な顔になる。

「そつちにもあるのか！？」 いや実は弥々華が『夢に見た』だの
『空間転移装置だ』だの言い出すからよ。コイツ予知能力はもつつ
ねえだろ？」

ティトはしばらく石碑について話していたが突然マイクに手を当て
た。

「弥々華、どうやったら使えるんだ」

「多分触ればいい。でも気をつけて。一度触ったら出口まで抜けな
くなるから」

「分かった」

ティトは頷くとまた説明を始めた。

「嘘だろ。それは。いや……分かった、やる」

最後はなんだか訳の分からない言葉を呻くとティトは電話を切った。

「弥々華、リップが中に入れたと」

「リップはどうするの？」

「向こうで落ち合おうだってよ」

ムチャクチャだ。同じ所に繋がってる確証は無いのに。

弥々華はげんなりした顔をする。

「電話もあるしなんとかなんだろ。それともおチビさんは怖いのかな？」

ティトがなんとも言えない目つきで弥々華を見た。

「あたしが怖いのは夢との一致だけ。他は怖くない」

「それではレディファーストでどうぞ？ おチビさん」

「こんな時に紳士すらされても嬉しくないよ？ バカティト」

なんだろ？ □喧嘩したら俄然元気出てきた。

弥々華は小さな笑みを浮かべた。

「ま、お言葉には甘えさせてもらうけど」

弥々華は石碑の前に立つ。

深呼吸を1つすると石碑に両手を押し込んだ。

力も入れずに手は吸い込まれて行く。

やっぱり夢と同じだ。

弥々華ティトの顔が見たくなり後ろを振り向くと想像通りティトは驚いていた。

なんかざまあみろって気分になる。

弥々華は前を向くとそのまま歩みを進めた。

全身が埋まって1歩2歩。

さらに歩いて3歩4歩。

ティトの気配を背中を感じて5歩目を踏み出した時、弥々華は何かを忘れていた気がした。

指先にひんやりとした何かが当たる。

ちよつと待て。この展開は……まさか。

「落ちる？」

弥々華は後ろを向こうとするがティトの肩らしき場所が体に当たる。

足がもつれる！！

「ちょ！！ やだ」

転ぶ！！

弥々華の体が空中に飛び出し、床が消える。

「いやあああああゝ！！」

弥々華は絶叫した。

このままじゃあたし……マジで死ぬ！！

「うおおあああああゝ！！」

タイトの悲鳴も聞こえる。

あはは……いよいよあたし死ぬんだな。

自暴自棄が冷静か。

地面に打ちつけられペースト状の塵になる自分の末路が脳内にちらつきながら弥々華とタイトは真つ逆様に落ちていった。

T o b e c o n t i n u e d

第二話 任務開始（後書き）

まずは本文中に登場した『署長』の説明をさせて頂きます。

署長はリドアイル キースという名前の男性で弥々華、リップ、テイトの上司に当たる人です。

最年少でA p d s c oでももつとも大きな空間管理兼能力者派遣部署の署長を勤める切れ者で、能力者でもある。と言う設定です。

感想、お待ちしています。

荒らしを除く批評や一言でも構いません。また本編中の質問や疑問にもお答えいたします。

それではまた次回、お会いしましょう。

第三話 世界の正体（前書き）

祝！ P V ・ 5 5 0 アクセス & ユニーク ・ 2 0 0 人突破。
皆さん応援ありがとうございます。

第三話 世界の正体

ぐんぐんと近付いてくる大地。

風を切る音だけが弥々華の耳に木霊する。

絶叫が糸を引く。

喉も心臓が限界に近付いていた。

あー、ダメだこりゃ。

弥々華は人生をあきらめ眼を閉じた。

「弥々華アーッ！！ テイトオーッ！！」

どこからともなく少女の悲鳴が聞こえた気がした。

ボスッ。

間の抜けた音と共に弥々華の体に衝撃が走る。

そしてまたぼすっと言う音。

弥々華はうつ伏せのまま首を捻った。

「テイト？」

横にいたのはテイトだった。

四つん這いになって頭を降っている。

「ここどこ？」

弥々華はゆっくり起き上がる。ケガの無さに吐き出したのは安堵のため息だ。

「2人とも大丈夫？」

突然振ってきたメレンゲ菓子のような声に弥々華とテイトが振り向いた。

「リップ」

2人の声が重なる。

「助けてくれたの？」

「そうよ」

リップは茶目つ気のある笑みを浮かべると腰を下ろした。

リップがいるという事は、この柔らかい空飛ぶ絨毯はリップが能力『符術紙鬼』で作った物だろう。

空中で発動できるリップが今本当に羨ましいと弥々華は考えた。

「んで？　ここはどこなんだ？」

テイトの声に弥々華とリップが顔を見合わせた。

「さあ」

「私も落ちてきたばかりだからね。とにかく降りた方がいいかも」
リップはそう言って舵を取る。

地面がゆっくりと近付いてきた。

到着したのは小さな公園だった。時間のせいか人気は皆無に等しい。全員が降りるとリップが能力を解く。長方形の紙吹雪が辺りに舞う。

「で……ここは何処なんだろうね」

リップは周りを見回しながら問た。

「分かんないけど現代と言う事は間違えないんじゃない？」

弥々華は周りを見回しながら言った。

車が走る音や遊具の雰囲気から見て間違えないだろう。

「空間コードとか分かる？」

「今検索かけてるがしばらくかかるな。早くてもあと10分はかかるだろ」

テイトは携帯をいじりながら肩をすくめる。

「行方不明者はここにいるのかな」

「あたしの予想ではね。とりあえず探索に行った方がいいかも。テイト、そのまま歩ける？」

「大丈夫だ」

「それじゃ別れて探そう。1時間後にここ集合って事で」
「ちよつと待つて。その前に1つ言いたいことがあるの」
「何だ？」

「あのね。あの黒い石碑あつたでしょ。あれ、空座町にも出たつて」
リップの言葉に弥々華は頭を抱えた。

「じゃあ何？ 行方不明者増えてるかもつて話？」
「そう」

「分かつた」

弥々華は嫌な顔をしつつも頷いた。

「気をつける。それじゃまた後で」

弥々華はそう言つて公園を後にした。

どうやらこの辺は住宅街らしい。人気は無く、小綺麗な家が並ぶ。
暑いな。

弥々華は着ていたコートを脱ぎ腰に巻いた。
長袖のTシャツでちょうどいい記憶だった。

「待てえー！ーッ！ー！」

後ろから唐突に男のような低い怒声が響く。

バタバタと言う派手な足音と共に。

「なんだ？」

弥々華は思わず振り向いた。

「痛でっ！ー！」

走るときに振られた手が弥々華の鼻を強打した。

「わりい！ー！」

「ごめんなさい！ー！」

「すいません！ー！」

「ム……」

「ふぁ？」

鼻を押さえながら振り向くと小さくなっていくオレンジと黒と胡桃色の頭。

黒い着物に刀を背負った男と細いワイシャツを着た男が後ろを歩いている。

「一護？」

「あ……大丈夫ですか？」

ポカンと2つの後ろ姿を見ているといきなり声をかけられた。声の主は人の良さそうなお巡りさんだった。

「大丈夫ですか？」

「平気ですけど。それよりあの人達をなんで？」

「いやオレンジ髪の男の方が交番の前で変な武器を持ってうるついていたからね。怪しいと思って職務質問したら逃げたんだ。それよりキミあいつらの知り合いかい？」

「あ……ええ。そうです」

「良かった。じゃ署に来てもらえないかな？ 話を聞かせてもら

いたいんだよ」

その職業熱心さに弥々華は露骨に舌打ちしそうになる。もちろん未遂だが。

「あ……急ぐから、行かせてもらえませんか？ 交番には行けないです」

弥々華はニコニコと愛想笑いを貼り付け、必死に断った。

早くしないと見失う！！

焦燥感を抑えるのに必死に取り繕う。

「いや、ここから近いしすぐに終わるから。お願い出来ないかな？」

「すぐに行かないとだめなんですよ」

「本当に頼めないのかい？」

追いつめられた弥々華は思い切り息を吸い込んだ。

「あー!! あつちにさっきの4人組が!!」
思いつきり明後日の方向を指差して叫ぶ。

「あ? どこだ!!」
それと同時に踵を返しオーラを足に集め一気に撒き散らす。
コンクリートが壊れる音を立て弥々華はそこから姿を消した。

「はあ…… やつと撒けた」

弥々華が肩で息をしながら立つのは民家の屋根の上だ。
能力者流の高速移動術である歩術の連発はさすがに疲労が溜まる。
とはいえさっさと見つけなければ。

弥々華は深呼吸すると、足を踏み出した。

こうなりや空から探すまでだ。

弥々華は2、3歩助走を付け屋根の端から踏み切った。
体は空に舞う。

腕を緩やかに動かし体は上昇。

地面から踏み切らなければ使えない飛行能力にほとんど嫌気が差し
ながらも素早く5m程の高さまで舞い上がる。

あとは行方不明者を探し出すだけだ。

「おい、石田?」

「なんだ、黒崎」

併走する黒髪の男——石田雨竜いしだうりゅうにオレンジ髪くろみぎの男、黒崎一護は声を
かけた。

「ここ、空座町じゃねえよな？」

「そうだろうね。今気付いたのかい？」

蔑むような石田の口調に一護は黙りこくる。

「霊子^{れいし}が薄いし奇妙な霊圧^{れいあつ}もたくさん感じる。その上この辺りの道も見覚えが無い。こんな場所を空座町とい——」

「——なげーよ。話が」

石田を遮り、一護は前に出た。

「おい、井上。大丈夫か？」

さつきから小1時間は走っている。女性である井上織姫^{いのうえおりひめ}を一護は気にかけた。

「平気だよ。黒崎くん」

井上はにこりと微笑みかける。

「そうか」

一護も表情を緩める。

「……ム？」

「どうしたんだい？ 茶渡君」

立ち止まったのは褐色の肌をした厳つい男、茶渡泰虎^{ちやうたいこ}だ。

「なにか来る」

その言葉に石田の顔が引きつる。

「やっぱりこの霊圧か」

かれらの後ろの空間が音を立てて裂けた。

「みんな！！ 良かったあ合流できて」

ここは公園から離れた住宅地。

リップはやつとの思いで7人のエクソシストとの合流に成功した。

「リップ。ここはどこなんですか？」

「分からないんだ。ティトが調べてる」

リップに声をかけた少年はアレン　ウォーカー。白髪が儚げな印象を与える少年だった。

「そうなの……あとの位で分かるのかしら？」

そう言った少女はリナリー　リー。ボブカットの黒髪が凛とした表情を際だたせている。

「多分なにもなければもう少しかな」

「そうですね。早く帰らないと室長にご迷惑を掛けますね」

堅い口調はハワード　リンク。長い金髪を後ろで三つ編みにした青年だった。

「チツ。まだ帰れねーのか」

あからさまな舌打ちを漏らしたのは神田ユウ。かんだ長い黒髪を後ろで1つに結んだ青年だ。リップのチームメイトでもある。

「まあまあ、神田。必ず帰れるからさー。大丈夫大丈夫」

「うるせえ」

神田をなだめた赤毛の青年はラビ。眼帯を右目に着けている。

「そうであるよ、神田。イライラは体に毒である」

ラビの横に立つのはアレイスター　クロウリー　3世。前髪だけが白い黒髪という特異な髪型をしていた。

そして我関せずの表情で辺りを見回しているのはブックマン。小柄な老人でラビの師でもある。

そしてエクソシスト達はほぼデザインが同じ服を身に着けていた。制服のようだ。

「あつー！」

リップが急に驚いた顔を見せた。

ポケットから流れるのは滑らかな和音。

「電話だ。ちよつとごめんね？」

リップは電話の通話ボタンを押すと携帯を耳に当てた。

「ティト？　場所わかった？」

【ティト。ここどこなのさ？】

【弥々華、リップ。聞こえるか？】

どうやら3方向同時通話をしているらしい

「【聞こえるよ】」

返事は弥々華とリップが意図せずにハモる。

【とりあえず空間コードが分かったから連絡する。空間コードは『K-66』だ】

「ってことはケロロさん達がいる世界って事？」

【だな。ありがたいことにここは奥東京市内。ケロロ軍曹の基地に行けばすぐ帰れるぞ】

【マジで！！ やった】

【それじゃ2人とも、誰か見つけたか？】

「アレン達を見つけたよ」

【オレも阿散井副隊長と朽木女史を見つけた。弥々華は？】

【一護達を見つけた。でも合流はしてない】

【分かった。合流したら日向家集合でいいか？】
ひなたけ

【了解】

「うわっ」

そこで突然アレンが悲鳴を上げた。

「どうしたんさ！！ アレン」

「AKUMAです」

アレンの目に単眼鏡モノクルのようななにかが浮き出た。

「2人とも！！ 回線開けっ放しにしてて」

リップが電話に向かい怒鳴る。

「どこに出たの？」

「ここから5km先。南です」

【現在地は？】

弥々華の大声がスピーカーを揺らす。

「えっと……」

リップは電話を保留にし検索を掛ける。空間コードが分かっている
ので検索はすぐに終わった。

リップは住所を叫んだ。

【了解。すぐ現場に行く】

【オレはどうする？】

【恋次達連れて避難しろ！！】

【了解】

そこで回線は切られた。

「リナリーとラビはイノセンスで先行って！！ 他のみんなはこれに乗って！！」

リップは符術紙鬼で空飛ぶ巨大符を呼び出すと全員をそれに乗せた。「間に合って」

リップは小さく呟いた。

T o b e c o n t i n u e d

第三話 世界の正体（後書き）

どうも！！ 作者です。

今日は読者の皆様の疑問にお答えしたいと思います。
まずは百鬼丸さんからの質問。

それでケロロ達とアレン達と一護達は、いつになったら会えるんですか？

お答えします。もうすぐです。

多分次回にはなにか起こるんじゃないかと思っています。
何かしらの出来事は起こすつもりです。

続いてmega12さんからの質問。

（余談ですが、行方不明者達は、もしかしてケロロ軍曹の世界に行っちゃたりしてます？あくまで予想です。）

余談とかかれていますがお答えします。

今回のお話にもかかれているように答えは『はい』です。
ひねりの無い展開でごめんなさい。

ただ今までの話で匂わせられるようにはしたつもりなんで分かってもらえて嬉しいです。

とここまでが質問コーナーです。

まだまだ、質問や感想などはどしどしお待ちしていますので皆さんお気軽にどうぞ。

それでは皆さん、また次回お会いしましょう。

第四話 死霊の宴

一護は出刃包丁に似た刀『斬月』を背中から抜く。

ざわりざわりと空間が裂け始めた。

「チャド、石田。井上連れて逃げる」

一護が感じ取るのはいつもとは違う、違いすぎる何か。

それは全員が痛い程感じていた。

「分かった」

頷いたのは石田だった。

「ここは君に任せる。命令されるのは癪しやに触るけどね」

「いいから早く行け」

「黒崎くん」

「なんだ、井上」

「必ず戻ってきてね」

「ああ」

優しく緩む一護の顔に緊張が走る。

「来やがったか」

3人が離れて行くのを感じつつ、一護は残月を構えなおした。

空気がざわめく。

裂け広がる黒。

割れた窓ガラスのように空間に穴が開いた。

「なん……だ？」

現れたのは数名の男女だった。古めかしい西洋の格好に身を包み、

皆生気の無い顔をしている。

「ターゲット……ミツケた」

吐き出されたのは片言の言葉。

次の瞬間、男女の顔に血管が浮き出る。

「コロセ」

言葉と同時に男女の体からコードや機械の部品が飛び出し『皮』が

はじける。

人間と機械が融合するおぞましい光景。

一護は生まれて始めて見る異形に言葉を失った。斬月を握り直す。

「なんだよ……あれ」

いつも相手にする悪霊『ホロウ虚』とは違う。

それどころか見覚えも無い敵に一護はたじろぐ。

現実の範囲を超えたそれに、一護は脳内は追いつけずにいた。

「ありえない……なんとかしなきゃ」

小さく呻くのはリップ。

空中に舞う巨大符の上にはラビとリナリーを除くエクソシスト一行。

「誰か死んだら洒落になんない」

追いつめられたような表情。

異変が起こり始めている。

「リップ？」

「なに？ アレン」

リップは相変わらずの固い表情でアレンを振り返る。

「『この世界』は僕たちの世界では無いんですね」

「そうだよ」

「AKUMAがなぜ現れたか分かりますか？」

リップは逡巡する。

「今は分からないかな……でも何か厄介な事は起きてると思う」

「厄介な事？」

リップは無言で頷く。

「急がなきゃダメ。何も起こらないうちに——」

何かがこすれる音が辺りに響く。

「なんだ？」

神田が顔を上げた。

ノイズのような音が鼓膜を叩く。

「来る」

リップが焦燥した声を出す。

「あれはなんであるか！？」

クロウリーが指差す先にはアーモンド型に黒く裂けた空間。

そして無数に浮かぶ白い円。

「逃げるよ！！」

リップは必死でオーラを符に流し込む。

加速するそれを追いかけるように白い仮面をかぶった虚は放たれた。

不意に、爆音。

異形の体に埋め込まれた弾丸が辺りを蹂躪して行く。

「大槌小槌、満・満・満！！」

次いで少年の声と何か大きな物が降る音。

「ぐ……な……」

一護は無意識に顔を覆った腕を外す。

目の前には白黒の縞模様の壁。そして赤髪の少年。

「大丈夫さ？ アンタはあるみたいだけど、アレに手え出すのはまずいんじゃない？」

眼帯の少年は一護に微笑みかけた。

「お前……誰だ？」

「オレはラビ。ブックマン見習いのエクソシストさ。で、アンタは？」

「俺は黒崎一護。死神代行だ」

一護は淡々と名乗る。

「死神代行？ まあいいさ」

ラビは槌を素早く縮めた。

向こう側は砂煙。

「リナリー？ そっちは終わったさ？」

「ええ。その人は大丈夫かしら」

砂煙を破り現れたのはボブカットの可愛らしい少女だった。

「こんにちは。大丈夫ですか？」

履いていた赤黒いブーツがアングレットの姿に変わる。

「あ…… ああ。大丈夫だ。それより——」

「あーッ——」

空から響く声に全員が思わず上を見た。

「一護ここにいたんだ！！ よかった」

「弥々華？」

一護は斜め上を見たまま空気を読まない訪問者にため息をついた。

「右です！！」

リンクの声に従い、符は右に旋回する。

「なんなんですか！？ アレは」

アレンが符にしがみつき呻き声を上げた。

「あれは虚！！ 悪霊だよ。詳しい事は後で話すから」

「「悪霊！？」」

アレンとクロウリーが引きつった声を出す。

そのまま符が宙返りしたため、2人の言葉は途切れたが。

左右上下、縦横無尽に駆け抜ける符に全員が必死でしがみつく。

「誰か…… 誰か助けてえッ！！」

リップが悲鳴を上げた。

追いつかれる。万事休す。

「初の舞、月白！」

凜とした声が辺りに響く。

符が通過した場所が丸く凍りつき、砕ける。

虚が数十体、巻き込まれ消えた。

「なんですか？」

リンクが地面を凝視する。

飛び上がったのは黒い影。

「吼える！！ 蛇尾丸」

目に焼き付くような赤い髪青年が日本刀を振り回す。7つに分かれた刃節が虚を切り裂き塵に帰す。

「退いて下さい！！」

空気を裂くのはティトの大音声。

「龍炎翔奇発動！！ 食らえッ滅渦神炎」

地面から吹き上がる青い炎が残りの虚を焼き尽くした。

「……すごい……すごいである」

「チッ」

対照的なクロウリーと神田の弦きが戦闘の素早さを引き立てた。

「ククッ。面白い奴らがあつまったんじゃね？」

街の様子が映し出されたモニターが機械仕掛けの牙城を照らしている。

そして城主は小さく笑う。

「またなにか起こりそうだぜエ」

耳に付けられたヘッドホンを片手間にいじりながら黄色いカエルに

似た青年はモニターを眺めていた。

「んふふ。アノ子達結構強いからね」

地面に降りたリップ達を見下ろすビルの上。

双眼鏡を覗く豊満な体を赤い挑発的なチャイナドレスで包んだ女性がニコニコ微笑んだ。

官能的な唇が綺麗な三日月を描く。

「良いわよね。あーゆー子。早く壊したくなる」

女の青い眼に差す残酷な光。

「調子に乗るなよ。月^{ユエ}。ナスカ様に命じられたのはあくまで見張りだろう」

月と呼ばれた女性は明らかにムツとした顔をした。

「うるさいわね。ジュエル。分かってるわよ。ただ、抑えきれなくて」

月は自らの体を抱きしめる。

「壊したい、壊したい、壊したいって体が疼くのよ」

その姿を見たジュエルは明らかにため息をもらす。

「全く。貴様の殺人嗜好には呆れる」

ジュエルは薄茶色の髪を指先で解くとまた焦げ茶色の視線を斜め下に走らせた。

深い紺色のスーツが風に揺れた。

「どうしたの？」

「『作戦は成功した』。撤退するぞ」

「了解」

月は唇を尖らせたもののごねる事無く立ち上がる。後ろに開いた空間の裂け目。

そこに飛び込むように2人は身を踊らせた。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

第四話 死霊の宴（後書き）

次回はいいよへっぽこ宇宙人が本格参戦！？
そして謎の美女の正体とは……。

次回もお楽しみに。

感想お待ちしてます！

一言や荒らしを除いた批評でも構いません。

第五話 第三種接近遭遇（前書き）

大ッ変更新が遅くなつて申し訳ありません。
第5話スタートです♪

第五話 第三種接近遭遇

「オレ達エクソシストは千年伯爵が人類を滅ぼす為に造った兵器『AKUMA』に唯一対抗できる唯一の存在なんさ」

ラビの口調はどこまでも軽い。

「んでAKUMAつつうのは死せる人間の魂、その魂を呼び戻した人間の体、最後に千年伯爵が準備するダークマターの骨組みが必要で、骨組みに宿った魂が生きた人間の体に入る事で完成し、殺人を犯すことで進化していく。ここまで分かるさ？」

「ああ。なんだか虚みたいだな」

リナリーがその言葉に首を傾げる。

ラビはそれを見無視すると言葉を繋げた。

「そしてさつき現れたのはレベル1。最下級のAKUMAでエクソシストならわけなく倒せる」

「AKUMAつつうのはイノ……だかつてやつでしか倒せないのか？」

「そう言う事」

弥々華が顎を軽く引く。

「普通だったら別の世界には来ないんだけどね。こんなこと初めてかも」

弥々華の言葉に3人は黙り込む。

「まっ…… Appsc o がちゃんと対処するし、みんなにはあんまり関係ないからご心配なく」

弥々華は茶化した口調で言い放つとへらりと笑った。

「さてとそれじゃアンタが井上さんたちを探さなきゃね。一護、霊圧探れる？」

「いや」

一護は首を横に振る。

「そっか。じゃ携帯持ってない？ 井上さんたち」

「持っていないはずだ。確かな」

「えゝ。マジでえ」

明らかに嫌な顔をした弥々華はため息を1つ落とす。

「じゃあない。ルキアさんに頼むか」

弥々華がそう呟き携帯電話を取り出した時だった。

「弥々華あゝ！！ リナリー！！」

「「え？」」

弥々華とリナリーは一瞬顔を見合わせると斜め上を見上げた。

「リップ！？ それにみんな……なんで来たの」

少しばかり驚いた顔で弥々華は符から飛び降りる一同を眺めた。そしてポカンとした顔をしているのは一護も同じだった。

「ルキア！！ 恋次！！ なんてお前等がここにいるんだよ！？」

「たわけ。それはこちらの台詞だ」

「事情は後で教えるのでこつち見てもらえませんか？」

リップの声で2人は言葉を止めた。

「一護さん。他にこちらへ一緒に来た人はいるんですよね」

「ああ」

「ルキアさん、霊圧を辿って呼んできて貰えますか？ テイト、同行して。日向家で落ち合おう？」

「分かった」

リップはテイトとルキアの背中を視線のみで追う。

「アレン。AKUMAはもういない？」

「はい、大丈夫」

アレンが頷いたのを見てリップは視線を恋次に移す。

「恋次さん。虚は大丈夫？」

「ああ、もういねえな」

「よかった」

リップは小さく安堵の吐息を吐き出した。

「それじゃ、帰ろ？ 私疲れちゃった」

「そだね。じゃ、みんな着いてきて？
帰れるよ」
弥々華の背中で歓声が響き渡った。

「ねえ、弥々華。質問があるんだけど」

「なに？ アレン」

「さっき黒い化け物が襲ってきたんですけど、アレなんですか？」

「黒い化け物？」

弥々華は怪訝な顔をし、考える。

「黒い……黒い……黒い……ああ！！
白い仮面をかぶった奴の事？」

「仮面？ ああお面みたいなのやつなら見ました」

「虚のことね」

間髪入れずに入れられた言葉にアレンは首を傾げた。

「虚っていうのはいわゆる『悪霊』の事だよ。普通の幽霊が胸に着いた『因果の鎖^{いんが}』を失う事によって虚になる……ってどうした？

アレン

「幽霊……本当に幽霊なんですか？」

「うん」

弥々華の肯定を聞き、アレンの顔が加速度的に青ざめる。

「……大丈夫？」

「分かんないです」

恐怖に満ちた言葉。それに弥々華の悪戯心が煽られた。

「ちなみにそこにいる恋次や、さつきティトといなくなったルキアさんも幽霊みたいなものだよ」

「……え？」

「一度死んで、尸魂界……天国で死神になったんだってさー。」

「えーッ!!」

ニヤニヤ笑いの弥々華に青ざめるアレン。

「そして一護に至っては生きたまま死神になった……生き霊だね。彼は」

「……」

アレン、絶句。

弥々華は高笑いを上げながら振り向く。

「ま、みんな見た目はアレだけど良い奴ばかりだからさ。あんまり気にすんなよな」

「……はい」

アレンは相変わらず青い顔で頷いた。

「あそこが日向家だよ。空間転移装置が置いてある場所」

弥々華が指差す先には赤い屋根の民家があった。

どこにでもあるようなありふれた一軒家。

「弥々華、本気でこんな所から帰れんのか？」

「恋次。疑ってるの？」

「いや、そうじゃねえが」

「なら問題ないよね」

弥々華の笑みに押されるように恋次が1歩下がる。

「じゃ、いきますか？」

弥々華はそう言って日向家に足を踏み入れた、瞬間だった。

「誰だ」

かしやりと言う金属音。

「ギロロ？」

弥々華は斜め下に視線を移す。

ピコピコと言う足音。

「客か？」

低く落ち着いた声が近づいてくる。

「お客さんじゃないよ。『関係者』」

「関係者？ A p d s c o のか」

「うん」

さらさらとやりとりを繋げる2人に一同は首を傾げた。

「弥々華、誰さ？」

痺れを切らしたのはラビだった。

「あたしの同僚、ギロロ伍長だよ」

その声と同時に、現れたのは60cmにも満たない体躯の、二等身だった。

「弥々華、それなんであるか」

カエルに似たその顔にクロウリーが呻く。

「宇宙人」

ド直球な答えに、一護は無言で頭を抱えた。

「訳わかんねえ」

「弥々華、宇宙人ってあの『宇宙戦争』に出て来たあの宇宙人ですか？」

「そう」

アレンの顔が凍りつく。

全員が突然起きた未知との遭遇に言葉と顔色を失った。

「弥々華、ギロロさんたちの事なんで説明しなかったの？」

リップの問いが辺りに虚しく響き渡った。

T o b e c o n t i n u e d

第五話 第三種接近遭遇（後書き）

日向家にたどり着いた一同。

凍りつく彼らの運命とは……。

次回、いよいよ元の世界に戻る……か？

とにもかかわらず第六話、お楽しみに。

感想コメントお待ちしております。

一言や、ツッコミなどでも構いません。

また会員登録していない皆さんもホームページの拍手でコメント出来ます（活動報告にリンクあります）。

第六話 非常事態……発生（前書き）

お知らせです。

明日から（8月16日）から新学期の為、更新が週1〜2回位になります。

出来るだけ毎週1話書くようにしますのでこれからも応援して頂ければ幸いです。

第六話 非常事態……発生

人間、あまりにもありえない事が起こるとどうなるか。
答えはここにあった。

沈黙の後、起きたのは悲鳴。うめき声、もしくは絶句。一言で言うならば阿鼻叫喚。

弥々華は全ての状況を理解した上でため息を零した。

「流石に止めときゃ良かったかも」

日向家の玄関先で説明したのはギロ口の正体とエクソシストと死神について。

宇宙人の侵略者、しかも A p d s c o は彼らに協力している。
それを聞いた瞬間、恋次は口をポカンと開けた。

自分がいる団体と同じような立ち位置の団体が他でも無い宇宙人だったからだ。

一護や恋次の正体を明かした瞬間には、ギロ口は悲鳴を上げて顔を紫にした。もともと赤い顔がスツと青ざめたのだ。

幽霊が嫌いな奴にこの話はまずかつたかな？

弥々華は思わず頭を抱えた。

唯一、この騒ぎに乗らなかつたのはブックマンで「ほう」と言っただけ冷静な顔で居続けた。

「それでギロ口さん」

阿鼻叫喚のど真ん中にいてなお冷静な顔をしたリップが声を出した。

「中に入れて貰えますか？ 早くみんなを帰りたいので」

落ち着いたソプラノにギロ口はリップを凝視した。

「責任ならあたしが取る。だから頼むよ」

どこか疲れた弥々華の声。

「……ああ。分かった」

ギロ口は絞り出すように呻くと庭のテントに戻っていった。

「それじゃみんな、帰ろう？」

リップが近くにいた神田の背中を押し、2人は先陣を切る。
「リップ、道分かるの？」

リップはドアノブに手を掛け静止した。

「お先にどうぞ」

ドアを開けたリップは小さく頭を下げた。

「不法侵入にならないのか？　これ」

一護が呆れたような声で呟く。

玄関に入った弥々華があまりにも躊躇無く靴を脱ぎ、上がり込んだ事が理由だ。

「大丈夫だよ。ギロロに許可とったし。一応いつもこんな感じだし」
弥々華に続き、リップも中に入る。

「神田。靴脱がなきゃダメだよ」

土足のまま上がり込もうとした神田にリップが突っ込みを入れた。
「チッ」

神田は舌打ちを漏らすとブーツから足を抜く。

「みんなも靴脱いで上がってね」

リップが笑顔を向けたのは、他でもないエクソシスト勢だった。

「分かったわ」

リナリーもブーツを片手に中に入る。

そして全員が室内に入った。

弥々華が開け放たれた玄関ドアを閉めようと手を伸ばす。

「あ……待って！！」

「まだ閉めるな！！」

ふわりとした女の子の声と、凜とした女性の声に弥々華の手が止まる。

「井上さんとルキアさん？」

「ここですか？ テイトさん」

「はい」

ルキアが軽く振り向くと視線の先にはテイトの姿がある。
そしてその後ろには石田と茶渡の姿もあった。

玄関を越え、地下に潜る。

梯子の下は薄暗く、ひんやりしていた。

「地下室さ？」

「ここにあるんですか？」

「あるのはもつと下よ。入り口はここだけど」

リップがアレンとラビに微笑みかけるのを弥々華は横目でチラリと見た。

だがすぐにドアに向き直る。

握り拳で2回、ドアが叩かれる。

「隊長おゝ。いるゝ？」

弥々華の間延びした声に、恋次とルキアは怪訝な顔をした。

「弥々華殿？ なにしにきたでありますか？」

平然としたボーイソプラノ、そしてドアが開く音。

「……………。えっと……………」

弥々華の周りに立つ人たちをケロロ——カエル似の緑の二等身——は睥睨した。

「どちらさん？ でありますか」

「あたしの仕事仲間」

間髪入れない返答にケロロは首を傾げた。

「地下基地に入れて欲しい。元の世界に帰らなくちゃならないの。」

空間転移装置を使いたい」

あまりにもすらすらと出る頼み事。

「お願い」

真摯な弥々華の表情にケロロは表情を緩めた。

「いいでありますよ」

「あ……ありがとう」

あまりにもあつさり許可が貰えたことに今度は弥々華が面食らう番だった。

「じゃ、みんなこっち」

弥々華は相変わらず面食らった顔でケロロの部屋を横切る。

突き当たりまで来ると弥々華は急に立ち止まった。

弥々華の視線の先にはごく小さな冷蔵庫。

弥々華は冷蔵庫に手を掛け開ける。

「みんな、これに入って？」

弥々華が首を傾げるように振り向く。

「茨田さん。それ、冷蔵庫だろう？」

石田が啞然として口調で呻く。

「うん」

「これに入ってなんの意味があるんだい？」

「これが入り口なの。意味分かる？」

「なんのだよ」

一護の声に弥々華は笑みを浮かべた。

「地球侵略の前線地下基地」

「弥々華殿！　そこまで言っちゃダメでしょ」

ケロロの慌てた口調が弥々華の言葉を駄目押しする。

「分かったんなら中入って？　入ったらそこで待っててね」

全員がその指示に従ったことは言うまでもない。

「すげえさ」

「本当にそうですね」

「地面が動いているのである」

一行が乗るのはムービングウォーク、いわゆる動く歩道だ。

「そろそろ着くわよ」

リップが淡々と言い放つ。

全員が動く廊下を降りた事を確認すると弥々華が部屋の中に入った。開け放たれた自動ドアを数名がのぞき込んでいる。

弥々華はそこに据えられた巨大な機械の前に立つと目の前のキーボードに何かを打ち込んでいく。

カタカタカタツと軽快な音で打ち込み小指でエンターキーを押し込んだ……瞬間だった。

突然のエラー音。

耳を打つ長く大きなエラー音に弥々華は腰を抜かし、廊下にいた者達も耳を塞ぐ。

「弥々華……！　なんとかしろッ」

「分かってる」

ティトに切れ気味の一喝をかえした弥々華はよじ登るようにして立ち上がり、デリートキーとバックスペースキーを同時に押し込む。

「意味わかんねえ」

エラー音の止まった端末を弥々華は腹立たしげに睨みつけた。「リップ……！　本部に連絡」

「分かった」

短い言葉の後、リップは携帯電話を取り出し、青ざめた。

「圏外………ありえないよ」

「圏………外？」

テイトが慌てて自分の携帯を見る。

「普通ありえねえよ……こんな状況」

「どうした？ テイト」

「黒崎……悪いが問題が起きた」

またエラー音が響く。

「故障の可能性がある。何らかの介入によつてな」

「介入？」

「詳しい事は分からないけど……まずいよ」

リップがはつきりと呻いた。

弥々華は数度キーボードを動かすも再起動しない。

「くっそお！！ マジでありえないっ」

派手な音を立てて装置を蹴飛ばすも無意味に過ぎなかった。

「ああッ。最悪」

弥々華は苛立ちに任せて右手をキーボードに叩きつけた。

【おい】

空中に大音声がさらりと響く。

スピーカーで歪に拡大された声に全員が辺りを見回した。

「クルル？」

弥々華の脳裏に黄色い陰湿な顔が浮かぶ。

【ケロロ小隊及びその他大勢は司令室に集合しなァ】

あまりにも唐突な命令に一同は硬直する。

「その他大勢？ 誰のことだ？」

「私たちかもね」

神田の呟きにリップは茶目っ気のある笑みを浮かべた。

「ま……いいや。とりあえず着いてきて。どっらにしたってあたし、行かなくちゃなんないし」

弥々華はキーボードから手を放すと、廊下に飛び出した。

ムービングウオークに乗り、自動ドアを抜ける。

「うわ……… すごいな」

一護がポカンと口を開ける。

そこは宇宙船のブリッジを模した司令室だった。

小綺麗な部屋に4人の宇宙人が整列していた。一護達にとっては見覚えの無い、黒と青の宇宙人もいた。

「ここで待ってて」

弥々華は近くにいた井上に声を掛けると、ケロロに歩み寄った。

「隊長、何かあったの」

「いや、我輩にもさっぱりで」

ケロロはなんとも言えない表情で頭を掻いた、瞬間だった。

「やっと揃ったなア」

「ってゆーか全員集合？」

ケロロ達の前の床が開く。

そこから現れたのは黄色いカエル似の男とコギヤル風の制服に身を包んだ褐色の少女だった。

T o b e c o n t i n u e d

第七話　そして役者は出揃った（前書き）

久しぶりの更新です。

大っ変お待たせいたしました。

第七話　そして役者は出揃った

「――は完了しました。後はナスカ様が手を下されるだけで宜しいかと」

「……ああ。だが焦るのは良くない。俺が手を下す前にやらなければならぬ事は山ほどある」

「と、言いますと」

「シャドウを連れてこい。『K11計画』を始動する。」

「はい。分かりました」

「それと……お前は月とミラーを連れて例の場所に向かえ」

「了解しました」

「良い知らせを待っている」

「一体何匹いやがるんだよ……」

黄色い男を見た恋次がうめき声を上げた。

その声を聞いた黒い少年――カエルと言うよりはオタマジャクシに似た少年がケロロに耳打ちする。

「軍曹さあん。あの人達だれですか？」

「我輩にもサツパリ……。ただタママ二等、弥々華殿が連れてきたんでありますよ」

「弥々華っちが？」

タママと呼ばれた少年がケロロの後ろに立つ弥々華の顔を見つめた。

「なに？　タママ」

「あの人達だれですか？」

「あたしの仕事仲間」

間髪入れない返答に、タママは頭を捻った。

「仕事仲間？」

「そう」

「へー」

タママはあまり信じていないような視線で弥々華の顔を見た。

「タママ殿」

ゆったりとした落ち着いた声にタママは視線を移す。

「弥々華殿は嘘を吐いてはいないでござるよ。あの人たちは悪い人ではないでござる」

にこりと青いカエル似の男が微笑む。

とはいえ口元は覆面に覆われ見る事は出来ないが。

「ドロ口先輩が言うなら……間違えないかもですね」

ドロ口と呼ばれた男はまた柔らかい表情を浮かべた。

「話は済んだか？」

全員の前に立つ黄色い男が唐突に口を開いた。

「お前たちもコツチへ来なア」

男はゆるりと視線を動かすと、分厚いメガネに隠れた目で一護達を見据えた。

「大丈夫ですよ。ってゆーか呉越同舟？」

「呉越同舟って、なんで四字熟語なんだよ？」

一護は小さくツツコミを入れながら足を進めた。

「それで、なんの用でありますか？　クルル曹長」

クルルと呼ばれた男は陰湿そうに小さく笑う。

「弥々華の上司から通信が入ったぜエ」

「マジでっ！！」

躊躇無く弥々華が食いつく。

「何時？　何処で？　なんで？」

「本人に聞けよなア。ポチツと」

クルルが手元のマルチリモコンのボタンを押す。

【クルル曹長、ご協力感謝する】

目の前の巨大モニターに弥々華にとっては見慣れた顔が浮かび上がる。

【茨田、アドバンス、イクス。聞こえるか？】

リドアイル キースの落ち着いた声が司令室に響き渡った。

「聞こえます。署長」

リップが1歩踏み出しながら答えた。

【分かった。そこに関係者は全員揃っているかな？ クルル曹長】

若干のタイムラグを挟み、キースは質問する。

「もちコース」

【もち……？】

返された言葉にキースは首を傾げる。

「ああ。もちろんだつて事でありますよ」

【すまない、ケロロ軍曹】

キースは表情を変えることなく言葉を繋ぐ。

【黒の教団及び、護廷十三隊の諸君、君達に謝罪しなければならぬ
い事がある】

「なんさ？」

ラビが怪訝な顔をする。

【諸君をそちらの世界に送ってしまったのはこちらのミスだ】

「そちらのミスとはどういう事ですか！？」

ルキアが声を荒らげた。

【Resistance^{レジスタンス}】

急に発されたその一語で、弥々華・リップ・ティトが硬直する。

【彼らの罠に私たちは気が付けなかった】

「待って下さい！」

アレンが大声を上げた。

「Resistanceって何なんですか？」

【Resistance……能力者の世界を作ろうと考える過激派
だよ】

「テロリスト集団みたいなものよ」

リップがうめき声で補足する。

【彼らがあの石碑、簡易式一方通行の空間転移装置を設置した。そして我々の転移装置……そちらの世界にある全ての装置を破壊。君達をその世界に閉じ込めた。死神の実体化も、エクソシストの言葉が通じるのもそのせいだろう】

「なんで……んな曲がりくどいこと」

弥々華が絞り出すような声を上げる。

【とにかく、目立たないように生活して欲しい。直るまで恐らく1ヶ月は軽く掛かる】

「1ヶ月だつて!？」

石田が叫び声に似た声を上げた。

【そうか、君達——】

キースはその声でやっと、石田達4人を認識したらしい。

それと同時にノイズが映像と音声に掛かる。

モニターが砂嵐で覆われ始める。

【まず……妨害……か……ない……なを……頼む……】

その言葉を残し通信は途切れた。

「妨害が入りやがったな。誰だ？　こんな事しやがったやつは」

クルルは自分の周りにモニターを展開。素早くキーボードに指を走らせた。

先ほどとは打って変わった動きに、ケロロ小隊を除いた面々は目を丸くした。

「おっと……こりゃ——」

クルルがエンターキーを押すと同時にモニターに動画が広がった。

「嘘……でしょ」

リップが吐き出した。

モニターには2人の女性が写し出されていた。

「月にジュエルか!？」

ティトが吐き捨てる。

「クソツタレ!!　なんでこつても問題山積みなんだよ……ったく」

弥々華は大声で毒づき、クルルを睨みつけた。

「場所は？」

「こつから南に300m。だんだん離れてってるぜ」

「分かった」

弥々華が能力者の高速移動術、歩術で姿を消す。

「おい、待てよ」

一護が彼女の背中を半ば無意識に追い掛けた。

それを見たルキアと恋次が死神の高速移動術、瞬歩で追いかける。

「私たちも」

「ああ」

続いてリップにティト、更に残りの者達も廊下に駆け出した。

「隊長、俺達も出るぜ」

「え？ 我輩たちも？」

「日向冬樹と日向夏美が近くにいる」

ケロロとギロロの顔が急速に青ざめた。

「それで、その兵器っていうのはどこにあるのかしら」

月は腰に手を当て退屈そうに尋ねた。

「ここからもう少しだ」

ジュエルはそう言うのと不意に足を止めた。

「……何か来る」

そうジュエルが呟いた瞬間だった。

不意に黒い影が、2人の間に割ってはいる。

地面を金属がこすれる音が鳴り、月の首に背後からひやりとした感覚が伝った。

瞬間的に、回り込んだのだ。

「お前ら……なんでここにいる」

冷たい怒声。声の主は他でもない。

「ジユエル、動いたらこいつの首をかつ斬るぞ」

月は口角を上げた。

「ふふふ。久しぶりねえ。『天使』のお嬢ちゃん」

月は首に刀を突きつけられているとは思えない小馬鹿にした口調で呟いた。

「相変わらずの甘さでホツとしたわ」

血液の匂いが空気を走った。

「痛っ……」

「よくあたしの攻撃をかわせたね」

弥々華は左肩を抑えたまま目を見開いた。

「おい！！ 弥々華」

「一護！！」

一護は思わず足を止め、呆気にとられた顔をした。

「弥々華……が……2人？」

T o b e c o n t i n u e d

第八話 M i r r o r a n d T h u n d e r

斬撃の音。

金属の噛み合う音。

空気が切られる音。

「あーっクソー！！　やりづらいー！！」

寸分違わぬタイミングで吐き捨てられた苛立ちの声。

「どっちが本物か、分かるか？」

「嫌……俺にはわからねえな」

「まるで鏡を見ている気分だ」

上から、一護・恋次・ルキアがため息を漏らす。

全く同じ女が2人、全く同じ刀を振り下ろした。

黒いコートをなびかせた風が、縦横無尽に地を、中空を駆ける。

時折、血の赤が地面に走るのが分かった。

「とにかく、止めるぞー！」

一護ははつきりとそう言うと、駆け出す。

「ルキア、恋次！！　もう1人の弥々華を止めてくれ！！」

「ああ」

「分かった」

ルキアと恋次も勢い良く、飛び上がった。

ところが。

「つあ……！」

空気が裂ける音、次いで激突。

弥々華は地面とブロック塀に半分埋まったまま、動かない。

「気を抜いたねー！！　弥々華」

一護たちは空中に呆然と静止していた。

止める間も無く、弥々華が吹き飛んだ事実。

「次はアンタ達だよ」

ミラーは楽しげに笑い、首を曲げる。

その姿が変異していく。

「ふう……こんなもんか」

黒い着物に巨大な刀、オレンジの髪。

「俺……」

一護は目を見開いた。

「悪いな。お前の姿を借りた」

一護になったミラーは軽く笑った。

「行くぜ」

一護、否ミラーは背中^{コエ・リーライ}の刀、斬月を手取る。

一護も斬月に手を掛けた。

霊圧がじりじりと空気を焦がし始めた。

「劫火灰燼！！ 火判」

場違い、とも言える青年の声が辺りを揺らす。

次の瞬間炎の蛇がミラーを飲み込んだ。

「大丈夫さ？」

「……お前、さっきの」

一護は口をあんぐりと開け、眼帯の青年、ラビを見つめた。

「もうちょい空気読めよな」

突如ズドンと入った巨大な横槍に恋次が控えめなツツコミを入れた。

「ラビ！！」

突如背後から聞こえる声に、全員が振り向いた。

「おお、来たさ」

そこには追いつき損なった残りのメンバーが揃う。

「敵はどこ——」

アレンの声は、空から降り落ちた紫雷によって止められた。

「ミラーばかりに良い思いはさせられないからね」

形の良い唇が三日月を描く。

「私は月・李雷^{コエ・リーライ}。あなた方の命を貰うわ」

官能的な声に全員が敵意を向けた。

「……ストライク！！」

ラビのみは敵意ならぬ、まっすぐな好意を向けた。全員のため息すら気付かないほどの。

「うう……。ん」

どうやら数分、意識を手放したらしい。

弥々華は紗のかかった視界で辺りを見回す。

地面に伏せる男——恐らくミラーの本体だろう——はピクリともせず横たわっていた。

そして楽しいな笑みで雷撃を放つ月。

地上・空中でそれをかわす、仲間達。

「あれ？」

弥々華は思わず首を傾げた。

「1人、足りない」

ジュエルの姿が無い。

逃げられたか！？

弥々華は目を見開いた。

弥々華はゆっくりと立ち上がる。

瞬間、月と目があつた。

「待て！！」

弥々華はその言葉を待たず、歩術で姿を消す。

月は睨みつけるように一護達に向き直った。

「お前らをサッサと処分しなきゃね」

月は右手をゆるりと上げた。

振り下ろすと同時に、稲光が辺りを照らした。

奥東京市の街角を1人の女性が歩いて行く。
その手には30cm角の端末。
ソナーのような画面が映っていた。

ピコン

不意に電子音が空気を揺らす。
ジュエルはすぐに端末に手を走らせた。

ピコン……ピコン……ピコン

感覚がだんだんと短くなっていく。

ピコンピコンピコンピコンピコンピコン

立ち止まったのは、工事現場の前だった。
古びた看板が工期の遅れを示していた。
ジュエルは看板に手を伸ばす。

ピコピコピコピコピコピコピコピコ

壊れたような電子音と共に、ジュエルは看板——否、空間転移装置
と言うべきか——へと滑りこんだ。
はつきりとした熱気が頬を打つ。
息苦しさが酸素の薄さを頭に叩き込む。
目を開けると、そこは異質な世界だった。

「三疊記……到着」

ジュエルはわずかに口角を上げると、まっすぐ歩き出す。目の前には小さなドーム状の『建築物』があった。

縦に走った象形文字のベルトに躊躇無く指を沿わせる。

小さな機械音と共にドームが開いた。

膝を付き、覗き込む。

たくさんの壁画で覆われた室内にそれはあった。

空中に浮かぶ小さな瓶。

キラキラと光るそれは血の色を写す赤だ。

「見つけた……！！」

ゆつくりと、躊躇いながらも手を伸ばす。

触れ、握りしめる。

氷のように冷たいそれを引く。

呪縛から解き放たれたような重みがジュエルの手に広がった。

「冬樹殿！！　夏美殿！！」

ケロロはフライングボードを勢い良く降下させる。

「ボケガエル……なんでここに」

赤毛の少女、日向夏美は思い切り怪訝な顔をケロロに向けた。

「夏美殿！！　それがかくかくしかじか……」

ケロロは半ばまくし立てるように説明を始める。

「——だから逃げてほしいんです。地下基地なら安全でありますから、早く」

「分かった」

小さく頷いたのは日向冬樹。

頭頂部の癖毛が揺れる。

「行こう。姉ちゃん」

冬樹は夏美を引き連れ、走り出した。

「頼むであります。冬樹殿」

ケロロはフライングボードを回転させ、空中に飛び立った。

「小雪殿」

ドロロは電柱の上に立つ少女を呼び止めた。

少女、小雪はドロロに困惑した表情を向けた。

「何かあったの……ドロロ？」

「戦いが起きている。それ故、日向家に向かって欲しいのだけれど」

「分かったよ」

小雪は忍だ。だから説明が無くとも事情はわかる。

ドロロの瞳の冷たさが全てを物語っていた。

小雪は素早く、跳躍した。

消え行くその姿にドロロは祈った。

彼女の無事を。

「……」

弥々華は工事現場の前に立っていた。

違和感を感じるのはなぜだろうか。

かすかに錆びた匂いが鼻を突いた。

「——ッ——」

不意に看板が歪む。
まるで水面の波紋のように歪む。
弥々華は黒白風華の剣先を地面に付けたまま、看板を凝視した。
手足が現れる。
そして、現れたのは
「追いつかれたか」
ジュエルだった。

「——分かったよ。クルル」
白髪青年が耳から携帯電話を離す。
薄暗い部屋、パソコンのディスプレイに照らされた顔はどこまでも
ミステリアスだ。
青年はポケットに携帯電話を突っ込むと、気怠げに立ち上がる。
青年の頭は、これから起こる騒動でいっぱいだった。

「モモッチー!!」
タママは片手を降り、着地する。
フライングボードが音もなく消えた。
「あら……どうしたの？　タマちゃん」
バルコニーでアフタヌーンティーを楽しんでいた少女が顔を上げた。
その姿はどこから見ても、お嬢様、だ。
彼女は西澤桃華。世界一の財閥のご令嬢。

「大変なんですう、モモツチ」

タママは一心不乱に説明を始めた。

身振り手振りがだんだん大きくなっていく。

「分かりました」

桃華は顎をしつかり引く。

「ポール。へりを出して下さい」

「分かりました」

壮年の執事、ポールは軽く腰を折ると席を外す。

「冬樹くん……大丈夫でしょうか」

桃華は空を見つめ小さく呟いた。

「そこまでにしろ。月」

淡々とした声が辺りに響いた。

「ジュエル。目的の物は手に入ったのかしら？」

「当たり前だ」

眉一つ動かさず、ジュエルが言い放つ。

月は手首を回し雷撃を止めた。

「今回はコレで撤退するわ。でも忘れないで。あなた方は必ず——」
月が体を引く。

「死ぬ」

月は笑顔を残し、空間の裂け目に姿を消した。

ジュエルも、気絶していたミラーも同時に。

一護達はぐうの音も出ない表情で、それを見つめていた。

「……々……弥……華……弥々華ッ!!」

不意に耳元で響いた大声に弥々華は覚醒した。

「ギロ口？」

「大丈夫か？」

弥々華はふらつきながらも頭を上げた。

「平気、それよりジュエルは？」

「ジュエル？　なんだそれは」

弥々華は身振りを用いて説明を開始するもギロ口は首を横に振る。

「見とらんな」

「逃げられたか」弥々華は頭を降った。

小さく毒づくのを見て、ギロ口はため息を吐く。

「過ぎた事を悔やんでも仕方無かるう。行くぞ」

「うん」

弥々華は浮かない顔で立ち上がった。

「乗れ」

「分かった」

弥々華がフライングボードに腰掛けると彼らは姿を消した。

T o b e c o n t i n u e d

第九話 始まりは噂話（前書き）

時は、流れる。

事件発生から数日後の出来事。

第九話 始まりは噂話

Resistance 来襲から3日が立った。

弥々華は日向家の長、日向秋に連絡を取り、地下基地をResistance 対策拠点にする事に成功。全員がそこに寝泊まりすることに決まった。

また、日向姉弟・西澤桃華・東谷小雪は常にケロロ小隊の誰かが見張る事になった。

ケロロ曰わく「もしもの為であります」だそうだ。

そして日向家は4日目の朝を迎えた。

「ごちそうさまー」

「弥々華、もういいの？」

「ん。お腹いっぱい」

昼食と言うことで多量に並んだ料理。

それを軽くお腹に入れた弥々華は立ち上がる。

横目でアレンを見ると相変わらず凄まじい食欲を発揮していた。

「あれは慣れねえな」

「オレもさ……」

一護の独り言に同意したのはラビだ。

食器を流しに入れた弥々華は仮設キッチンから出ようとする。

「おっと……」

走り込んできた影と正面衝突しそうになり、真横に飛び退く。

「あ、お帰りなさい。冬樹くん。早かったね」

リップが首を曲げつつ微笑みかけた。

「ただいま、リップさん。あの弥々華さんいますか」

「弥々華ならそこに」

冬樹が首だけで振り返ると、壁に張り付いた弥々華の姿があった。

「何か用？」

ぶつかりそうになってそりやないでしょ？

弥々華は思い切り不機嫌な顔で呻いた。

場所を変えて、弥々華の部屋。

弥々華はベッドに胡座をかき、冬樹は椅子に腰掛ける。

「それでなに？ 話って」

淡々とした弥々華の声音を諸ともせず、冬樹は身を乗り出した。

「実は最近こんな噂があるんです」

「噂？」

「はい。ここからもう少し行った場所にある洋館に幽霊が出たそうなんです」

「洋館の幽霊？ んなベタな話よく信じたね」

冬樹は生粋のオカルトマニアだ。

大人たちを唸らせる理論的な脳みそを持っている。

「僕も初めはガセネタだと思ってたんですけど、噂に信憑性を感じられて」

「信憑性ねえ……分かった、話してみて」

弥々華は背筋を伸ばして、身を乗り出した。

「それが——」

「なるほど」

弥々華はヒョイと腕を組むと、小難しい顔をした。

「白い顔の幽霊と巨人の幽霊がうじゃうじゃ……ね。しかも首に金の首輪が付いていたと」

「はい」

「虚とAKUMAの可能性あるか……分かった」

弥々華は腕を解くと軽快に立ち上がる。

「一緒においで。専門家のところに行こう?」

冬樹は一拍置いて顔を輝かせた。

「はい!!」

「アレンいる?」

冬樹を従えた弥々華が顔を出したのはシミュレーションルーム。いわゆる戦闘訓練室だ。

「弥々華か? どうしたんだ」

返事をしたギロロに弥々華は微笑してみせた。

「ちよつとやばげな噂を聞いてね」

そう言つて目線を移せば爆発を上げて戦うアレンと神田。一護と恋次が加わっているところを見れば喧嘩でないことは一目瞭然だ。

「まだかかりそうだね」

弥々華はあまりの派手さに顔をしかめる。

「止めれるかな」

「え?」

冬樹が振り返った時にはもう遅い。

器用に、戦うアレンと神田の間に割り入る。

「弥々華！？」

アレンはひどく驚いた調子で手を止めた。

弥々華は笑ってアレンの襟首を掴み飛び上がる。

「邪魔すんな」

神田は弥々華を睨み付けながら、背後からの一撃を飛んでかわした。

「弥々華！！ 危ないじゃないか」

「知ってる。ま、アレンなら手止めるでしょ」

当たり前、と書かれた顔で弥々華はニヤリと笑う。

「そりゃ……そうだけどさ」

「とにかく本題に入っていい？」

弥々華は真面目な顔に戻ると、冬樹を引き寄せる。

「なんかこの辺で流れてる噂なんだけどさ——」

「ありがとう、アレン」

「ありがとうございます。アレンさん」

「どういたしまして」

弥々華は軽く、冬樹は深く頭を下げるとシミュレーションルームを後にする。

「アレンの目が反応しない、か。ややっこしいなあ」

弥々華は煩わしげな顔で天井を見る。

「あの、弥々華さん」

「なに」

「アレンさんの目ってなんなんですか？」

弥々華は一瞬、なんとも言えない表情をした。

「AKUMAの魂が見える眼だよ。詳しい事は本人に聞くべきだけ

どね」

弥々華は柔らかい表情で冬樹を見た。

「今度、聞いてみますね」

冬樹はなぜか俯いた。

「さあ、気を取り直してルキアさんのところに行きますか」

「はい」

「じゃあね。やよい、さつき」

「じゃあねー。夏美」

夏美は友人と挨拶を交わし、その無い態度で日向家に向かう。

友人2人が見えなくなった瞬間だった。

「はあ……ボケガエル。いつまで見てるのよあ」

「夏美殿が家に帰るまでであります」

げっそりした表情の夏美、見上げる先にはフライングボードに乗ったケロロがいる。

「もう、3日も連続で監視されてるとか……元氣吸われそうだわ」

夏美はふらふらした足取りで、日向家へと向かう。

「監視じゃなくて見張りでありますよー!!」

ケロロはその後を空から追いかけた。

「ただいまー」

「そう……」

「ん、弥々華さん？」

夏美が家に帰ると、唐突に聞こえたのは弥々華の声だった。リビングのドアを開けると、弥々華、冬樹、ルキア、リナリー、井上の姿があった。

「あ、夏美ちゃん。おかえりなさい」

井上の笑顔につられ、夏美の顔が引きつる。

「ただいま……。で、なにかあったんですか？」

「幽霊屋敷の噂の調査だよ。弥々華さんに協力してもらってるんだ」

「ああ、それ私も聞いたわ。やよい達が話してたの」

「ふーん。結構広まってるんだ」

弥々華はひよいと立ち上がる。

「みんな、情報ありがとね。これからはあたし達が動くから。冬樹は留守番しててね」

「え！ そんな！！」

冬樹の体が跳ね上がる。

悔しそうな表情に、弥々華は頭をかく。

「怪我させたら隊長達に合わす顔ないでしょ。だから連れていけない」

弥々華は相変わらず真面目に言うと、歩術で姿を消した。

そして夜だ。

夕食という事もあり、キッチンでは人で溢れかえる。

「ねえー！！ 話いい？」

「なんだ？」

弥々華は立ち上がると大声を張り上げた。

「幽霊屋敷の噂があつてAKUMAと虚の可能性があるから調査に

行くの！ 誰か一緒に来てくれない」

「私が行こうか？」

手を上げたのはルキアだ。

「ありがとう、ルキアさん決まりね。他には？」

「僕、行きます」

「私も行きたいである」

「ありがと。アレンとクロウリー決定ね」

「俺も行く」

「一護サンキュー。他はいない？ 分かった。じゃ、このメンバーね。じゃ今夜10時に玄関出たところで会おう」

一気にそこまでまくしたてると弥々華はキツチンを後にした。

夜の帳は降りた。

ひやりとした夜気が街を包む。

「ここにありますよ。弥々華殿」

案内役を買って出たケロロを含めた6人は思わず立ち尽くす。

「いかにも、な雰囲気だな」

「ああ」

ルキアは微笑を浮かべ、一護は頭を掻いた。

「こんな建物がこの世界にも会ったんですね」

「なんだか懐かしいである」

アレンとクロウリーは軽く目を輝かせた。

「本当に行くでありますか」

「勿論だよ」

弥々華は淡々と言い放つ。

「さ、行くよ」

弥々華は洋館、転じて幽霊屋敷のドアに手を掛けた。
耳障りな音を立てて開くドア。
埃の匂いが、全員の鼻を突いた。

「行つたみたいだ」

冬樹は洋館から少し離れた電信柱の影にいた。
完全に全員の姿が視界から消えた。

「大丈夫なんですか？ 冬樹君」

冬樹の後ろにいた桃華が、恐る恐る聞いた。

「大丈夫だよ。西澤さん」

冬樹はにつこり微笑む。

「オカルト部の実地調査。がんばろうね」
「はい」

桃華は微かに頬を染め、頷く。

2人は、もう少しだけ待つことに決めた。

この行動が彼らの命運を分けるとは、知らぬままに。

T o b e c o n t i n u e d

第十話 幽霊屋敷探検隊

そつえば鍵、かかってなかったっけ。

そう思いながら、弥々華は屋敷に足を踏み入れた。
嫌な音を立ててドアが閉まる。

黴臭い空気に弥々華は顔をしかめた。

「暗いな」

「ああ、何も見えねえ」

一護とルキアは、周囲を見回しながら呻いた。

「アレン、なにか見えるであるか？」

クロウリーが瞬かせながら呼びかけた。

「……アレン？」

「あ……なんでしょう？　ここ」

「アレン。大丈夫か」

一護が怪訝な顔で、アレンの背中を見やる。

「お？　これスイッチでありますようか」

カチリと言う音。

「あ、電気付いたね」

明かりが灯った。

そこは吹き抜け。

広い玄関ホールだ。階段が2階に伸びている。

「うわ……埃すごいであります——はつくしよん」

着地した拍子に舞い上がった埃が、ケロロの鼻を刺激した。

赤く毛足の長い絨毯はくすんでひどい状態だった。

冬樹と桃華は電信柱の影から、洋館の軒先を覗き込んでいた。

「もう少し待ってから入ろうか？」

「はい」

桃華は心臓の高鳴りを抑えつつ首を振る。

内心ガッツポーズを決めているのは乙女の秘密だ。

「どうしたの？　西澤さん」

どうやら本当にガッツポーズを決めていたらしい。

桃華は思わず赤面した。

「な……なんでもありません!!」

「そっか……分かったよ」

冬樹は小さく笑う。

「そろそろ行こうか？」

「あ……ええ！　はい」

桃華は冬樹の背中を追い洋館へと駆け出した。

「——それで、弥々華？」

「なに？」

そっけない返事を気にも掛けずクロウリーは言葉を繋ぐ。

「冬樹から聞いた噂というのはどんな物であるか？」

「あ、そっか。クロウリーには詳しく言っ
てなかったね」

弥々華は1人頷くと目を細めながら話し出した。

「1週間前くらいからね。この屋敷から変な呻き声が聞こえた
の。んで探検に入った若者が3人、行方不明になったって。1人は
血まみれで帰ってきたけどすぐに亡くなって。ニュースとかにはな
らなかったみたいだけどすごい勢いで広まった噂なんだって」

「それが虚となんの関係がある
であるか？」

「帰ってきた男が『白い仮面と巨人の幽霊に襲われた』って喚いたみたい」

弥々華は口角をわずかに上げた。

「あたしはAKUMAは巨人と、白い仮面は虚と結びつけたの。もしもの可能性があるし」

「そうであるか」

「ま、違ったら違ったで問題無いし。さっさと調べて帰る？」

飄々と言い放つ弥々華に、ルキアとクロウリーは顔を見合わせた。

「うわあっ!!」

「どうした!？」

ケロロが上げた大声に、思わず一護とアレンが駆け寄る。

奇声を上げて、パニックを起こすケロロに、一護はため息を付いた。

「大丈夫ですよ!! ケロロさん。蜘蛛の巣ですってば」

ケロロの顔に付いた埃まみれの蜘蛛の巣をアレンは払う。

「ゲ……ゲロ。びっくりしたでありますよお」

目を潤ませ、泣きそうなケロロの背中をアレンは撫でた。

「大丈夫ですよ。何もないですって」

アレンとケロロを見下ろしながら一護はため息を落とす。

「さ、そろそろ——」

アレンがうずくまるケロロを立ち上がらせようとした瞬間だった。

「なんだ!？」

ぐらり、と空気が揺れる。

ノイズが耳を突く。

「……これは？」

ケロロの言葉を皮切りに、空中に現れたシミが一気に裂けた。

「なんか……ヤバクネ？」

裂けた空間から、怒濤のように黒が吹き出す。

斬月を構えた一護も神ノ道化を発動したアレンも、思わず固まる。人外の様相を呈す下級の虚とレベル3のAKUMA——巨人というに相応しい外見——が廊下をびつしりと埋め尽くす様子は、少なからず2人の戦意を削ぎ落とす。

ケロロに至っては2人の後ろで腰を抜かして震え上がるという醜態までさらしていた。

「一護さん……どうしましょう」

「どうしましょうったって……やるしかねえだろ」

一護は駆け出した。

引き抜いた斬月を横薙ぎにする。

断末魔も無く、塵となる虚を見て、アレンも動き出した。

左腕を掴み引き抜く。

左腕を代償に現れた大剣を、AKUMAに突き立てた。

迷いの無い斬撃にAKUMAが怯む。

引き斬れば漂う血の匂い。

「一護さん！！ ケロロさん」

「なんだ」

一護はAKUMAの一撃を受け止め、受け流す。

「口を押さえて下さい。AKUMAの血液には毒があります」

「あ……ああ。分かった」

「了解……ひつく……であります」

ケロロは小さくしゃっくりをしつつも返答した。

クラウンヘルト
「神ノ帯」

アレンはイノセンスを伸ばし、AKUMAの体に風穴を上げた。

一護はそこから飛び退くと、後ろの虚に一撃をくれてやる。

「あ……危ない！！ 一護殿」

ケロロは思わず叫ぶ。

背後からの一撃に、一護は地面に叩き伏せられた。

「一護——ッ！」

「何だ——！」

不意に響いた悲鳴に、3人は振り返った。

「もしかして……出た？」

「そのようだな」

返事したのはルキアでは無かった。

「AKUMAが出たようだ。私は先に行く」

「あ、発動したのね」

前髪が逆立ち、目は鋭く金色に染まったクロウリーは、廊下を駆け出した。

「あ……あれはなんなのだ？」

「イノセンス発動したの。雰囲気変わりすぎだよね」

茶化した口調で言った弥々華はすぐに真面目な顔に戻る。

「じゃ、あたしたちも行きますか」

「ああ」

ルキアと弥々華はそれぞれ瞬歩と歩術で姿を消した。

ケロロの足元に突き刺さる深紅のミサイル。

アレンが辺りに目を走らせるとレベル1のAKUMAが数体、砲口をケロロに向けていた。

「動くなよ？ 全員」

不意に、誰の物でもない声が響いた。

「あの力エルを殺したく無ければな」

裂けた空間から、1人の男が進み出た。虚とAKUMAは、膝を折る。

まるで国王に頭を垂れる市民のようだ。

男は手を前に伸ばし空気を払った。

白衣が翻り、インナーの黒が丸見えになる。

「ハハハハハ！！　ワタシはシャドウ・ストレンジラヴ。お前らの明暗をにぎゅっている……にぐゅっている者だあ」

「囙んでる……な」

「囙んでますね」

「囙んでるでありますな」

3人は白けた目でシャドウを見つめる。

「う……そんな目でワタシを見る——ぐあっ」

白衣の裾が、足に絡まる。

「転けたな」

「転けましたね」

「転けたでありますな」

シャドウはすぐにムクリと起き上がる。

顔は羞恥で真っ赤に染まっていた。

「お前ら……よくもワタシをコケに——」

「次の舞、白漣」

氷の波濤。

目で追うこともままならない氷の波濤がシャドウに殺到する。

「大丈夫か？」

現れたルキアに全員の口が呆然と開く。

その間に、弥々華とクロウリーが凄まじい勢いで虚とAKUMAを殲滅していく。

カランと何かが地面に打ちつけられる音がした。

「随分抵抗しなかったね」

「そうだな」

弥々華とクロウリーが氷の前に足を付いた。

廊下には血飛沫が飛び散り、まるで殺人事件の現場のようだった。

「ルキア殿、クロウリー殿、弥々華殿。なぜここに？」

「悲鳴が聞こえたのでな。駆けつけさせて貰った」

「あれ。なんか話し方違う？」

「とにかく、ルキアさんお手柄だよ」

弥々華は何気ない仕草で氷を叩く。

「私が？」

弥々華はニヤリと笑う。

「こいつ、Resistanceの幹部だよ。指名手配かかってる」

ひやりとした笑みに全員が一步引いた、瞬間だった。

「ワタシを……よくもコケにしたな」

地の底から響く声に全員が固まった。

氷が裂ける。

黒が滲み出す。

「お前ら全員……実験材料にしてやる!!」

氷がはじけた。

「な……なんだ!？」

「冬樹君!？ あれ」

冬樹は思わず目を奪われた。

光すら奪う闇が、視線の先を塗り込めていく。

「あ!!」

そして見えた小さな緑。

「軍曹お!!」

声が届く間すらなくケロロは闇に飲み込まれた。

「た……大変だ」

冬樹は後ずさる。

「西澤さん!!」

思わず桃華の手を取ると、冬樹は駆け出した。

「冬樹君、どこへ」

「家だよ!! みんなに、みんなに知らせなくちゃ」

冬樹は洋館を飛び出すと、一心不乱に駆ける。

「冬樹君……俺に任せとけ」

桃華の髪が尖る。

「西澤さん?」

桃華は冬樹の腰に手を掛けるとグイッと持ち上げる。

「うおおーッ」

絶叫と共に桃華——いや、もう1人の人格『裏桃華』——は駆け出した。

冬樹をお姫様だっこしたままで。

T o b e c o n t i n u e d

第十一話 影との戦い

「夏美さん!!」

「姉ちゃん!!」

ドアが乱暴に開かれ、突然現れた2人に夏美は目を見開いた。

「冬樹に桃華ちゃん……こんな遅くにどうしたの!？」

「た……大変なんだ。軍曹達が――」

額に黒が掠る。

流れ出した生暖かい血液を弥々華は乱暴に左腕で拭き取った。

「最悪。つか……なんでアイツが……」

舌打ち。

そしてすぐに飛び上がる。

弥々華の足元から飛び出したのは巨大な棘だ。

空中で体を捻ると、一護達を目線で探す。

「いた」

地上でわたわたと回避するケロロに向かい、弥々華は飛び降りた。

「やほ。生きてる?」

ケロロの腰をつかむと、ズレたような間抜けな声で弥々華はニヤリと笑う。

「弥々華殿お」

泣きそうなケロロの顔に、弥々華は視線を逸らす。

可愛い……。

そんな事を考えている暇は無いが、そんな思いが頭をよぎる。

「弥々華殿!! 後ろっ」

「おわっ」

弥々華は上体を逸らし、突き出した黒をかわした。

「すげー。マトリックスみたいであります」

「そりゃどうも。っと……さてそろそろ攻めなきゃね」

素早く姿勢を戻すとケロロをしっかと抱き寄せる。

「隊長。頼みたいことがあるの」

「へ？」

キョトンとしたケロロに、弥々華は凜とした表情を見せた。

「あいっ……シャドウの能力は『影を操る』事。だからさ、照明壊してくれないかな？」

「照明を壊せばいいんですか？」

「そ。あとは……」

視線の先にはルキアの姿があつた。

「状況説明よろしくっ！！」

「げえろおー！！」

ケロロの悲鳴は直線を描き、落下していった。

「さて……」

罪悪感など微塵も感じさせぬ爽やかな表情で、弥々華はシャドウに向き直った。

その視線は勝ち気に相手を睨みつける。

体を伸ばし、弥々華は頭からシャドウに突っ込んだ。

「ルキア殿！」

「な……ケロロ！？」

かなりの速さで落下したケロロをルキアは反射的にかわす。

「だ……大丈夫か？」

「多分……」

ピクピクと痙攣しながら地べたに埋まるケロロを、ルキアは躊躇無く引つ張り出す。

「そだ……ルキア殿!!」

ルキアの腕の中で飛び起きたケロロは弥々華の言葉を復唱していく。

「奴の力は影。そう言う事だな?」

「そうであります」

「分かった」

ルキアは軽く頷くと、ケロロを床に下ろす。

軽く体をひねり、瞬歩を使おうとした。

「な……!?!」

ルキアは袖白雪を抜く。

影がルキアを追従した。

思わず背後に意識を集中させる。

体を捻った瞬間だった。

「ルキア殿!! 危ない」

下、そして背後から影が伸びる。

極大の刃が掠める瞬間だった。

「怪我は無いか?」

「な?」

ルキアはなぜか抱きすくめられていた。

「あ……あなたはクロウリー殿?」

じろりと、猛禽類の目で睨みつけられたルキアは思わず視線を逸らした。

「助けて下さりありがとうございます」

つかえつつかえ出した言葉にクロウリーの視線が和らぐ。

「無事のような。お嬢さん」

クロウリーは影をリズムカルにかわしながら言った。

「しっかり掴まっている」

ルキアには声を上げる間も与えられなかった。

クロウリーは軽く跳躍すると、何を思ったか壁を走り出す。

ずり落ちないよう抱き寄せられているとは言え、頭を下にされたルキアは小さな悲鳴を上げた。

「すまん。無事か？」

廊下を疾駆し、玄関ホールに躍り出たクロウリーは悪戯っぽい笑みで囁いた。

「むちゃくちゃな奴め……!!」

敬語すら忘れる疾走にルキアは目を回し呻き声を上げる。

「照明を壊すのだろう」

ルキアははつきりと動揺の態度を見せた。

「お前……なぜ？」

「地獄耳なものでな」

あまりにもさらりと言い返されルキアは毒気を抜かれてしまった。

「さて片付けようか」

「ああ」

2人の黒は走り出す。

「でりゃあッ!!」

「たあッ!!」

一護と弥々華は気合いと同時に刃を叩きつける。

「遅い」

シャドウの一言は正論だった。

影は実態を伴い壁と化す。

背後からのアレンの一撃も、壁に防がれる。

いとも簡単に。

「速いですね……」

「言うな。分かってるから……」

アレンの言葉に弥々華は情けない声で頭を抱えた。

「弥々華……」

「何？」

今度は一護に呼ばれ、弥々華は頭を力一杯回す。首が軽くこきりとなった。

「本気、出してもいいか？」

一瞬の静寂が耳を付く。

「頼む。ただし——」

弥々華は口角をちらりと上げた。

「建物は壊さないでね」

「ああ」

一護はにやりと笑う。

勝ち気な瞳に弥々華も笑顔を返した。

一護は飛び上がる。

呼吸を吸い込む音。

一護は斬月を自身の目の前に伸ばす。

「卍解……」

風が辺りを蹂躪する。

風が晴れた時、そこにいたのは衣装が変わり、細身で漆黒の日本刀

『天鎖斬月』を握りしめていた。

「行くぜ」

一護は天鎖斬月を握り直すと、先ほどとは比べ物にならないスピードで天を駆けた。

襲い来る影に、一護は刀を振り上げた。

「月牙……天衝……」

黒い霊圧の衝撃波が、影を粉碎していく。

「バカ…… 何やってんだ……」

弥々華は思わず怒鳴り散らした。

建物も巻き込みながら影を破壊していく様子を見ながら。

「こつちです!!」

街を駆ける冬樹に付き添うのは、桃華にリンク、ティトに恋次とギロロだった。

「ここを曲がって下さい」

桃華に促されるまま、全員が角を曲がる。

「ここですか？」

「はい」

冬樹が頷いた時だった。

ざわりと空気が変わる。

「一護？」

恋次の呟きは沈黙に飲まれた。

「とにかく……行くぞ」

「そうだな」

ギロロの言葉にティトが返事を返す。

全員が足を進めた、瞬間だった。

「うわ!!」

内側から膨張した何かが、窓ガラスや壁を突き破り塵の雨を降らす。ティトとリンクはとっさに冬樹と桃華を庇い、ギロロと恋次は自分の身を守りつつ武器を抜いた。

「なにやってんだ!! 一護ッ」

もうもうと舞う砂埃から、少女の怒声が飛ぶ。瓦礫に半身を埋めた姿は間違いない弥々華だ。

「危ないじゃないですか!!」

「気を付けんか!! 一護ッ」

少年の言葉に続いたのは男と女の怒り。

アレンにルキア、クロウリーまでもが瓦礫を被って埃まみれだ。

「な……なにやったんだ？」

テイトは軽く、放心状態でツツコミを入れた。

「わ……悪い。建物の中だつて事忘れた」

一護は悪びれた調子も無く頭をかく。

「だからって……室内で『月牙天衝』を使うこたあ無いでしょうが
！！ このアホタンキ！！」

「ア……アホタンキ？」

一護は言葉の意味が取れず、目を白黒させた。

「おい、誰かこの状況なんとかしろよ」

恋次が頭を抱えたまま呟く。

「それが出来れば苦労しません」

淡々としたリンクの言葉は案外外れてはいなかったようだ。

弥々華はひたすら逆上したまま一護をなじり、一護はと言えば言い返す事も出来ず平謝り。

他の面々はそれをどうにも出来ず、1歩引いた場所から見ていると言う、ある意味地獄絵図が完成していた。

「壊すなつて言つたでしょうが！！」

弥々華の叫びが合図になつたかのようにだつた。
ずるりと音になる。

全員が——弥々華でさえも——音の出どころに視線を移した。

「お前ら全員……いい加減にしろよ……」

真つ黒な球体から響くシャドウの声に全員が凍りつく。

「ワタシを見るー！！」

球体が裂ける。

「ぐ……」

冬樹は思わず、口を抑えた。

「軍曹？」

シャドウの操る影の先端。

そこにはケロロが腰を縛り付けられ失神していた。

「野郎!!」

弥々華は黒白風華を握り、駆け出す。

「隊長に触んな!!」

ニヤリとシャドウは顔を歪める。

「ああ…… やつとこつちを見てくれた」

歡喜に歪んだ表情に、弥々華は気付かない。

弥々華は地面を蹴ると、黒白風華を振り上げた。

「風華招来!!」

振り下ろした刀は衝撃波をまとい、弧を描く。

「まだまだ遅い」

笑みを浮かべたまま、シャドウは影を動かす。

「これでもか？」

シャドウが視線を動かした刹那だった。

一護がシャドウの体を一閃した。

赤い花が咲く。

影は緩み掻き消え、ケロロは地面に力無く落ちた。

弥々華の斬撃と共に。

「つあ……」

シャドウは足元をふらつかせ2、3歩下がる。

血が地面へと流れ落ちた。

「だあぁっ!!」

一護の横を抜けたアレンが大剣と化した神ノ道化をシャドウに突き刺す。

すり抜け、ダメージを受けない攻撃だが、シャドウの顔は苦痛に歪む。

「お前ら…… こんな事をして…… ただで済むと思ってるのか？」

憎悪に満ちた言葉をシャドウは吐き出す。

「実験材料にするのは止めだ。お前ら全員…… 塵に帰す!!」

顔が上がる。

空を仰いだその顔は、憎悪に満ちていた。

「能力解放！！　鎖せ——」

「そこまでしておけ」

どこからともなく聞こえてきたのは、当事者では無い、何者かの声だった。

「命令違反だ。シャドウ」

空間が裂ける。

その姿を見た瞬間、弥々華とティトの顔が恐怖に歪む。

「ナスカ……アンノウン」

「ナスカ……様」

スラリと背の高い、黒髪の端正な男、ナスカはシャドウを一瞥すると、神ノ道化に手を掛けた。

「下らん」

その一言と共に引き抜く。

ナスカは引き抜いた神ノ道化を投げ捨てると、今度は弥々華に目をやった。

「計画は進んでいる。貴様らの最後は近い」

ナスカは一息に吐き捨てると、弥々華を指差した。

手を横にし、親指を立てるとパキパキと音が鳴り始めた。

「さらばだ」

一発の銃声が弥々華を貫いた。

ナスカはシャドウを抱えると、後ろを向く。

白いコートが翻る。

「待てよ！！」

一護の絶叫すら無視し、ナスカは世界の向こうに姿を消した。

弥々華は地面を舐めたままその姿を見据えていた。

そして、弥々華の意識はそこで途切れた。

「ぐ……痛……ってみんな!？」

オレンジ色の光の中、弥々華は素っ頓狂な声を出した。
顔にははつきりと、なんでいるの？ の文字が刻まれていた。

「茨田さん!! ほらじつとして」

リアクションを取った弥々華を井上がたしなめた。

「大丈夫だよ!! もう治ったから」

弥々華は柔らかく笑い、胸を軽くはだけた。

銃創がほぼ痣と変わらない位まで治療されていた。

弾も上手いこと貫通したらしく、体にはなんの影響も無い。

「でも……ケロちゃんが」

「ケロ……ちゃん？」

弥々華のきょとした顔を見て、一護が弥々華の向こうを指差す。

弥々華がゆっくり視線を動かすとそこには――

「隊長!!」

頭に大きなこぶを作ったケロロが横たわっていた。

「当たりどころが悪かったみたいで……でももうすぐ治ると思うよ」
確かによく見ればこぶはゆっくりとへこんでいつている。

弥々華は安堵のため息を吐き、何気なく頭を撫でた。

「よかつ――」

「ゲロいてえー!!」

こぶに指先が触れた瞬間ケロロは蛙のようにと飛び上がり、オレンジ色の光のドームに頭をぶつけた。

「あ……隊長!! ごめん」

慌てて謝るも時既に遅し。

ケロロは怒り心頭で弥々華を怒鳴り、弥々華はひたすら平謝り、という光景が見られた。

自業自得……。

2人を除いた全員の心が1つになったことはいうまでも無いだろう。

「——にしても、あなたは素晴らしい力を持っているんですね」
リンクが何気なく口を開いた。

「え？　そうですか？」

井上は思わずリンクを見つめた。

急に褒められて、面食らっているような表情だ。

「致命傷となる怪我をここまで素早く治せるとは……どんな力なのです？」

「盾瞬六花っていつてね。治療も出来るし攻撃したり、盾を作ったりすることも出来るんだよ」

ニコニコ笑う井上に、リンクは目を光らせた。

「この力があれば、戦況は確実に変わりますね」

「スカウトなら自分の世界でやれよ」

リンクの言葉に反応したのは、ティトだった。

「スカウト？　した覚えはありませんが」

「今、一瞬考えてただろ？　顔に書いてあったぜ」

パチパチと、2人の視線に火花が散り始める。

「リンクー！！　ティトー！！　止めて下さい」

思わずアレンが間に入り、2人は顔を逸らす。

井上はそれを、なんとも言えない表情で眺めていた。

「なんだ……これ？」

帰りがけ、弥々華は何かを見つけた。

それはそれなりに大きさがある、金色の輪だった。

太さがあり、凝った紋様が入っていた。

「金の……首輪？」

これがもしかしたら……噂の首輪？

弥々華はそれを握りしめた。

「解析を、頼んでみよう」

「弥々華!! 置いてくぞ?」

「あ……待つて!!」

弥々華はそれを握りしめたまま、一護たちの背中を追いかけ駆けだした。

T o b e c o n t i n u e d

第十二話 月夜の来訪者（前書き）

今日、9月22日は中秋の名月。いわゆるお月様。
それはケロロ達が住む世界も同じでした。

第十二話 月夜の来訪者

薄暗い、電子機器の唸り声が響く部屋に軽い音が時折混ざる。

「チエック……である」

クロウリーはチエスの駒を盤に置く。

淀みの無い手に、クルルは小さく笑った。

「なかなか出来るじゃねえの……だがまだまだな」

クルルはクロウリーの駒を取ると、箱に放り込んだ。

軽快な音に陰湿な笑い声が重なる。

クロウリーはまた駒を手に取り、思索する。

弄んでいた駒を置いた瞬間だった。

【メメタァードグチャァー】

「何の音であるか？」

リンクは顔を上げ、周囲を見渡した。

「ただの呼び鈴だ。んで誰だァ？」

クルルは椅子を回し、キーボードを動かす。

数秒を待たずにモニターが付き、1人の少女の顔が写った。

「お団子作ったんです。クルルさん食べません？」

緑髪を揺らして笑うリップを見て、クルルは小さく舌打ちした。

「イラネ」

一息で返し、モニターを切ろうとしたクルルの腕を何者かが抑えつけた。

「そんな事言ったら失礼であるよ。リップ、頂くである」

「あれ。クロウリーもいるの？」

キョトンとした答えに返答もせずクロウリーはクルルにドアを開けるよう促した。

「おじやます」

遠くから聞こえた足音がだんだん近づく。

ひよこつと顔を覗かせた少女は両腕でしっかりとかごを抱えていた。

「あ、カップ1個しか持ってきて無かった……」

「俺、イラネ。気にすんな」

クルルは一言、そう言い放った。

「ひどいですね」

「うるせ。で、なんて団子なんだよ」

「なんでって……」

忙しく茶の支度を整えていたリップの動きが止まる。

「今日、お月見の日でしょ？」

「ああ」

クルルは思い出したのか、また駒をいじくり始めた。

「あ、なにか入れますか？」

「……コーヒー」

珍しく素直なクルルに微笑みかけリップはまた動き出した。

「あ、そうだ。クルルさん」

「なんだ？」

「弥々華から伝言です。『籠の中に入ってる物を分析してほしい。』

この埋め合わせはちゃんとするから』だそうです。なんでめ急を要するみたいですよ」

クルルはリップに面食らった顔を向けた。

「弥々華に伝えとけ。『あとでラボに来い。結果はすぐに出すから』

そっちも頼むぜえ』ってな」

「……了解です」

「あのリップ。1つ聞きたいことが」

クロウリーは首を傾げたまま言葉を繋いだ。

「お月見ってなんであるか？」

首輪を持ったクルルは内心ずっこけた。

「キレイな満月を愛でる日だよ。日本では月が見える場所に、すすきを飾って月見団子とかなんかを盛ってね、お酒を供えて月を眺めるの。んで楽しむって訳」

「へえ」。日本では満月は良いものなのであるか」

関心した顔のクロウリーを見て、リップは小さく笑った。

「もちろんそうだよ。そうだ、言い忘れてたけど後でお月見パーティーやるんだって。秋さんが来て下さいって言ってたよ」

「へつくしゅん!!」

「風邪さ？」

「多分違うと思う」

弥々華は勢い良く鼻をすすり上げると、腕で鼻の下を拭う。

「あ、また出てきた」

腕に着いた血を見て、弥々華が大声を上げた。

「ちくしょー……神田の奴。顔殴るときはもうちょい加減しろっ
ーの」

鼻にティッシュを詰め込み止血する弥々華を見て、ラビは苦笑いをこぼした。

「女っ気無さ過ぎさ……」

「なんか言った」

キツと睨みつけられ、ラビは両手を上げた。

「いえ、なんにも」

「ならいいけど」

そう言って弥々華は視線を戻す。その先には素手で組み手をする神田と一護の姿があった。

「ほら！ やっつける！」

一護に向かい声援を送った弥々華は悪戯っぽい目つきでラビを見た。

「お互いこっぴどくやられたね」

「さね」

ラビは額に出来たたんこぶに触り、また苦笑した。

「弥々華」

空気の抜ける音と共に現れたのはリップだった。

弥々華の顔を見た瞬間、硬直する。

「顔、どうしたの？」

「組み手してたら殴られた」

「修行？」

「ん」

簡潔な返事にリップは肩をすくめた。

「顔、血まみれだよ。ほら、こっち向いて」

リップは弥々華の隣にしゃがみこむと、ポケットから取り出したウエットティッシュで顔を拭き取る。

「女の子なんだから、もっとちゃんとしなきゃダメだよ」

「ん」

「はい。これでいいよ」

にこりと微笑むリップに弥々華は顔を寄せた。

「そっぴや、リップ。どうだった？」

「首輪の事？　ちゃんとやってくれるって。後で来いってさ」

「分かった。ありがとね」

弥々華はへらりと笑うと、頭を搔く。

「そっぴや。弥々華、お月見パーティーそろそろ始まるの。ついでにクルルさん達、連れてきてくれないかな？」

「分かった。ラビ。2人止めて、リップと先行っててくれる？」

「分かったさ」

「サンキュ。じゃあとで」

弥々華は立ち上がると軽く手を振りながら部屋を後にした。

「お邪魔あゝ」

クルルのラボに着いた弥々華は、何気ない仕草で中に入る。

コーヒーの残り香が鼻孔を刺激した。

おなか減ったなあ。

そんな事を考えながら顔を覗かせた。

「分析終わった……ってクロウリー!?　なんでいるの?」

目を白黒させて驚く弥々華に、クロウリーは手に持っていたチェスの駒を見せた。

「対局していたのである」

「こいつ。結構やりやがるな」

「あら?　クルルが人を褒めるなんて珍しいね。隕石でもふるのかも」

珍しく毒を吐いた弥々華は、真っ直ぐクルルの後ろに立った。

「で……どんな首輪だったの?」

「分析はまだ終わらねえよ。明日の朝までには終わんじゃね?」

「そっか。じゃ、明日の朝一に行って良い?」

「好きにしな」

クルルの返事を聞いた弥々華は軽く肩をすくめた。

「OK、そうする。それじゃ、上戻らない?　お月見パーティー始まるってさ」

「あ。私行くである」

「クルルも行こ?」

「イヤだね」

間髪入れない否定の言葉に、弥々華は溜め息を落とす。

「リップに連れてこいって言われてるの。顔だけでも出したら?」

「イヤだね」

「じゃあないな」

弥々華は降参の声を漏らした。

「気が向いたら来てね。じゃ行こ?　クロウリー」

「分かったである。で弥々華」

「なに？」

「鼻、どうしたであるか？」

数秒、静寂が辺りを支配する。

「……あ。ティッシュ忘れてた。鼻血出たの」

あまりにも飄々とした呟きに、クルルは突っ込みたい気持ちを抑えた。

「おわ……凄い」

弥々華は思わず感嘆の声を漏らした。

サッシは開け放たれ、心地よい秋風がリビングに吹き込む。

そこには総勢20人以上の人間や宇宙人が楽しげに談笑を交わしていた。

ダイニングテーブルに着く者、ソファーやその背もたれに座る者。

人で溢れつつも、そこは心地よい空間になっていた。

「あら。弥々華ちゃん」

駆け寄って来た女性に、弥々華は笑顔を作って見せた。

「今日はお招きありがとうございます。居候させて頂いた上に、夕食にまで招いていただけるなんて」

すらすらとした敬語に女性——日向秋は笑顔を見せた。

「そんなに畏まらなくていいわよ。それより庭で乾杯しましょ。おなか減ったでしょ」

「はい。ありがとうございます」

弥々華は軽く礼をすると、きよろきよろと周りを見回すクロウリーを引き連れ庭に出た。

庭にはテーブルが置かれ定番のすすきにお団子。栗ご飯のお握りや里芋の煮っ転がし、茹でた枝豆が、飲み物と共に並ぶ。

「おいしそう」

「であるな」

2人は心から呟くとコップを取った。

「それではみんな、乾杯！　であります」

「……乾杯！」「……」

チリンとコップを打ち合わせ、談笑を続けながら食事を始めた。弥々華もお握りを取り、何気なく空を見上げた時だった。

「あ、流れ星」

とても小さな呟きだった。

だがそれは数秒を待たず、全員に伝播した。

願い事を始める者、気にせず食事を続ける者。

「あれ……でもあれ、なんかおかしい？」

不安は、即座に現実と化した。

「あれは宇宙船だ！　こっちに落ちるぞ！」

ギロロの叫びが、日向家を騒がせた。

「やば……」

その言葉が合図だった。

衝撃と土埃が辺りを満たし、視界は茶色く埋まった。

ボタンと何かが開く音がした。

「おい『シヴァヴァ』！　貴様、何をやらかしたあ……！」

ケロロによく似た怒声が、辺りを揺らした。

「おいおい旦那。オラツチは着陸しただけだぜ？」

悪びれない高めの大声が怒声に続く。

「着陸……否……墜落。重力……計算……失敗」

ぶつぶつと呟くような小さい声が状況を分析した。

その時、一陣の風が吹いた。

砂煙が晴れた先には庭に大穴を開けた宇宙船。

その上には3体のケロン人。

それを見たケロロ小隊は、息を飲んだ。

「お……お前は、もう1人の我輩……！」

ケロロにそっくりなケロン人はその声を聞き、片手を挙げた。
「久しぶりだな。王よ」

T o b e c o n t i n u e d

第十三話 D a r k

ギロ口のテントが平らになるまで押しつぶされていることに、弥々華は今更ながら気が付いた。

「で、隊長。この人達……誰？」

弥々華は微かに敵意を込めた視線で3人のケロン人を眺めた。

1人はケロ口にそっくりで、帽子は白く目の下に模様が入っていた。口元とお腹は黒い。そして何故かケロ口よりも知的に見えた。

もう1人は薄青い目をした赤い男だ。頭の金の輪や、構えた寄りかかる棒がが西遊記に出てくる孫悟空を彷彿とさせる。

最後の男は青い男で、目つきが悪い。手や帽子の先が武器になっているのが男を物騒に見せる。

ケロ口によく似た男は宇宙船の上で腕を組んで立っていた。

ゆっくり周りを見回している事は、大きな目を見れば分かる。

「なんだ？ 人が増えたな」

男はポツリと呟いた。

「オラツチ達を出迎えに来てくれたんじゃないかねえの？」

赤い男はカラカラ笑う。

「否定。仰天。全員……凝視」

青い男は、少なからず全員の心境を理解しているように見えた。

呆然とするケロ口小隊を横目で見て、弥々華は視線を戻した。

「あなた達は隊長の何なんですか！？」

気が立っているのか、弥々華は怒声に似た声で叫ぶ。

「吾か？ 吾はケロ口。もう1人の吾、そして冬樹の『友だち』だ」

ケロ口、もう1人のケロ口はそう言ってニイツと笑った。

犬歯がチラリと口の端から覗く。

「はあ？」

弥々華はあんぐりと口を開けた。

「弥々華殿!!」

我に帰ったケロロが弥々華にすがりつく。

「状況を説明するであります!!」

「あー……どこから話せば良いのやら」

全員がリビングに入った所を見たケロロは空に目をさまよわせた。

「最初からでいいんじゃない? 軍曹」

状況を知るらしき冬樹がケロロを促す。

「そうでありますな。それはかなり前の出来事でありました」

ケロロは視線を固定すると、語り出した。

謎の空中都市とともに現れた謎のケロン人。彼は第三のケロン軍古代兵器キルルが生み出した超詰め込み教育がなされたケロロのクローンだった。

たった二分で地球を侵略してみせたケロロと2人のケロン人——シヴァヴァとドルル——。しかし、本物のケロロと冬樹たちの種族を超えた絆の力が理解できず敗北を認め、自らの手でキルルを封印した事。

そして、友情を結び和解した事。

「そしてもう1人の我輩は宇宙船で宇宙に旅立ったのでありました」
しばらくの静寂。そこから口を開いたのは弥々華だった。

「そんな事を知らずにあたし……」

言いよどみながらも必死で言葉を紡ぐ。

「とにかく……ごめんなさい。敵だと思ってきつく言っちゃって」

「気にするな。吾等が現れたのも突然過ぎた」

もう1人のケロロはふっと笑った。

「とにかく」

場の空気を変えるような大声を出したのは秋だ。

「もう1人のケロちゃん、シヴァちゃんとドルちゃん。長旅大変だったでしょう？　食べ物がまだあるの。食べるかしら？」

「良いのか？」

もう1人のケロ口が躊躇うように言葉を出す。

「もちろんよ」

秋はにこりと笑うとお握りの皿を突き出す。

「すまない」

「やりー！！　腹減ってたんだ」

3人はそれぞれお握りを取り、食べた。

「すっげーうめえ！！」

「美味」

「旨いな」

「でしよう！　さ、みんなも食べてちょうだい」

秋は大きく笑うと、全員にも食事を促した。

「でさ……」

弥々華は唐突に口を開いた。

夕食後、地下秘密基地を歩くのは弥々華を先頭にもう1人のケロ口とシヴァヴァ、ドルルの4人だ。

「シヴァヴァとドルルは名前分かったから良いけど……もう1人の隊長はなんて呼べばいいわけ？」

「確かに最もだなあ！！　旦那」

「吾か？」

シヴァヴァに指差されたもう1人のケロ口はキョトンとした顔をする。

「だってずっともう1人の隊長って呼ぶの面倒じゃん。あだ名で呼んで良い？ シヴァヴァの旦那みたいなさ」

「ああ。構わんが」

「やった。じゃあね……」

弥々華は指を顎に当て、考え込む。

「んー……ああ！！ ダークってのはどう？」

「ダーク？」

「うん」

もう1人のケロロはしばらく弥々華の顔を見つめていたが、小さく頷いた。

「貴様が呼びたいならそれで良い」

「じゃ、そうさせて貰うね。あつと……部屋着いたよ」

弥々華は慣れた手つきで部屋を開けた。

「お休み……」

ダークは小さく呟いた。

「お休み。また明日」

弥々華は笑みを見せ、言った。

翌朝。

「おはよー」

朝、起き抜けでテンションの低い弥々華は地下基地のドアをくぐった。

「おはようであります」

「おはよう」

「おはよ。隊長、ダーク。2人とも早いね」

弥々華はうつすらと笑うと、朝食を取りに冷蔵庫の方に歩いていっ

た。

「もう1人の吾」

「なんでありますか？」

ダークはケロクの顔をじつと眺めた。

「弥々華から名を貰った。ダークと言う名だそうだ」

「あだ名でありますか？……ってどうしたでありますか！？」

ダークの顔から表情が消える。

「分からのだ」

「……え？」

ケロクはダークの呻き声に面食らった顔をした。

「吾には分からのだ。彼奴は何故吾等に親しく接するのだ……。

まるでお前たちに接するように」

ケロクは小さく笑った。

「弥々華殿はいつもあだから。我輩達と初めて会ったときもあんな感じでありましたよ」

「そうなのか？」

「そうそう」

ケロクはダークの背中を軽く叩く。

「気にすることはないでありますよ。ダーク殿」

「おはよーさあ」

「おーす」

「おはよう」

「おはようございます」

「あ、ラビ殿、一護殿、アレン殿、リンク殿」

ケロクは首だけで4人を振り返る。

リンクとアレンは身なりを整えているが、一護とラビはラフな服装だった。

「ふあ。うふあお」

端から現れた弥々華はふがふがと口を開いた。トーストを口にくわえている。

「はしたないですね。仮にも女性なんですから。そんな事をするのは良くないと思いますよ?」

リンクが呈した苦言に弥々華は渋い顔をした。

「ほつといてよ」

トーストを飲み下すと、弥々華は席に腰掛けた。

「んで? 皆さんのご予定は?」

ニツと笑った弥々華に反省の色は微塵もなかった。

「我輩は冬樹殿とガンブラを買いに行くであります」

弥々華はケロ口の顔をじつと眺めた。

「……本気? つか正気? この大変な事態に」

「やっぱりダメでありますか?」

弥々華は頬に微苦笑を貼り付けた。

「んー……でも行きたいんですよ? 護衛みたいな感じで着いて

いこうか? 2人だと心配だし」

「それじゃ頼むでありますよ」

ケロ口はそう言うと言と椅子を飛び降りた。

「じゃ、お昼食べたら出発ってことで」

それを言い残し、ケロ口は部屋から去った。

薄暗い部屋に、白衣の男が腰掛けていた。

「起きろ……起きろ!!」

男、シャドウは机に据えられたマイクに向かい怒声を浴びせ続ける。

「起きろ!! 破壊されてもいいのか」

その言葉を合図に低く空気を揺らす音が響いた。

【I get up Dr. shadow】

突然響いた音声にシャドウは頭を掻いた。

「音声翻訳システムがイカレたか」

シャドウは手元の端末を幾つか操作するとまたがなった。

「もう一度何か言え!!! オート」

【何でしょうか、シャドウ博士】

今度は完璧な日本語。シャドウは静かにほくそ笑む。

「よし。オート!!! お前に命令する。こいつにこれを感染させる」

シャドウはニヤニヤと笑いながらキーボードを叩く。

モニターには小さな小瓶と弥々華の写真が映し出された。

【了解致しました。ですがどうやって。私はプログラム、これもプログラム。あなた方とは次元が異なりますよ】

淡々とした口調のオートに、シャドウは引きつけを起こしたような笑い声を上げた。

「ホログラムを使い。そのためにつけたのだから」

【了解致しました。シャドウ博士】

モニターから小瓶と写真が消える。シャドウはそれを見て満足げに頷いた。

「上手くやれ、オート。ワタシの失態も……お前の主もそれで救われる」

T o b e c o n t i n u e d

第十四話 赤い瞳

「それで……なんでぞろぞろとあんたらまで来るわけ？」

弥々華はあからさまとも言える態度で不機嫌に唸った。

「だって、こつちの世界なんてそうそう見られる物じゃないさー」

「そうである」

ラビとクロウリーは辺りを見回しながら上機嫌に笑う。

「吾は今の地球をよく見たいだけだ」

「オラッチはヒマだったから来たぜー」

「同意」

ダークとシヴァヴァ、ドルルはさりとて言い返す。

「……つたく」

弥々華は俯いてため息を1つ。

「まあまあ、弥々華。そんなに気に病むこと無いよ」

宥めにかかったリップを弥々華の視線が貫いた。

「お前だつてきてんじゃねえの」

「あはは……まあそれはおいときまして」

リップは乾いた笑いと共に箱を動かすような仕草をした。

「ケロロさん。そのガン……ガン……ガンナント力屋さんってどこにあるんですか？」

「ガンプラでありますよ。ここからもう少しの所でありますよ」

ケロロは前を指差して笑う。

「そうですか。なら私は別に買いたい物があるのでそちらに向かってもいいですか？」

「買いたい物？」

首を傾げた冬樹に、リップは小さな笑みを見せた。

「ベークینگパウダーが欲しいの。ケーキ作ろうと思って。だからスーパーに行きたいの」

「ほお、ケーキ。楽しみでありますなあ」

ケロロは唾を飲み込み、顎を撫でた。

「スーパ―ならそこを曲がってすぐですよ」

冬樹が指差した曲がり角をリップはチラリと見た。

「ありがとうございます。じゃあ私はそっちに行きますね。買い物済んだらま
っすぐ基地に帰りますから」

「あ、待つさー。リップ」

「私もいくである」

軽く礼をし去るリップの背中をラビとクロウリーが追いかけた。

「行つてらっしゃーい」

弥々華は軽く手を振り3人を見送った。

そして6人はまた歩き出した。

おもちゃ屋の看板が見える公園で、弥々華とダーク、シヴァヴァと
ドルルはベンチに腰掛けていた。

「……退屈だな」

「旦那ア、しりとりでもすつか？」

「いや……」

そこまで退屈では無い、と続けたダークは遠くに視線を移した。

ケロロと冬樹が戻るまでの退屈な時間を持て余し気味に4人は過ご
していた。

「ん？」

「どうしたの、ダーク？」

ダークは何かに気付いたのか立ち上がった。

「どこに行くんだ？　旦那、弥々華」

「お前等はここにいろ」

ダークは弥々華の手を握ると小走りに進み出した。

「ねえ！！　ダーク。手離してくれない？　腰痛い」

弥々華は腰をほぼ90度に曲げたまま歩いてたため、腰痛を訴えた。

「すまない」

ダークは弥々華の手を離すと、また歩き出した。

「で、なんであたしを連れてきたわけ？」

弥々華はムツとした顔でダークに問いかけた。

「あれを見る」

指を差したのはすべり台の向こうでかがみ込む少女だった。

「あの子供がどうしたの？」

「転んでずっとあの格好だ。宿めてこい」

弥々華は毒気を抜かれた表情をした。

「本気？」

「当たり前だ」

ダークの表情を見る限り正気も正気なようだ。

「じゃあないなあ」

弥々華はぐちゃりと呟くと、その少女のほうに歩いていった。

「あ……おい、お嬢ちゃん」

弥々華は恐る恐る、少女に手を伸ばした。

少女はピンクのワンピースを身につけていた。栗毛の長い髪をポニテールに結っていた。

歳は6歳くらいだろうか。

「大丈夫か？」

ぽんと肩を叩くと少女は顔をこちらに向けた。

子供とは思えない無機質な瞳に弥々華は後退りしそうになった。感情がその瞳には感じられなかった。

「お前は……茨田弥々華か？」

「……は？」

弥々華の面食らった顔を少女は肯定と見たのだろう。少女の目に憎悪の色が宿った。

「マスターの……敵!!」

「うつ!!」

突き出した右手が、弥々華の胸に突き刺さった。

「あ……」

引き抜かれた腕にも、突き刺さっていた胸にも怪我や血の跡は無い。だが少女の腕は六角形の紋様がびっしりと浮き出していた。

「任務完了」

「おい!!」

少女は怒声に顔を上げた。

「貴様!! 何をしている」

「……お前も、いた」

少女の瞳にまたあの憎悪が宿った。

「おい、旦那!!」

「気絶!?!」

なかなか戻らないダークに痺れを切らした2人がやってきたとき、ダークと弥々華は地面に倒れていた。

「どうしたでありますか!!」

「軍曹!?! 弥々華さん!?!」

買い物を終え駆けつけた冬樹とケロロも思わずギョツとした顔を見せた。

「オラツチ達にも分からねえ。気が付いたら2人ともぶっ倒れてやがった」

シヴァヴァの説明にケロロは頷いた。

「状況は分かったであります。とにかく、基地に運ぶでありますよ」

ピッピッ。

2つの電子音が規則正しく響く。ラボではクルルがデータ採取に勤しんでいた。

「心拍数、脈拍、呼吸数異常なし。何を仕込まれたんだア？　この2人は」

視線の先には横たわる弥々華とダーク。顔色は証明のせいで青ざめて見えた。

「……あ？」

クルルが脳波のデータに視線を移した時だった。

「なんだ、これは？」

異常なしとは言い切れない脳波。一部の波形が尋常でなく乱れていた。

「脳……なるほどな。厄介な物仕込まれたもんだぜえ」

クルルは軽く笑い声を漏らすと、さらにデータの解析を続け始めた。クルルは答えに近づきつつあった。

「くくくく。なるほどなあ。こういう事かよ」

クルルは笑いながらモニターを眺めた。モニターには大量のグラフと化学式。

「全く。誰だよ、こんな厄介な物作りやがったのは」

クルルは腹立たしげにモニターを眺めると、また別のウィンドウを立ち上げた。

「ワクチン作らなきゃならねえな」

指先をキーボードに走らせると打ち込まれ始めるプログラム。
キーボードを打ち込む音と電子音が重なる。

ピーー！！

「なんだー！」

クルルは力一杯振り向いた。音と画面は心音停止を示している。

「な……」

クルルの視線の先の2つ並んだベッドには誰もいない。

「ついに発動しやがったか」

クルルは舌打ちを1つ漏らすと、キーボードのあるキーを力一杯押した。

サイレンが辺りに鳴り響く。

モニターの1つには『第四種警戒命令』の文字が浮かぶ。

「さて……どこまで持つかねえ」

クルルがキーボードに手を伸ばした瞬間だった。

「抹殺……」

ゆらりと黒い影が視界に入る。

「早えな。もうお出ましかよ」

クルルの首に冷たい感覚が走った。クルルは臆する事なく首だけで振り返る。

「大鎌持った死の天使たあ……イカレたもんだぜえ」

クルルは小さく笑う。

「なあ、弥々華」

2つの刃を持つ大鎌。それを携えたのは、漆黒と純白の翼を背に付けた弥々華の姿だった。

「黙れ」

一言吐き出した弥々華は、クルルの首に掛けた鎌を力強く引いた。

「見つけたぞ」

大量のロボットやメカニックを保存した格納庫。そこにダークの姿があった。

ダークはケロロの姿を模した巨大なロボットを見つけると笑った。全てをあざ笑うかのような恐ろしい笑い声で。

ダークはひらりとケロロロボに飛び乗った。

するとケロロロボは元の緑から黒に怪しく塗り変わっていく。手は鉤爪状に、肩からは棘が飛び出す。

瞳が赤黒く輝いた瞬間だった。

「新たな地球侵略の再開だ……」

ダークは小さく呟くとロボを進め始めた。

「新たな王が誕生するぞ」

ダークのその眼はロボと同じ赤に染まっていた。

ケロロ達と初めて出逢った時と同じ色に。

T o b e c o n t i n u e d

第十五話 能力ヘチカラの暴走

「よし」

リップはオープンにパウンドケーキを入れると蓋を閉じた。

「30分つと……」

スイッチを捻ると、低い音と共にオープンが熱を発し始めた。リップは小さく微笑むとオープンに背を向けた。

スツールに腰を下ろすと、急速なだるさが襲いかかった。

「眠……」

「危なかったぜえ」

クルルは口元を三日月に引き上げる。ガラリと襖を開けると視線の先には壊れ果てたホログラム投影機があった。

「まったく……あれが無きやどうなつてた事か」

クルルは残骸をどけると椅子に腰掛けた。迫り出たマイクに口を近付ける。

「基地にいる連中は直ちに司令室に集合しろ。ダークと弥々華が暴走した。敵に何かを仕込まれたせいだ。事態沈静及び確認には時間を要す」

クルルはそこで言葉を切った。

「弥々華は理性を失って殺害行為に走ってる。ダークの行動は未だ不明。被害拡大を防ぐ為これより基地を閉鎖する。全員司令室にさつさと集まれよ」

クルルは一息で言い放つとキーを叩いた。

全員が移動を始めたのが一目で分かる。

「さて」

クルルは誰もいない場所にいた弥々華に照準を絞った。ダークはまだ動かない。

開かれたウィンドウに映し出された地面にレーザーが着弾する。ひらりと飛んでかわすのを見てクルルは自嘲気味に笑った。

防犯システムのレーザー光線が追いつけないスピードで弥々華は廊下を疾駆した。飛び上がって空中で回転したり屈み込んだり、動きに淀みがない。隙も無い。

「理性さえ飛ばさなければ使える物かもな」

クルルは素っ気なく呟くと、ミサイルのスイッチを入れた。

「ったく……殺す気で行かなきゃ駄目って事かア？」

風を切る音。次いで爆発音。普通の人間なら良くて大怪我だろう。

「ククツ、まだ動けてるみたいだな？」

額からの出血がモニターに映る。だが臆する事は無いようだった。

「じゃあねえ。後回しにするか」

クルルは弥々華の映るウィンドウを脇に除け、ダークの映ったウィンドウを大きく広げた。

「おい、アレン」

素っ気ない声がアレンに掛けられた。

「なんですか？ テイト」

「リップ知らないか？」

周りにいる人間を見回しながらテイトが問い掛けた。たしかにあのやたら目立つ緑髪はどこにも見えない。

「分かりません……」

急速に曇ったアレンの顔を見て、テイトは舌打ちした。

「おい！！　誰かリップ知らないか！？」

全員が顔を見合わせたのがティトには見えた。

「もしかして……」

口を開いたのはラビだった。

「キッチンかも知れないさ……。ケーキを焼くとか張り切ってたし」
「またもやティトは盛大な舌打ちを漏らした。」

「あんの馬鹿女！！」

ティトは背中を向け、駆け出した。

「どこに行くんだ？」

「リップを助けに行く」

振り向いたティトの目は、荒れた海のような輝きを宿していた。

「ふわ……」

リップは思わず眠い眼をこする。どうやら昼寝をしてしまったらしい。時間にして10分前後といったところだろう。

「いたた」

腰がバキバキと音を立てる。

リップは思わず眉を潜めた。

さて……時間もあるしみんなの部屋に戻るうか。

そんな事を考えながらドアの前に立った瞬間だった。

「あれ？」

首が自然と傾ぐ。ドアが開かない。

リップは試しに地団駄を踏んで見たり、こじ開けようとドアに指を掛けたりしてみた。

「嫌だ……開かないじゃない」

リップの顔が青ざめた。

「クルルさん！！ 聞こえてたら返事して下さい！！ クルルさん！！」

音を立ててドアを叩く。

「何かあったの……？」

ドアに握り拳を当てたままリップは小さな呻き声を絞り出した。

「……もしかして敵襲？」

【無理だね】

スपीカーを通したクルルの言葉は例えようもなく冷たかった。

「待てよ！！ あいつを仲間の手に掛けさせる気が！？」

「そうであります！！ 弥々華殿もケロロ小隊の一員でありますよ」

反発したのはティトとケロロだ。

【うるせえな……リップ アドバンスの居場所は特定した。いま基地の台所にいる。そこは鍵掛けたからヘタにリップが暴れねえ限り無事でいられるはずだぜエ】

「本当か？」

ティトは背筋が冷えるような声音で聞いた。

【もちコース。こんな時に騙くらかすほど馬鹿じゃないんでな】
「そうか」

ティトが安堵の息を吐いた時だった。

【さて、敵さんのお出ませえ！！ 全員伏せな】

次の瞬間、爆発と砂煙が辺りを覆い尽くした。

【そいつはダークだ。だが理性を失ってやがる。只今ワクチン製作中なんでなあ。しばらくは足止めヨロシク！】

乱暴に音を立てて通信は切られた。

「足止め？ 我輩達がダーク殿をばつちし戻すから心配無いでありますよ……クルル」

「……っあ……」

弥々華は廊下に屈み込むと呻き声を発した。心臓の鼓動が一足飛びに跳ね上がった。

「う……ああ」

僅かに残る理性に紗がかかる。口から唾が地面に垂れ落ちた。

「くあああ……」

翼を丸め、手負いの鳥のような弥々華は胸を押さえ叫んだ。耳を覆うような絶叫と共に、弥々華は舞い上がった。

青い劫火が地を焼く。

そこから飛び出した影が巨大なロボットに飛びかかった。

「ミラクルスーパードルトラさっさと元に戻りやがれアタック！」

如意棒に似た棒の先から放たれた光弾がダークケロロボに着弾する。

「ちっ！！ やっぱりきかねーか」

シヴァヴァの攻撃を軽くないしたダークは無造作にミサイルを放った。

辺り一面に弾幕を張られ全員が飛び退く。

「咆える蛇尾丸!!」

引いたシヴァヴァと入れ替わるように恋次が刀を伸ばした。
鞭のような刃節がダークの左腕に絡みつく。

「六幻……拔刀!!」

追い討ちをかけたのは神田だった。日本刀型のイノセンス、六幻が
右腕に浅く傷を付ける。

「停滞」

「その通りだな」

背中合わせになったドルルとギロロが同時に銃を乱射した。ビーム
が跳び、ロボの装甲がへこんでいく。

「行け」

ティトの炎がロボの足元をよろめかせる。

「今でありますタママ!!」

「はいですう!! タママインパクト!!」

一息で応じたタママの光線が駄目押しとなった。全員が空中に飛び
上げれる程の衝撃と共にロボは倒れた。

「さて……」

クルルはダークケロロロボが写されたウィンドウを縮小した。変わ
りに大写しになるのは、廊下を駆ける弥々華だった。

「やばいのはこっちかねえ」

モニターの中の弥々華は氷のように凍てついた眼をしていた。だが
その目は何故か無垢にも見えた。

「本能に浸りすぎて欲望もねえってか？」

クルルは1人ごちる。

殺人本能の塊と化した少女に少しだけ同情しながら、クルルはワク

チン製作を続けた。

「ダーク殿!!」

ケロロはロボに駆け寄った。かすかに焦げ臭い、嫌な臭いが辺りに漂っていた。

ケロロに呼応するように、ロボ上部のハッチが開いた。

転がり出たダークにケロロが駆け寄る。

「大丈夫——」

「触るな!!」

ダークは威圧的にケロロをはねのけた。

「吾はまだ……止まれんだ……吾は地球を……支配せねばならん」
ぶつぶつとうわ言のようにダークは呟く。その眼はまだ赤い。

「吾は地球を支配せねばならん……それが吾の望み……」

「ダーク殿」

頭を抱えたダークにケロロが軽く触れた。

「違うでありましょう?」

「黙れ!!」

柔らかなケロロとは対照的にダークは硬い怒りをみせた。

「貴様に何が分かる!! 吾は地球を支配せねばならんだぞ」

ダークは怒りのまま手をはねのけた。

「地球を支配せねば吾は……吾は……」

ダークが言いよんだ瞬間だった。

「風華……招来」

壁が勢いよく突き破られる。

そして響く笑い声。

「ふふふ……みんな、みつけた」

虚ろな笑い声に全員が振り向く。全員の視線の先にいたのはかすかに笑う弥々華の姿だった。

「探してたよ……さあ、みんなおとなしく」

弥々華は笑みを張り付けたまま消え失せた。

「う……？」

「殺されて？」

一護の首に鎌を当てた弥々華は小さく首を傾げた。

T o b e c o n t i n u e d

第十五話 能力ヘチカラの暴走（後書き）

超劇場版ケロロ軍曹 誕生！究極ケロロ 奇跡の時空島であります
！！を遂に見ました。

詳しい感想はブログにありますのでお暇な方は活動報告か私のユー
ザーページからどうぞ。

アクアクで何かしら書きたいなあ。

第十六話 侵略者・殺戮者

無表情な眼に三日月型の口。人間味に欠けた表情の弥々華は高笑いを漏らす。

「殺されて？」

鎌を首に掛けられた一護は思わず唾を飲み込んだ。そこにあるのは、はつきりとした殺意だった。

「弥々華！！」

思わず弥々華は振り向いた。

その隙を突き一護はしゃがむ。

「うつ……」

アレンの神ノ道化に弥々華は貫かれた。壁に肩を押し付けられそのまま貼り付けられる。

「邪魔しないでよ」

怨めしげに弥々華は目線を上げた。ダメージは全くない。

「弥々華……もうやめてください。あなたはこんな事、望んでないでしょう？」

アレンの目は必死だった。

「うるさいなあ……」

弥々華は神ノ道化を無造作に引き抜いた。大剣をアレンに投げつける。

「うあ……」アレンの肩を走り抜けざまに切り裂いた。

「にはは……いいね。あたしその顔好きだよ」

更に弥々華は追撃をかけようとアレンに近寄った。

「アレン……」

弥々華がその場から姿を消した。そして地面に金色の光線が食い込む。

「邪魔しないでよ……もうちょい楽しみたかったのに」

パン。と小気味良い音を立ててタママが吹き飛ぶ。振り上げられた

足とへこんだ壁が蹴りの威力を物語る。

「トドメー!」

声が裏返る。次の瞬間、弥々華は地に墜ちた。

「きゃ!」

手を着いた床がすっぽ抜ける。

リップが気が付いた時には地面に尻餅を付いていた。

「あたた……」

頭から落ちなかった事は幸いだったがやはり痛い。リップは臀部をさすりながら立ち上がった。

「どこに出たんだろう?」

そこはひどく薄暗い部屋だった。そして聞こえるカタカタと言う音。リップは音に誘われ、足を進めた。

「……クルルさん?」

「くつく……やっと来たか」

クルルは手を止めず笑う。

「リップ アドバンス。仕事の時間だぜえ」

クルルは手を止める。

「詳しい説明は後だ。今から俺のワクチンをお前の符に移植する」

「あれ。おかしいわね」

夏美は首を傾げた。スターフルーツの乗った皿が揺れる。

「なんで開かないのかしら」

「どうしたの？ 姉ちゃん」

後ろに突然現れた冬樹に、夏美は飛び上がった。

「冬樹！ あ……その——」

「そのスターフルーツ、軍曹に？」

夏美は首を横に振る。

「ボケガエルにじゃないわ。ダークによ」

「なら軍曹にじゃない」

冬樹は事も無げに首を振った。

「あれ？ でも1人分には多くない？」

確かに皿にはスターフルーツが山のように盛られていた。

「弥々華さんによ。ボケガエルの仲間だから効くかなって」

その言葉に冬樹は苦笑いをこぼす。

「姉ちゃん。弥々華さんは人間だから聞かないよ」

「……そう」

夏美は僅かに赤面した。

「で、姉ちゃん。下に行かないの？」

夏美は頭を垂れた。

「行きたいのは山々何だけど——」

ドン。

轟音が夏美の言葉を遮った。

「な……なんなの？」

ぐらりと揺れた地面に、夏美と冬樹はうろたえた。

弥々華は地面に押しつけられていた。視線の先には憎々しげな顔をした口ボットに騎乗したダークがいた。

「貴様は排除する」

「なにが言いたいの？」

赤い眼がかち合う。

「貴様は吾の支配する世界には邪魔だ」

振り上げられた手に、弥々華は僅かに身じろぎした。足が埋まり動けない。

弥々華はまっすぐ手を伸ばした。鎌を突き出す形で。

「風獄——」

「「「止める！！」」」

3つの怒鳴り声が割り入る。

黒い影は弥々華の首に刀を突き付け、赤い影と緑の影はダークの前に立ちふさがった。

「旦那に手を出すな！！」

「弥々華殿！！ 止まって！！」

「いい加減にしろ！！」

シヴァヴァとケロロ、一護は腹の底から怒鳴る。それを残りの全員が無言で見守っていた。

「旦那も旦那だ！！ また地球侵略なんて、バカな事言い出すなあ！！」

「冬樹殿は、夏美殿は、みんなはどうなるでありますか！？」

シヴァヴァはまくし立てた。

「向こうで待ってる、ミナツは、キフユはどうなる！？」

ミナツとキフユ。夏美と冬樹に似た居候先の2人。シヴァヴァは彼らの事も言葉に乗せた。

「戻れよ！ 旦那！！」

「同意」

浮上したドルルが頷いた。

「シヴァヴァ……ドルル……。吾は、吾は……！！」

ダークは頭を抱え呻き声を上げた。

「弥々華……お前はもう分かってるんだろ」

諭すような声に弥々華は固まる。

「戻ってこい」

「一護……お前を……殺したいけど……あたしは」
眼が揺らぐ。

「戻る？　でも、嫌……分かんない」

弥々華も、頭を抱える。

「分かんないよ!!」

「一護!!　ケロロさん!!」

2人が開けた穴から大声が響く。符を空飛ぶスケートボードのように扱うリップの姿があった。

「刀を出して!!」

一護とケロロは顔を見合わせた。

「でも我輩——」

剣なんて持つてない。ケロロはそう言おうとした。

「ケロロ!!　コレを使え」

ギロロの声だった。

投げつけたのはビームソード。

「助かるであります!!」

刀をかざす2人に、リップが符を投げた。

「胸に刺して!!」

張り付いた刀が見た目を変える。六角形の模様が浮き出、粒子に近づく。

「うおおおお!!」

「いつけえ——!!」

「目を、醒ませエ!!」

プログラム化された天鎖斬月とビームソードを一護とケロロは弥々華とダークの胸に突き刺した。

「かは……」

2人の肺から吐息が流れ出す。身体は一瞬凍り付くと六角形の紋様が全身に浮き出た。

するりと手から大鎌が零れ落ち地面に付く前に消える。翼も、羽根を散らし消えていく。

ロボは光を散らしながら元の緑に戻っていく。

苦痛に歪む2人の顔はどこか微笑んでいる様にも見えた。

「みんな……ごめんなさい……」

「済まない……みんな」

2人の謝罪は、全員の耳に届いた。

「ありがとう」

「終わったな」

クルルは椅子に倒れ込む。モニターにはぐったりと倒れ込む2人の姿があった。

「くつくつく……派手にやりやがって」

ウィンドウを畳み、出したのは半壊した基地の映像。

「修理費はA p d s c oにでも回すか」

クルルはまた笑いながら、キーボードを叩く。打ち込まれたコードは『r e p a i r - a l l』。全てを直せと命令されたコンピューターが派手に音を立て始めた。

「しばらくかかるかねえ」

機械音の中、クルルは修理期間の計算を始めた。するとだった。

チン！！

突然の大音声にクルルはひっくり返った。

「なんだ！！」

クルルは椅子に這い上がると慌ててキーボードを操作し始める。

いくつかのウィンドウを開くとクルルは思わず吹き出した。

「オープンかよ」

画面には基地の台所にあるオープンが映し出されていた。

中にはリップ特製の胡桃のパウンドケーキがキツネ色をして鎮座していた事は言うまでもないだろう。

T o b e c o n t i n u e d

第十七話 サヨナラの空

「う……ん？」

弥々華は目を開けた。

真っ白い天井が目には焼き付く。弥々華は眉間を揉みしだくとゆっくり瞬きした。

混濁した意識の中、弥々華は体を起こすとしばらく手を見つめた。

「頭だる……」

「よお……起きたか」

弥々華がゆっくり頭を動かすとドアの辺りにクルルが立っていた。小脇にi padに似た端末を挟んでいる。

「クルル？」

クルルは弥々華のベッドに歩み寄ると近くにあった椅子によじ登った。視線が揃う。

「1つ2つ質問がある」

クルルは慣れた手つきで端末を起動させた。

「どこまで覚えてる？」

「どこまで……？」

次の瞬間、弥々華は頭を抑えた。

公園、ベッド、ラボ、基地。

「や……」

駆け抜けた廊下、そして司令室。

「嫌だ……」

能力の暴走。感情の暴走。

「あたし……」

手に、足に残る感触。

「……最低だ」

フラッシュバックに襲われた弥々華は自分の体を抱き締めた。

「その調子だと全部記憶にあるみてェだな」

弥々華は震えながら小さく頷いた。

「みんなは……どうなったの」

クルルは笑う。

「無事だ」

「……よかった」

安堵したように弥々華の体の力が抜けた。

「よかったあ!!」

噛み締めるように弥々華は笑った。

「後よお」

クルルは口を開いた。

「首輪の解析が終わったぜえ」

「首輪？」

弥々華はオウム返しに聞き返す。

「昨日の夜頼んだだろうが」

弥々華はしばらく明後日の方向を見ると手を叩く。

「ああ幽霊屋敷の!!」

「それだ」

クルルは首を縦に振る。

「あれはAKUMAや虚を特殊な電波で操る物だ」

「そんな事が出来るの？」

「ああ。特殊な電波……この場合は能力者の持つ微弱な物だな。それがあればな」

「それ、あたし達で真似出来ない？」

クルルはまた小さく笑う。

「1人1人違うものをどうやって真似るんだよ？」

俺たちの技術

でも無理なやつをよお」

「そっか」

弥々華は落胆した顔を見せた。

クルルは小さく笑うと端末を消し立ち上がった。

「どこ行くの？」

「ラボ。あと埋め合わせはイラネエゼ？」

「は？」

クルルは弥々華を指差した。

弥々華はすつと視線を下ろす。

「——ッ！？」

声にならない声。服が……はだけている。胸元が——さしたるモノはないが——かなり際どい所まで見えている。

ばたつきながら悲鳴にならぬ悲鳴を上げ、弥々華は慌ててそこを隠す。

「くくつ……じゃあな〜」

クルルは飄々とした調子で、姿を消した。

弥々華の顔が真っ赤に染まる。

「く……く……クルルのド変態！！変態バカ！！」

ドン。と無意識にオーラを込めた拳を振り下ろした時だった。

「きゃ」

体が投げ出され床に転げ落ちる。

「あつだ……つて……え？」

転げ落ちた弥々華は呆然とベッドを見つめた。

「なんで？」

マットレスはへこみ、ベッドはひしゃげている。ちょうど、弥々華が叩いた位置で。

「よお……」

「クルル……だったか？」

ダークは酷く冷静な眼でクルルを見つめた。

「吾は一体どうなっていた？」

全てを理解した眼がクルルを射抜いた。

「本能を解放するウイルスだ。お前のキルルの遺伝子と結び付いたんだろっぜ？」

「そうか」

俯いたダークをクルルは冷静な視線を送る。

「おい——」

クルルが口を開いた瞬間だった。

「クルル——！」

ガラリとドアが開く。

「「弥々華！」」

2人の声は無意識にハモった。弥々華の顔は酷く焦燥している。

「クルル、あたし変だ……ってダーク、起きたんだ。良かった……」
弥々華はほっとしたような顔を見せた。

「ああ、吾は無事だが……どうしたのだ？　そんなに慌てて」

「ベッド殴ったら壊れた。今までこんな事無かったのに」

「はあ？」

ダークは珍しくポカンとした顔をした。

「地球人はそんな力を持つてはいないのだろう？」

「ちよつと見てて」

弥々華は2人が見やすい場所に立つと壁を躊躇無く殴った。

「……嘘だろう？」

「マジかよ……」

2人の顔から血の気が引く。弥々華の手首から下が壁に埋まっている。

「弥々華、ちよつと来な」

淡々とした口調でクルルは弥々華を手招きする。

「ダーク、話は後だ」

クルルはそう言い残し弥々華と共に姿を消した。

「ああ……だがこれ、どうするのだ？」

ダークが見つめる先には弥々華が開けた穴があった。

クルルは弥々華に全身スキャンに血液検査。さらに脳波やらの検査が行った《おこなった》。弥々華は受ける最中、不機嫌な顔。クルルはそれ以上に不機嫌な顔をしている。

「……これで終わりだぜエ」

「異常は無いの？」

「目立った異常はな」

クルルは小さく肯定を返した。

「ただウィルスが極僅かに体に残ってやがる。上手いこと体と結びついてる所から見て、怪力の原因はそれで間違えねえ」

「そつか。治るの？」

「治らねえな。しばらくは。ただ結びついてるのはオーラの部分だ。意識しなきゃ怪力にはなんねえよ」

「よかった。じゃ普通に大丈夫か」

弥々華はほっとした顔でクルルを見た。

「んじゃ、部屋に戻るね」

弥々華はヘラツと笑うと、ラボを後にした。片手をひらひらと振りながら。

「弥々華！！」

部屋に戻る最中だった。弥々華にとっては見慣れた緑色の髪の少女が満面の笑みを浮かべた。リップだ。

「リップ……おはよ」

「無事でよかった……」

リップは何気ない仕草で弥々華に抱き付く。

「部屋に行ってもいなかったし。心配してたんだよ？」

「リップ。ありがとう……ごめんね」

弥々華がリップの腰に手を回した時だった。

「何やってんだ。お前ら」

「一護!!」

弥々華はリップから離れると、一護の前に歩み寄る。

「よお。元気そうだな？」

「当たり前じゃん」

悪戯っぽい笑みを浮かべ合い互いに拳をぶつけ合う。

「助けてくれてありがとう。おかげで誰も殺さないで済んだ」

弥々華は一護の顔から眼を反らさずそう言った。

「……気にすんな」

一護もまたふつと微笑んだ。その柔らかな表情かおに弥々華は頭を下げた。

「ごめんなさい」

静かな病室に冬樹とケロロ、ダークの姿があった。

「もう帰ってしまうてありますか？」

「もっといればいいのに」

ケロロと冬樹は寂しいと言わんばかりの表情を浮かべる。視線の先にはダークの姿があった。

「ああ。吾らも帰る場所がある。あまり長く旅をしないと誓ったものでな」

淡々とした口調。否定の無いニュアンスに冬樹は小さく頷いた。

「また、逢えるよね」

「無論だ」

ダークは静かに頷いた。

「さて、シヴァヴァとドルルにも支度をさせるか。部屋に居るぞ」

ダークは何気ない仕草で立ち上がる。

「もう1人の吾……否、ケロロよ」

ケロロは思わずダークを凝視した。

「今、我輩の名前を――」

「先はすまなかった。助かったぞ、ケロロ」

そうとだけ言い残しダークは部屋を去った。

「待つて!!」

弥々華が大声を出す。

ダーク一行が発発間近のリビングルーム。全員が揃ったそこに弥々華が駆け込んできた。

「弥々華殿!! どこ行つてたんでありますか？」

「悪い隊長!! ちよつとね、カメラ持ってきたの」

「カメラ？」

数名が怪訝な顔を見せる中、弥々華は笑顔でカメラを掲げた。

「記念写真。全員で撮らない？」

そこからのドタバタ騒ぎはやかましさ極まりなかった。

写真に写りたがらないクルルと神田の捕獲に始まり、いない者の呼び出し、どこで写すかの問題が解決する頃にはすっかり日が暮れていた。

「もーちよい詰めて……」

弥々華は庭先に置いたテーブルのカメラを見ながら腕を振る。

「ほら！！　　神田、クルル、逃げないでよ」

神田はリナリーに腕を掴まれ、クルルは白髪の少年サブローの頭に載せられていた。

因みにサブローの隣には夏美が控え、夏美には小雪がしがみついていた。それをギロロが睨み付けている。

「よし！！　　オッケー。シャッターまであと10秒」

弥々華は慌ててケロロ小隊が固まっているところまで行くとかがみこむ。

パシャッ！！

各人が思い思いのポーズを決めた後に鳴り響くシャッター音。

「はい！！　　撮影完了」

弥々華は楽しげにカメラに歩み寄ると先程撮った写真呼び出す。数名が弥々華の周りに集まり、写真を眺める。

個性が滲み出たその写真は一生の思い出になるだろう。

そう考えた弥々華は思わず頬を綻ばせた。

「これでお別れでありますな」

「ああ」

互いに寂しげな顔をする2人。

「2度と会えんという訳ではない。また来る」

「そうそう。オラッチ達も結構暇だからな」

「再来」

「分かってるでありますよ。絶対、また会えるであります」

乗り込む背中を見ながら、ケロロはそう呟いた。

「またねー!!」

冬樹が声を張り上げる。

全員が蒼空の彼方に消え行く宇宙船を見守っていた。

T o b e c o n t i n u e d

第十七話 サヨナラの空（後書き）

予告です。

以前感想欄で話をしていた新作をcross worldと平行して書いていこうと思います。

ケロロ軍曹超劇場版5の後日談になる予定です。
お暇な方はどうぞ。

第十八話 終焉の予兆

「いた！」

ぱしんと言つ音と共に、弥々華は竹刀を取り落とした。手の甲が薄赤く染まる。

さらに畳み掛けるように頭に一発喰らい、弥々華はよろけて腰を着いた。

「チツ。手を打たれたくらいでぼさつとしてんじゃねえよ」

神田はどこか腹だたしげに見える仏頂面で弥々華を見下ろした。

「うるさい」

パンと地面に手をついて弥々華は跳ね起きた。

竹刀を引き寄せると軽く構え直した。

「もういつちょ！」

駆け出した弥々華に、神田は不機嫌な笑みを浮かべた。

「なにやってるんだ？」

シミュレーションルームに入るなり一護は思わず口を開いた。

左から、恋次・ルキア・ラビ・ギロロ・クローリー・リナリー・タママ・アレンの姿があつた。彼等の視線の先には、竹刀を打ち合う神田と弥々華。

「また、あいつらか……」

一護は少なからず呆れた口調で呟いた。

弥々華がウイルスに感染したあの事件から4日。クルルに病室からの退院を言い渡されてから3日になる。その日から弥々華は誰彼構わず組み手を吹っかけるようになった。

「昨日は俺で今日はあいつか」

無意識に一護は苦笑した。始まると長いのだ。

「今んとこ弥々華が粘ってるけど……さっき1本取られた事を考えるとそろそろ終りそうさ」

ラビは一護にニツと笑いかける。

一護が言葉を返そうとした瞬間だった。

「だ！」

弥々華の奇声。そして飛んで来るのは竹刀だった。

「どこ飛ばしてるのよ。神田」

リナリーが手を口に当て呼び掛ける。

神田は舌打ちで返事をする、弥々華の襟首を掴んだ。どうやら完璧に気絶したらしい。頭にたんこぶが出来ていた。

神田は弥々華をギャラリーに放った。

クロウリーがとっさに受け止めたが、足がギロロを蹴飛ばしていた。

薄暗い世界を弥々華は走っていた。

「きゃ……」

ごろりと体が転がり、地面と口づける羽目になった。

「いたた……」

弥々華は回りを見回すと思わず後ずさった。

ありえない。

真っ白になりかけた頭でかろうじて思考する。

こんな事ありえない。

血にまみれた、死体。

ありえない。でも誰が……。

思考は止まらず流れる。

「一護……アレン。なんで……」

ここは一体何なのだろうか。眼を閉じても見える惨劇に、弥々華は吐き気と恐怖を覚えた。

「——せいだ」

弥々華はゆっくりと眼を開けた。

「一護……？」

「お前のせいだ！」

弥々華の息が止まる。

首に掛かる大きな手。

「止め……！！」

弥々華の言葉が途切れる。

「止めてなんて言えないでしょう」

「アレン？」

「僕たちを殺したくせに」

そうだ。

弥々華の頭の中で誰かが同意した。

あたしが殺した……。

「今さら認めても、遅いですけど」

「じゃあな、弥々華」

首の骨が音を立てた。

頭蓋骨がひしゃげた。

自分の絶叫が嫌に遠く聞こえた。

「——っあ……？」

真っ白い天井が弥々華の眼に写る。

布団の感触、ベッドの硬さ、かいた汗の冷たさがじわじわと戻って

きた。

「夢……」

よかった。

安堵したように息を吐き出す。喉と頭の疼きが取れて行く。頬に涙が伝う。

弥々華は起き上がると膝を抱き寄せた。

怖い。怖い。

自分の思考回路が怖い。

悪夢は事件の後からずっと続いていた。

そんな事をもやもやと考えていると、不意にノックの音がした。

「……」

会いたくない。

感情が先立ち、弥々華は無視を決め込んだ。

コンコン。

さつきより音が大きくなる。

「うるさい」

弥々華は声を出さずに呟いた。

「弥々華殿？ 起きたでありますか？」

次のノックには言葉がついて来た。ケロロだった。

「隊長？」

反応は無意識に近かった。

その時ドアがゆっくりと開いた。

「目が覚めたでありますか。弥々華殿」

ケロロは弥々華の視線の先でへらりと笑う。全くいつもと変わらない笑顔だった。

「……何しにきたの？」

弥々華は掛け布団を持ち上げた。クルルの件を思い出したからだ。

「ちよつと話したいであります」

ケロロは足音を立てて手近な椅子に腰掛けた。

「弥々華殿。ぶっちゃけ聞いちゃうであります、この前の事気に

してるでありますか？」

弥々華は思わず眼を見開いた。

「この前の事って……あたしがみんなを殺しかけた時の事？」

弥々華の声には自嘲の色。口元には乾いた笑みが浮かぶ。

ケロロは頷くと口を開いた。

「さつき叫んでいたであります。しかも今日だけじゃなく、ここ最近ずっと」

弥々華は口を半開きにし、ケロロを見詰めた。言葉が喉の奥に引っ掛かったような感覚だった。

「泣いてるでありますな……」

ケロロはベッドに飛び乗ると弥々華の頬に触れた。

「みんな言ってたであります。弥々華殿が最近変だって」

「え……？」

「訓練の時は焦りすぎだって」

「う……」

ケロロは苦笑した。

「しかも寝たら寝たで叫んで飛び起きる」

今度は弥々華が苦笑した。

「ばれてた……ね。隠せてると思ったのに」

弥々華は頭を掻く。

「情けね……こんなにばれるとは」

「隠す必要なんて無いでありますよ……」

弥々華の頬にひんやりとした感触が走る。

「みんなみんな、頼っていいんでありますよ」

ケロロは弥々華を見た。

「我輩は上司でありますけど……友達でありますよう？」

「うん」

「弥々華殿……？」

弥々華はケロロの肩に手を置いた。

「ありがとう……ごめんなさい……」

声は嗚咽に変わる。

弥々華はただ子供のように泣いた。

「ケロロさん」

「弥々華はどうだ」

弥々華の部屋の外にリナリーとルキアの姿があった。

「今は落ち着いてるであります。お茶を飲んだら疲れてたみたいでまた寝ちゃったでありますよ」

「そうか」

ルキアは安堵の表情を浮かべる。

「でもルキア殿とリナリー殿が教えてくれなきゃこうもはっきりは言えなかったであります」

「でもケロロさん」

口を開いたのはリナリーだ。

「なぜあなたは弥々華を落ち着かせにいつてくれたの？」

ケロロは一瞬、リナリーを凝視した。

「決まってるであります。我輩は弥々華殿の友達でケロロ小隊の隊長でありますからな」

「ナスカ様」

そこは小綺麗な執務室だった。ナスカは持っていたペンを置くと声の主を見た。

「ジュエルか」

何事だ？

そう続けられた言葉にジュエルが頭を上げた。

「例の件の準備が整いました」

「K11計画か」

「左様でございます」

その言葉を聞いた途端ナスカの顔は歓喜に歪んだ。

「分かった……では第2段階に移行する」

ナスカはそこで言葉を切った。

「今回は俺が出る。シャドウに伝えておけ」

「了解致しました」

ジュエルがそう言って引こうとした時だった。

「シャドウにもう1つ伝言がある」

「なんですか？」

怪訝な顔をしたジュエルにナスカは囁いた。

「あのプログラムの餓鬼を使い」

t o b e c o n t i n u e

第十九話 開戦

「随分……薄汚れた世界だな」

世界が開く。黒い世界から現れた、真っ白い男はたった1人で呟いた。

西澤タワーの最上部、風が吹きすさぶ狭い足場に男は立った。そして無造作に懷に手を入れる。

取り出したのは薄桃色の小瓶。

「古代の破壊者よ……俺の名はナスカ。お前に命ずる。力を振るえ。世界を壊せ。お前の思うままに」

囁く。そしてナスカは小瓶を中に放った。地面に落ちていく小瓶。

シャン。

弾けるような音が確かに響いた。

「さて、開戦だ」

ナスカは微かに笑う。

次の瞬間、空間に沢山の穴が空いた。

闇の眷属が飛び出して行くのをナスカは無表情で見送った。

「寒……」

「大丈夫？ 西澤さん」

桃華は思わず首をコートに埋めた。顔を覗き込む冬樹に思わず頬が染まる。

「大丈夫です……でも寒いですね」

「そうだね。まだ10月になったばかりなのに」

太陽は陰り、気温が急激に下がったのが数分前。薄手のコートを着てきて良かったと、桃華は小さくため息を吐く。

「あ……！」

物思いにふける桃華は思わず頭を上げた。

目の前には目と口を見開いて呆然と立ち尽くす冬樹がいる。

「ど……どうしたんですか？」

冬樹は油の切れたロボットののような動きで空を指差した。桃華の視線も揃って動く。

「え……！」

思わず桃華も声を上げた。空に穴が空いている。そこから飛び出していく、黒い体、白い体。

「大変だ！」

冬樹は絡まった声で悲鳴を上げると全力で駆け出した。

「冬樹君！ 私は親衛隊を呼んできます。町の人達の避難に当たらせます」

桃華の声に冬樹は慌てて振り向いた。

「分かった！」

小さくなる冬樹の背中を見送りながら、桃華は小さく呟いた。

「冬樹君……無事でいて下さい」

「地震？」

「違うと思うけど……」

弥々華とリップは思わず顔を見合わせた。足元が揺れた気がしたのだ。

「気のせいかなあ」

「分かんない。ちよつと外、見て来るよ」

弥々華はベッドから降りると、靴を突っかける。

「行ってくるね」

「行つてらっしゃーい」

弥々華は廊下に出ると、辺りを見回す。これと行つた異常は無い。

「気のせいかな……やっぱ」

弥々華は頭をカリカリと掻いた。

「んー。でも気になる」

独り言をぶつぶつ呟きながら、しばらく考えた。

「よし、行くか。外」

「なんだよ……あれ？」

日向家の屋根に登つた一護は、思わず呻いた。

「最悪……じゃない？」

途中で合流した弥々華も、言葉を口に乗せる。

空間は裂けAKUMAや虚が、音もなく飛び出していく。

一護はおかしな霊圧を感じて来てみれば、弥々華は地震らしき揺れの正体を探つて来たらこの状態だ。

地獄絵図に近づく世界に、一護は息を飲んだ。

「オイ……」

一護の言葉にも、空に踏み切つた弥々華は振り返らない。

「一護はみんな集めてから来て……！ 先行く」

「なに言つてんだ！」

一護は追いかけ、腕をつかんだ。

「離して」

弥々華の声はひどく冷静だった。

「待てよ」

「待てない」

弥々華は真摯な瞳で、一護を見据えた。

「ダメかも知れないけど……なんとかなるかも知れない。そこは分かれないけど」

弥々華は、一護の腕を払う。

「早く行かなきゃ取り返しがつかなくなる」

そう言い残し、弥々華は曇り空に姿を消した。

「大変だ……」

アレンがそう呟いた瞬間、体が吹き飛ぶ。手に持っていた竹刀が離れるのが、分かった。

「痛た……なにするんです！ 神田」

ぶつけた頭をさすりながら神田を見つめれば、小さな舌打ちを返される。

「どうした？ モヤシ」

「アレンです……。ああ……最悪だ。AKUMAが出ました！！」
冷静になった頭で呟くと、立ち上がる。

「早く行かないと……街が危ない」

「623 《むつみ》の俺ラジオー！」

明るい声でマイクに向かい呼び掛ける。

収録ブースに座る少年はクルルのパートナーであるサブローその人だった。

「まずは最初のお便り……ラジオネーム——」

いつものようにリスナーから寄せられたメールを読み上げようとした時だった。低いバイブレーションが腰を打つ。

メールだ。

サブローは素早く手に持ったメールを読み上げると、音楽を流した。そして、ポケットに手を滑りこませると、携帯電話を取り出した。液晶に目を走らせる。

「また、アクシデントの匂いだね」

サブローは小さく苦笑すると、音楽の終わりを待った。

音楽がフェードアウトしていく。

サブローは曲名を囁くと口調をがらりと変えた。

「おっと、ここで臨時ニュースが入りました。どうやら西澤タワーで怪奇現象が起きているみたいだ。リスナーのみんなは近付かないほうがいいかも」

横目でスタッフを見れば苦笑以外の何物でもない顔。それをサブローは笑顔でかわす。

「さて、次のおたより」

「怪奇現象……？」

夏美はラジオに聞き返した。もちろん返事は無く、違う手紙が読まれるだけだ。

「まさか、またボケガエルの仕業じゃ……」

頭の中に浮かぶのは緑の軍曹。

大好きなラジオを放り出したくない欲求と侵略者を放置できない責任感がじりじりと胸を焦がす。

「ああ、もう……」

勝ったのは責任感。とはいえ名残惜しそつにラジオを眺める。

「ってそんな暇ないじゃない！」

頭を振り、指先でスイッチを押し込むと、駆け出す。

目指すは地下基地。

「小雪殿……」

西澤家敷地内の森の中。

ドロロは小さく囁いた。目の前の小雪が頷く。

「分かってるよ。ドロロ。戦いが起きてるんだね」

「そうでござる」

ドロロは重々しく頷いた。青い目が冷たい光を放っていた。心優しき忍の目ではなく、心を棄てた暗殺者^{アサシン}の目だ。

「拙者は隊長の所へ行くでござる。小雪殿は夏美殿達と共に安全な場所へ避難するでござる」

闘うな。

その目は確かにそう言っていた。

「ドロロ——」

何故？

そう聞く暇もない。

口を開く前にドロロは消えていた。

「ドロロ……」

言葉は掠れ、空に消えた。

「放送……流すか」

クルルは手慣れた調子でキーボードを打ち出す。指示するのは日向家を含めた基地の全館放送だ。伝える事はもちろん、ナスカの宣戦布告。

だが不意にクルルの手が止まった。

ウィンドウの端に浮き出る、小さな四角。美しい黄金比を保ったまま、どんどん拡大していく。

「なんだ」

拡大は止まった。

ドアが開くように、その四角形は大きさを変える。

現れたのは少女だった。

栗毛の長い髪とピンクのワンピースを着た幼い少女。

「だ……」

【私はオート メリイエン】

澄んだ声だった。

【主の敵を取りに来ました】

少女が両腕を広げる。

ザザザザッ！！

オートの後ろから現れた黒い点が、モニターを埋め尽くす。生理的に嫌悪を催す映像にもクルルは眉根1つ動かさない。

「いい……度胸じゃねえか」

顔に宿るは不敵な笑み。

「宣戦布告と受け取らせてもらっぜえ」

ケロン軍最高のハッカーが始動した。

「おかしい、なんで襲ってこないんだ？」

風圧にかき消されながらも、弥々華は小さく呟いた。

虚もAKUMAも、空中でひたすら跪き大人しくしている事など――

「ありえないよね。普通」

「ありえなくなど無いな」

弥々華は力いっぱい顔を上げた。よく通る甘い声に。

弥々華は目を見開き、すぐに眉を潜め、齒を食いしぼる。

「ナスカアッ！！」

恐怖と、苛立ち。そして怨念までもが、弥々華の声に宿る。

瞬間湯沸かし器のように、沸騰した弥々華は叫んだ。

「黒白風華発動」

体を勢いで起こしながら、黒白風華を振り上げる。

「黒白繚ら――」

ナスカは、静かに笑んだ。

「行け。キルル」

T o b e c o n t i n u e d

第二十話 破滅の使徒

「うわっ!!」

悲鳴を上げながらも、弥々華は細かく旋回した。キルルと呼ばれたケロン人が伸ばした触手を回避する。

右、左。縦横無尽に飛び回るも、さすがに数十を超えるそれをかわし続けるには無理がある。

「や——!!」

囲まれた!

そう思った時には弥々華の体は引き寄せられ、鉄塔に叩きつけられていた。呼吸が詰まる。

「げほっ」

目が潤む。下界を写す視界が歪んでいた。

「茨田弥々華」

「ぐっ」

髪の毛を掴まれ、足が地を離れる。

「降伏しろ。俺と来い」

「嫌だ!!」

返事には1秒も掛からなかった。弥々華は右足を振り上げ、ナス力の腹を打つ。

それを踏み切りにして、弥々華は宙に舞った。

「随分脚力をつけたな」

「うっせバーカ」

弥々華は着地して悪態を吐くと、また加速する。黒白風華を真横に振る。手応えは確かにあった。

「くっ……」

直撃したのはキルルだった。腕で、弥々華の攻撃を軽く受けると弾き飛ばす。

弥々華は悲鳴を上げる間もなく吹き飛ばされた。

金網の床にバウンドし、体が宙に舞った。
そこに金網は無かった。

クルルは小さく喉を鳴らす。

彼の周りに浮かぶのは大量のモニターとキーボード。
全てに気を配りつつ、静かなる電脳戦は続いていた。

戦局は、未だ平行線。

潰しても潰せないプログラムが互いの演算装置を行き来する。

「クッ!!」

近くのモニターがクラッシュする。

焦げ臭い匂いがクルルの鼻を付いた。

散乱したガラスが、僅かに輝く。

【降伏……しないのですか？】

突如降り注いだ声にも、クルル無視を決め込んだ。

【無駄なのに……】

次の瞬間、クルルの仕込んだダミーのデータが破壊された。

【時間も、すり減ったあなたの神経も全てが無駄なのに降伏しない
のですか？】

モニターが破壊される。

クルルはささくれ立った神経を撫でつけながら、孤独な戦いを続ける。

「弥々華!!」

背中に伝わる暖かな感触に、弥々華は目を見開いた。

「一護!!!」

羽交い締めにされるような形で、一護は弥々華を落ちないように押さえつけていた。

「ありがとう。みんな集めてくれて」

「気にすんな。それより、アイツは？」

一護は顎でナスカとキルルを指し示して見せる。

「ナスカ アンノウン。Resistanceのボスだよ。ケロン人の方は分かんない。初めて見た」

「初めてじゃないかも知れないでありますよ。少なくとも我輩達には」

ケロロが突然発した言葉に、弥々華は首を傾げる。

「は？ なん——」

弥々華の言葉は銃声に飲み込まれた。

「騒々しい」

ナスカの振り上げられた右手は、銀色の小銃に変化していた。銃口となった指先から硝煙が出ている。

「敵の前で喋るとは……人数から出た余裕か」

開けられた目は、汚れ無き銀灰色。

「キルル!!!」

ナスカは鋭く怒鳴った。

「もう茶番は終わりだ。『終わり』を始めよう」

矛盾した一言。それが引き金になった。

キルルの目が輝いた。

空中にゆったりと浮き上がったキルルは、両手を伸ばす。次の瞬間だった。

両手の触手が伸び、虚やAKUMAを絡め捕っていく。捕食者。

その一言がしっくりくるような見た目だった。

アレンが今にも吐きそうな顔をした。

虚もAKUMAも抵抗せずに取り込まれていく。

「コレの能力は『融合』」

不意にナスカは口を開いた。

「全てのモノを取り込み糧とする」

キルルが姿を変えていくのが、全員の目に映った。

「ウイルスもナノマシンも、霊体すらも関係無い。全てを無効化し、自らの糧と成す」

ナスカはふつと笑った。

「そして惑星すら、滅する。それがこの生物兵器^{キルル}の力」

ケロロ小隊はわずかに青ざめた。

影が、全員を覆い隠した。

「ギルウー……!!!」

咆哮が、空気を切り裂く。

その白い白い体は周辺の建物を軽く超えていた。足元まで伸びた太い腕は2本の金色の腕輪がはめられている。

腹部は黒く赤い『x』が、鋭利なヘルメットを被ったような頭部には巨大な『x』と『04』の数字が刻まれていた。

「怪獣……じゃねえか」

一護の脳裏に蘇るのは幼い頃に見た、怪獣映画。

「そんな生易しいもんじゃ無いでありますよ」

「その通り」

ナスカは小さく笑う。

「行け！」

ナスカの腕に同調するかのようにキルルは腕を振った。悲鳴を上げる間も無い。

全員がその腕に吹き飛ばされた。

「みんな……」

弥々華だけは……無事だった。

と言うよりキルルの触手に、手足を絡め取られていた。キルルは弥

々華をタワーの上に落とす。

「奴らを潰せ」

ナスカの声にキルルは頷くと、大きな足音を立て前進を始めた。尻尾がある。

弥々華はそんな下らない事を、ふと発見してしまった。

「くおら！！ ボケガエ……」

夏美の怒声は思わず途切れた。

ケロロ小隊がいると思い駆け込んだ司令室には、影も形も無かった。

「井上……さん？」

夏美の視線の先には、井上織姫の姿があった。巨大なモニターを見上げ、両手を組んで立っていた。

「あ、夏美ちゃん」

こちらに気が付いたのか、井上は振り向き微笑する。僅かにその笑みには影があった。

「何が起きたんですか？」

夏美は思わず問いかけた。

「Resistanceの野郎が攻めてきやがった」

答えたのは井上では無かった。

「ティトさん」

「古代の兵器を引き連れてな」

淡々とした口調で告げるティトはため息を落とした。

「それって——」

「ああ」

ティトは夏美の言葉を遮る。

「キルルだ」

夏美の顔から、表情が消えた。

「それ、倒したんじゃないかったの!!」

「倒した?」

ティトと井上は怪訝な顔をする。

「そうよ。初めて出た時は、ボケガエルと冬樹が封印したわ。次の
はメールとマールが……。最後に出たのは分かるでしょう」

「最後……ああ。ダークの事だな」

ティトは小さく頷いた。

「だが彼奴らとは違うだろう。また別の場所……別の時代から連れて
来られたものだろうな」

「そんな……」

夏美は言葉も失う。

半ば無意識に、夏美は駆け出した。

「おい!!」

ティトが手を伸ばした途端だった。

「「わ!!」」

2つの悲鳴がきれいに重なる。

「姉ちゃん!!」

1つは夏美。もう1つの悲鳴の主は冬樹だった。

「大変なんだ!! 街の空に穴が開いて、キルルまで出てきて……」

軍曹はどこ!?

目を見開き冬樹は一息に言い放つ。

「戦場^{そと}」

呆けた夏美の変わりに、ティトが返事を返す。

「今は戦闘中だ」

気怠げに言い返すと、夏美と冬樹が顔を見合わせるのが見えた。
頷き合ったのがここからでも分かる。

素早く立ち上がった2人に、ティトはため息を付いた。

駆け出そうとした2人の襟首をひつつかむ。

「離して下さい!!」

「離して!!」

ティトは小さく首を振った。

「こつちにも命令があるんでね。行かせる訳には行かねえ」

「でも……」

「でもじゃねえ!!」

力を込めて引き戻す。

「ケロロ小隊の命令だ。日向家及び関係者を護れ、と」

ティトは司令室の真ん中まで引きずると、手を離れた。

「オレはあいつらの部下じゃねえが軍人だ。命令は守んなきゃならねえんだよ」

小さく息継ぎをしたティトは言葉を紡ぎ続ける。

「子守なんて好きじゃねえが……護ってやる。だからここにいろ。いいな」

諭すような声でティトは言い放った。

未だうなだれるのは、夏美と冬樹だ。ティトは苛立たしげに頭を掻いた。

「『傷つけるな』って言われたんだがな……」

ティトは僅かに遠くを見て、1人ごちた。

「なんで、こんな事をするんだ？」

弥々華は地の底から這い出すような声を出した。

「なんでこんなまどろっこしい真似をする!!」

ガシャンと金網が耳障りな音を立てた。

ナスカはしばらく下を向いていたが、不意に顔を上げ笑い出した。

「何がおかしい!？」

「いいや。お前はまだ気付いていなかったのか？」

わずかな嘲笑の色を込め、ナスカは言い放った。

「俺は言ったな。『俺と来い』と」

「それがどうした」

「俺が諦めたと思うのか？」

くく、と笑いながらナスカは続ける。

「改めて言う。俺と来い、弥々華。来るならキルルでもなんでも止めてやる」

「イヤだね」

弥々華は間髪入れず言い放った。

「キルルならみんなが止められるでしょう？ あんたに止めて貰わなくても」

「そうか。ならお前の全てを打ち砕いて——」

ナスカは右手を構える。

「そつちから懇願するようにしてやるよ」

T o b e c o n t i n u e d

第二十一話 18の心。1つの鼓動。

「避難して下さい!! 皆さん、落ち着いて!!」

歪に拡声した声が、悲鳴を切り裂く。奥東京市はかつてない混乱に惑わされていた。

始まりは数分前だった。

突如として現れた怪物、吹き飛ばされた人間。

そして始まった戦闘に、民間人はなすすが無かった。

現在は到着した西澤親衛隊の手によって避難が行われているものの、事態は混乱を極めていた。

「「正解!!」」

2つの男声が、見事に重なる。

空中に立つ2人の姿は煙に包まれた。

「天鎖斬月」

「狒狒王蛇尾丸」
ひびきおろし

飛び出した2つの影——一護と恋次——は変形した斬魄刀を振りかぶった。

「月牙天衝ッ!!」

「喰らえッ!!」

一護が放つ黒い霊圧波と、恋次の蛇を骨にしたような巨大な刀がキルルに直撃する。

キルルが僅かによろけたのが、遠目にも分かった。

「まだまだですう!!」

空中に飛び出したのはタママ。

放たれたタママ・インパクトに、キルルは追い討ちを食らう形になる。

「まだまだよ!!」

そこにリナリーが飛び込んだ。懷に潜り込み蹴りを加える。

さらに茶渡が潜り込む。

両腕は人外の物に変化を遂げていた。

「ラ・ムエルテ魔人の一撃」

悪魔の名を冠す左腕がめり込む。

「まだまだ行くさ!!」

少し遠くにいたラビの口角が、僅かにつり上がった。

「コンボ判!! 剛雷天」

炎と雷を備えた龍が、キルルを襲う。

咆哮が空を切り裂く。

「やったか……?」

虚空を見据えるキルルは、ピクリともしない。

「まだでござる!!」

キルルの口が、開く。

キイイーン!

僅かに響いた耳障りな音が、途切れる。

次の瞬間、赤黒い光線が、地を蹂躪した。

「あ……!!?」

弥々華は宙返りの途中、確かに赤黒い光を見た。

「どこを見てる。そんなに向こうが気になるか？」
「別に」

弥々華は吐き捨てるように返すと、黒白風華を下から切り上げた。
ナスカの腕がそれを受け止める。

さらに右腕を降ると、弥々華はそれを首を振ってかわした。
距離を取る。

ナスカは双剣と化した両腕を軽く降ると、弥々華を睥睨した。

「そろそろ本気でも出したらどうだ？ それとも——」

ナスカは舐めるように黒白風華を見詰めた。

「そんな力で、勝てるんでも？」

弥々華がぎょろりとナスカを睨んだ。頬から血が流れ出し始める。

「うるさい……。あたしがそんな自惚れ屋だと思っの？」

「イエス、と言ったら？」

ナスカは僅かに笑った。

「舐めんなよって言い返すかなア——」

弥々華は一気に距離を詰めた。

「黒白繚乱——」

ナスカは頭の後ろで、手を交差させる。

みしみしと、音がした。

「まだ——」

弥々華は腕を軸に一回転し、着地。左足を蹴り込む。

「まだ——」

下から強く斬り上げた。

「油断——」

黒白風華を振りかぶる。

「すんな——」

——斬！

ナスカのシャツが、千切れる。

ひらひらと、布が舞う。

「……ッ!？」

硬い。

その感覚に、弥々華の顔が凍りつく。

それを見たナスカは小さく呼吸を吐き出した。

「そんなものか？」

僅かに除く胸板が薄銀に輝く。それが人の肌色に変わっていく姿を、弥々華は呆然と見つめていた。

ナスカ アンノウンの能力、狩刀邪奇。それは四肢の武器化。そして皮膚の硬質化。

「厄介極まりねえな……」

クルルは小さく舌打ちを漏らしながら、モニターを見詰めた。

戦局は、劣勢。

後ろでモニターが爆散する。それだけではない。

配線されたケーブルが接続を断ち、蛇のように襲い来る。

クルルはそれを容易く撃ち抜いた。手のひらに収まる小さな銃で。ブラスター

「ウゼエな……クソ……手が足りねえ……」

最後の砦としている、地下深くのコンピュータールーム。自分の張った罫も防御もかいくぐる敵。片手で攻撃、片手で防御。

あの時を思い出す状況にクルルは舌打ちを零した。

「だああーッ!!」

緑の機体が攪乱するかのようになり、キルルの周りを旋回する。

ケロロがパイロットとなっていて、そのケロン人型ロボの名はケロロロボ。彼に似た緑が眩しい巨大なロボだ。

「今です!!」

「了解であります」

ケロロロボは手で握っていたアレンと神田を思い切り放り投げた。

「行っけえーッ!!」

アレンと神田は神ノ道化と六幻を力強く振りかぶる。

「うおおーッ!!」

キルルが庇うように出した腕を、2つの刀は浅く傷つけた。

自由落下を始めた2つの体をリップと符が受け止めた。

黒い影が3人の横を通り過ぎたのをリップは確かに見た。

「黒崎くんッ!!」

井上の叫び声にティトは渋い顔をした。モニターは一護を一瞬大写しにすると、今度はリナリーとドロロを映す。

よくもこんな動きの速い連中を映せる物だと、ティトは感服のため息を漏らした。

「あ、軍曹だ!!」

モニターの次のターゲットはケロロロボに乗りキルルの拳を受け止めたケロロだ。

「あ……」

あえなく吹き飛ぶケロロロボは、地面にめり込みつつも姿勢を立て直す。

「危ない!!」

キルルの拳がケロロボに突き刺さる。思わず冬樹は目を閉じた。ギシリと、キルルの巨腕が止まる。

「良かった」

恋次の刀がキルルに巻き付き動きを止めているのを見て、冬樹は安堵の溜め息を漏らした。

さらに追撃をかけるギロボを見て、夏美が腕に力を込めた。

「やった」

ティトはそんな彼らを傍観する。後衛にあたっているだろうリップを思いながら。

「ん？」

ティトは何気なく部屋の端に、目を走らせた。

「何か光った？」

次の瞬間、ざわりとティトの背が粟立った。

銃声が聞こえる。

夏美達が振り向いたのが見えた。

頬がひやりとして、熱い。

「まずい……！！」

ティトは地を這うように駆ける。

「伏せろ！！」

ティトは両手を広げ、3人を引き寄せる。同時に雨のような銃声が轟いた。

「く……」

弥々華の腕が垂れ下がる。

血液が垂れ落ちるのは見なくても分かった。全身に浅く刻まれた傷に悲鳴を上げる。

「まだ意識を失わないのか」

弥々華は目の前が揺らぐのを感じながら、ナスカを睨み付ける。

「うるさい……」

絞り出すような声で呻いた弥々華に、ナスカは鼻を鳴らす。そして弥々華の首筋に腕を突き付けた。刀と化したそれをだ。

「降伏しろ。そうすれば助けてやる」

「断る。絶対嫌だ」

「そうか。なら——」

ナスカは遠くに目を向けた。爆音飛び交う方角を。

「——奴らを殺すか」

弥々華は目を見開く。

「止める……」

弥々華の絶叫に、ナスカは嘲笑した。

「もう、遅い」

ナスカは左手を高々と掲げた。

空間が、また開く。

「て」

ティトが小さく呻く。

「無事か？ お前ら」

体を起こしながら、ティトは問いかけた。視線の先にはぐったりした井上、冬樹、夏美。

「い……一体なんなのよお」

夏美は頭を擦りながら起き上がると、目を見開いた。

「な……」

「どうしたの？ 姉ちゃん……って、え？」

冬樹も起き上がると、目を丸くした。

「黒こげですねえ」

井上はふわふわと言い放つ。

確かに部屋の表面は薄黒く焦げていた。とくに酷いのは壁から突き出した突起だ。銃の形を模したそれは、恐らくセキュリティー設備の一部だったのだろう。

「ったく。クルル曹長は何やってんだ」

ティトはぶつりと呟くと、舌打ちを落とした。

「キル……」

キルルが小さく鳴く。頭を揺らし後ろを向いた。

「なんだ？」

呟いたのは一護だった。空気が変わったのが分かる。

「何が起きている？」

ルキアが小さく呟く。

「あれは……」

アレンは西澤タワーを凝視した。

「AKUMAだ」

「虚もいるぞ」

ルキアのその言葉を合図にキルルは両手を振り上げた。のけぞり咆哮する。

吸収されて行くAKUMAや虚を、全員は力無く凝視する。

すると、キルルは急に光り輝き始めた。

「嘘！？」

思わずリップが悲鳴を上げる。

次の瞬間、帯のような何かが大地を蹂躪した。高く禍々しい塔がそ

ここに立つまでの猶予は1秒も無かった。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

第二十二話 覚醒

「何をした……？」

弥々華は全身が震え出すのを感じた。

視線の先には、巨大な白い塔。そして大地を蹂躪する何か。

「何をしたって聞いてんだよ！？」

弥々華は目を見開いた。体が、冷たい。

ナス力は静かに弥々華を見つめ返した。

「餌をやったただけだ」

「餌？」

ナス力は塔をちらりと見た。

「餌をやれば生き物は成長する。当たり前だろう？」

飄々と言い放つ。

「餌をやって育たない生き物が存在するか？」

僅かにナス力が笑んだ。

「……ざけんなよ」

弥々華の目が燃える。

「ふざけんな！！ 人があそこにいるんだ！！ 仲間も、一般人も！！ 人が死んだらどうすんだ！！ 分かっているのか！？」

「死んだらどうすんだ？ 決まっている。放って置いて地に帰るのを待つ。そうすれば、草木が育つだろう？」

弥々華は拳を握りしめた。瞳は烈火のごとく燃え、ナス力を貫いた。

「このクソ野郎」

「光栄だね。お前にまっすぐ見てもらえるだけ光栄だ」

「ふざけんな！！」

弥々華は黒白風華を突き出す。決意に満ちた怒りの眼でナス力を睨む。

「能力解放！！ 華開け 黒白風華ッ」

オーラが収束し爆散する。

弥々華の姿は黒白の柔らかな翼を持つそれに変化していた。手には双方に刃の付いた大鎌。

「アンタはあたしが止める!!」鎌突きつける告死天使に、ナス力は笑みを深くした。

息を飲む者がいた。

目を見開く者がいた。

口を開ける者がいた。

ただ、全員が塔を見つめた。

天地を貫く悪夢を。

不意に空気が止まった——瞬間だった。

「なんだ、あれは?」

ぶつりと、塔に白い点が浮き出る。それはあつという間に、増殖していく。

「来るであります!!」

ケロロが絶叫した。

白い塊が近づく。

その塊がキルルだと気付くまでさしたる時間は掛からなかった。

「散れ!!」

ギロロの一言に、全員が散り散りになる。通過したキルルの群は、拡散する。

「一体何なの!?!」

リナリーは回し蹴りから踵落としに繋げキルルを蹴り落とす。

「分かったら苦労しねえよッ!!」

恋次が振り回す蛇尾丸の口にキルルが消えるのが見えた。

その横を白い影がすり抜ける。

現れたのは石田だった。手には青い光の弓。

力を込めて引くと、無数の矢がキルルを穿つ。

殺虫剤のようなそれに、リンクは舌を巻いた。

「嘘でしょ……また来たであります!!」

ケロロはケロロロボを起こすと迎え撃つ体勢に入る。

多い。

ケロロの背がざわりと粟立つ。多勢に無勢に等しい敵の数だった。するとだった。

ケロロロボの背を誰かが蹴った。足音も衝撃も感じない足取りで。

「ドロロ!」

「隊長殿。ここは拙者に任せるでござる」

ドロロは飛ぶ。

キルルのど真ん中に飛び込む。

「『鬼式』!!」

その言葉と同時に、ドロロの体を青黒い装甲が覆う。暗殺兵・白兵戦鬼式《アサシンソルジャー・H-T-Hバトルモード》。それが装甲の名だった。

ドロロは腰から短刀を抜くとキルルを斬りはなった。

「危ねっ……」

手を振り上げると同時に炎が拡散する。

「うぜえんだっつ!!」

ティトが腕を回すと、拡散した炎が辺りの宇宙生物達を焼き尽くした。

「大丈夫か？ 後ろは」

「平気です」

井上の張った三点結瞬を顧みたティトは、ふっと笑う。

「なら良い」

ぐんと、ティトは踏み込む。

炎を纏った蹴りが、宇宙生物に食い込む。さらに爆破。生き物の焼け焦げる匂いが酷くなる。

「これはセキュリティーの暴走だ。事情はわかんねえけど、何かが起きてる」

ティトは、拳を叩き込む。

さらに側頭蹴りに繋ぎ下から炎を起こす。

「様子を見に行く。案内頼めるか？ 日向姉弟？」

風のように弥々華は舞う。

先程よりも格段に動きは滑らかになっていた。大鎌は真ん中で2つに別れ、扱いやすい大きさになっている。

息を吐き出しながら、弥々華はナスカに斬撃を斬撃を加えて行く。ナスカはそれを的確に受け止め、いなしていた。

「だあっ!!」

弥々華の斬撃が、下から跳ね上がる。さらに上から抑えつけるように鎌を振り下ろす。

ナスカは両腕を挟み込まれた。

「噛み合った……」

弥々華は小さく吐き出すと、僅かに笑った。

「黒白繚乱!!」

吐き出された衝撃波と共に、弥々華は離脱する。

「まだだ!!」

さらに弥々華は踏み込んだ。たたらを踏むナスカに狙いを定めた。

空中に飛び上がり横に回転する。狙うのは頭への体重を掛けた打撃。
「ふん」

ナスカは弥々華の腕を掴んだ。前方に引き戻すと、軽く捻る。弥々華の手から鎌が離れた。

「やば……」

ナスカの斬撃を弥々華はかろうじて受ける。重い、腕が痺れる一撃に弥々華は完全に丸腰になった。

「——ッ!!」

次の瞬間、弥々華の肩に激痛が走った。

さらに足を貫く激痛が襲いかかった。

銃声の残像が耳に残った。

「うざってえ……」

クルルは半ば無意識に吐き捨てた。状況は最悪に等しい。

敵の処理速度の速さに加え、襲い来る配線ケーブル。

敵は基地のセキュリティープログラムと通信設備のハッキングをクリアしているのに対し、こちらは敵陣の敷居すら跨げていない。

久方振りの苦戦だった。

自分の全てをハッキングに回しても追いつけないスピードだ。

頭に流れ込む情報が、警報を告げている。頭の痛みすら覚えながら、クルルはケーブルを撃ち抜いた。

「あ……」

絶叫が空気を揺らす。

弥々華は僅かにのけぞり悲鳴を上げた。

ナス力は刀を抜く。真横に切り裂くように。

弥々華はうめき声を上げ崩れ落ちた。悲鳴が止まる。散り散りになる意識を必死でかき集めた。

「ひぐ……う……」

咳き込んだ酸素を取り戻すように弥々華は息を吸い込んだ。

痛い、撃たれた左足も痛い、肩も痛い。痛い痛い痛い痛い痛い痛い。

その恐怖が頭を支配する。

血が地面に落ちていく。

「そのまま寝ている」

「ぐ……」

気絶しなかったのは不幸中の幸いか、もしくは逆か。

「そうすれば俺が助けてやる」

「うぁ……」

軸を左腕に取り、ふらつきながら立ち上がる。

「それとも仲間も、皆全て助けてやるうか？」

「うる……さい」

一息で吐き捨てた。力を込めて頭を振り上げる。

「あたしは……こんな所で負けるわけには……行かないから……」
流れ落ちるのは血か汗か。

「みんなを頼りにしてるから!!」

弥々華は叫ぶ。

「ここであんたの言うことは聞けないんだよ!!」

弥々華は両腕を構えた。

「黒白風華……」

「なんだ？」

呟いた瞬間、鎌が飛ぶ。

鎌は弥々華の両手に収まった。その眼には確かに光が宿る。

「風獄・螺旋華！！」

「ぐッ！？」

ナスカの両側から出現したのは光と闇を濃密にした鎖。螺旋状に渦巻くそれが、ナスカの自由を奪う。

キリリとした金属音にナスカは顔を歪めた。

「これで、終わり！！」

弥々華は踏み込む。

「風葬・彼岸華！！」

弥々華の鎌がナスカの首を確かに捉えた。

一護は宙へ飛び上がると眼前に左手をかざす。さらに顔をかきむしるような動きをした。

「うおおーッ！！」

一護は咆哮する。

その顔には虚の仮面。死神に有らざる、禁忌の力。

「月牙天衝！！」

先程よりも巨大化した月牙が敵を薙ぐ。だが彼らをしてなお、キルルは強い。

「コイツら……斬っても斬っても——」

一護は攪乱するように辺りを飛び回る。数の暴力。多勢に無勢。

キルルは多い。

百を遥かに上回る。

「うおッ！！」

取られたのは、足。

一護は絶叫した。

間に合わない。

飲み込まれるのに残された猶予は1秒すら無かった。

「一護殿ーッ!!」

ケロロは喉が裂けるような声を上げた。

ケロロを残し、ここにいたもの全ては飲み込まれた。

ケロロはロボを止めた。

「『貴様』……」

ケロロは臆さずに、キルルを見据えた。

迫る。

ケロロはなにもしない。

ただ冷徹とも言える視線でキルルを見据えていた。

「『止め』」

殺到していたキルルが動きを止めた。

風すらも動きを止める。

音もない。

キルルはケロロを見据えていたと思うと、不意にボコリと音を立てた。

ボコリ。

キルルの体が、泡立つ。

その瞬間だった。

キルルは、体から赤黒い光を発した。悲鳴が上がる。

キルルは消滅していく。
連鎖的に塔に向かい消滅していく。

ケロン軍最高絶対権限『超 隊長命令』が発動された瞬間だった。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

第二十三話 事態、終息

クルルの手は淀みを知らず動いていた。迷う事無く打ち込まれる。

「ダメだ……」

後手後手に回された結果がコレか、とクルルは小さく自分をわらう。

「手が足りねえ……クソ」

らしくない悪態と、舌打ち。

敗因はただ1つ。

処理速度の問題だった。敵はプログラムなのだ。普通にやりあえば、こちらが劣る。

「待てよ……」

そこまで思考が回り、気が付いた。

思い付いたのは搦め手だった。

クルルは小さく笑うと、閉じていたある回線を開いた。

さらに開けた回線に、防御を巡らせる。

「掛かれ」

それは祈りに近かった。

「きゃ!!」

「大丈夫か？ 日向夏美」

「平気です」

電気が、不意に落ちたのだ。だから夏美は足を取られていた。

「なんなんだ……一体」

テイトは吐き捨てると、小さな灯りを発生させた。薄暗い灯りに顔が照らされる。

夏美が立ち上がった所も確かに見えた。

「多分クルルが照明を切ったのよ！！ 意味が分からないわ」

「でも、何のために？」

冬樹の言葉に、全員が黙り込む。

「気にしてるヒマはねえよ。ほら、行くぞ」

ティトはその静寂を無理やり突き破った。踵を返し歩き出す。

「あ、待つ——」

その声は途中で途切れた。

「姉ちゃん！！」

「夏美ちゃん！！」

「嫌あ！」

夏美は大きな宇宙生物に絡め取られてしまった。

「動くな！！」

ティトがそう叫び、炎を出そうとした瞬間だった。

——斬！！

「あ、お前は……」

誰かが触手を切り裂くと、夏美を抱き寄せる。もがいた宇宙生物はなすすべなく焼却された。

「小雪の嬢、推参」

「小雪ちゃん」

東谷小雪は夏美につこりと笑いかけた。

「大丈夫ですか？ 夏美さん」

「ええ」

「東谷小雪……助かった」

ティトは1人呟いた。

【よく、やった】

その言葉にオートはふわりと笑う。

掌握出来たのだ。

電気や水道を司る中央制御装置を。

ここまで出来ればこっちの物だと、オートは笑う。

【次は基地の完全制圧だ。行け！！】

オートは命じられるまま、サイバーな無重力の中を駆け出した。

「くくつ。引っかかりやがった」

クルルは、本当に嬉しそうに嘲笑した。

この部屋を除いた基地の電気は落ちた。恐らく水道も出ない。だが、十分だ。

「くーつくつくつ。ラストスパートだぜえ」

クルルはキーボードを叩く。

打たれた命令は、『confine↓blast』。

クルルはエンターキーを押し込んだ。

モニターに現れたのは視覚化されたオートと、10秒のカウントダウン。

「たっぷりお返しさせてもらおうじゃねえか？ オート」
開いた回線を閉じる。

オートは気が付いたのか防壁の破壊に励み出す。だが、遅い。

カウントダウンは2秒を切った。

クルルは笑う。勝利を確信した、笑いを顔に刻む。

次の瞬間、地震にも似た揺れが辺りを襲った。

クルルズラボ前。

彼らが揺れに襲われたのは、そこだった。

「一体、なんだったの？」

「さあな。誰かが派手に暴れてるんだろ」

ティトは事も無げに呻くと、ドアを炎で突き破った。あまりの躊躇の無さに、全員が顔を見合わせた。

「なんだ」

「いや、あなたも弥々華さんの仲間なんだなあって……」

ティトは一瞬怪訝な顔を見せた。だがさりと流す。何が起きたか突き止めるのが先決だ。

ティトはラボに足を踏み入れた。

オートは獣じみた悲鳴を上げた。

体が烧ける！！ 爆発したのだ。プログラムも何もかも。

【何が起きた！！ オート！！ 返事をしろ！！】

博士。シャドウ博士。

オートは苦しみの中、呻き声を上げた。

やられました。これは囷だったんです。爆発しました。私はもう長

くない。
負けです。

【そんな】

シャドウ博士、聞きたい事があります。
マスターは助かりますか？

何も、聞こえなかった。

マスターは助かりますか？
マスターを助けてくれるんじゃないですか？

シャドウは、一言も返さない。

私は利用されたのですか？

オートの目にあるはずのない涙が浮かんた。自分は、マスター――
ハル・エメリツヒ「ユウマ――」を助ける為に戦ったのだ。宇宙警察
の監獄から、助け出す為に。
なのに、こんな仕打ちがあるだろうか！！

シャドウ博士？ 答えて。私は、このまま壊れるの？
マスターも救えないまま？
敵も取れないまま、死ぬの？

オートは自分の体の消失に悲鳴を上げた。

マスター。
ごめんなさい。

そこでオートのプログラムは、完全に破壊された。

「風葬・彼岸華!!」

この技は衝撃波を纏わせた鎌で首を跳ねた敵を彼岸花になぞらえた、弥々華の至高の技だった。

弥々華は鎌を首に掛け、駆け抜ける。手応えは確かにあった。

「クソ……」

言葉を発したのは、弥々華だった。斬れない。

弥々華は崩れ落ちた。限界を超えたのだ。

羽根が散る。

眼は虚ろになり、意識は完全に消える。

ナスカはそれを勝ち誇ったように見据えていた。

螺旋華が解けた。

ナスカは、喉の奥で小さく笑う。

「俺の勝ちだ」

手を伸ばす。

「弥々華」

その指先が、弥々華に触れようとした瞬間だった。

「待て!!」

声が響いた。

ナスカが止まる。

「なんだ？」

次の瞬間、西沢タワーを死神、エクソシスト、ケロロ小隊が取り囲んだ。

「観念するであります。ナスカ アンノウン!!」

ナスカは一種呆然とした表情を浮かべた。

「キルルめ……役立たずだったか」

ナスカはそう呟くと、全員をゆつくりと見据えた。

「これでは、この俺に勝ち目は無いな」

冷静な言葉に、全員が固まる。

「ならば今日は諦めるとしようか」

「待て!!」

一護の声に、ナスカは小さく笑った。

「断らせてもらうよ。俺も人間なんぞね」

そう言くとナスカは走り出す。

そして空中に飛び上がり、空間の裂け目に姿を消した。

「サヨナラ、諸君。だが俺は、まだ諦めないよ」

その言葉を残して。

「クルル曹長!! 一体何が起きた?」

テイトはラボに駆け込むなり、叫んだ。

「セキュリティーはオレらを襲う!! 電気は落ちる!! 聞きた

い事が山ほどあるんだが?」

クルルは振り向いた。

「色々あったんでなあ。こっちも」

そう言つて、クルルはひたすら笑った。

テイトはそれを力無く、見つめた。

「何かあったのか?」

「弥々華!!」

リップはエクソシスト組の乗った符を飛び降りた。

「弥々華、大丈夫!？」

リップは弥々華に駆け寄ると、そつと顔に触れた。

「生きてるのか？」

ルキアの言葉に、リップは頷く。

「大丈夫だと思う。傷は深いけど」

「そうか」

ルキアはその言葉に小さく微笑んだ。

「ナスカ様!!」

Resistanceに帰還したナスカを迎えたのはジュエルだった。

「ご無事ですか？」

「ああ」

ナスカは軽く頷く。

「シャドウは？」

「はい。オートを破壊されました。その所為で自らのコンピューターも一部破壊されたようです」

「そうか」

ナスカは小さく頷く。

「我々の敗北だな」

「はあ？」

ジュエルの怪訝な顔に、ナスカは言い放つ。

「此方の敗北だ。この作戦は失敗だ」

「ナスカ様……」

さらりと言ったナスカの顔をジュエルは凝視した。

「次の作戦だ。準備をしておけ」

「は……はい。了解しました」

ジュエルは頷くと、廊下を駆け出した。

ナスカは歩き続ける。

戻ったのは執務室だった。

そのまま、椅子に体を預けた。

さらに机の中から写真立てを取り出す。

「『ナスカ』。すまない。お前の願いを叶えられなかった」

写真の被写体となった人物は、弥々華によく似ていた。

ただ眼は赤くない。そして、髪も少し長かった。

だが顔立ちは双子のように瓜二つだった。

その隣には少年時代のナスカと、もう1人の少年が写っていた。

「だが、安心しろ。お前の願いは必ず叶える」

そう言っただけでナスカは、机の引き出しに写真立てをしまい込んだ。

「次は負けんぞ。弥々華」

T o b e c o n t i n u e d

第二十四話　さらば

先の戦いから2日が立った。

弥々華はまともに戦える程に回復した。ただし病室に缶詰め状態になっている。クルルは基地の復旧に追われていた。

とは言え、平和な日々が続いている。

そんな夕暮れだった。

「帰れるの！！」

弥々華が勢いよくマットレスを叩いた。その顔は喜びに溢れている。

「うん。復旧したんだって。さっき電話かかってきたんだ」

リップは携帯電話片手にニコニコ笑っていた。

「明日の朝一番にでも帰って来いって」

「うわあゝ嬉しい……。みんなも喜ぶだろうね」

「きっと喜ぶよ」

リップは相変わらず笑顔のまま、頷いた。

「隊長にも、言わなきゃね」

「全員集めた方が速いんじゃないかなあ」

「だね」

弥々華は顎を軽く引く。

「明日の朝一番なら、さっさとやらなくちゃね。善は急げだな？」

「そうね」

リップは立ち上がった。

「じゃ、集めてくるよ」

「あたしも行く」

「もっと休んでなくていいの？」

「平気平気。体鈍ってたところだから」

へらりと弥々華は言い放った。ギシリとスプリングが軋む。

立ち上がった弥々華は僅かによるけた。

「本当に平気？」

「大丈夫」

「んじゃ、注目!!」

パキリと齒切れの良い声で、弥々華は呼びかける。

地下基地で1番広い会議室に、この事件に巻き込まれた面々が全員集合させられていた。彼らの視線の先には、弥々華の姿がある。横に控えるのはリップとティトだ。

弥々華はいつもはケロロが陣取る席に腰掛けていた。

「みんなに良いお知らせがあります!!」

弥々華はそこでニイツと笑う。

「帰れるよ。家へ」

全員が、無意識に顔を見合わせた。

「マジでさ?」

ラビの一言に弥々華が頷く。

「出発は明日の朝、それまでに準備しとくように。以上解散!!」

パンと弥々華は手を打った。

次の瞬間、小さな快哉が辺りに響いた。

「寒……」

弥々華に取っては2日振りの外だった。外気は肌にひやりとした感覚を残す。

「弥々華か?」

ギロロは何気なく振り向いた。

「ん」

弥々華は喉の奥で返事を返すと夏美が普段腰掛けるブロックに腰掛けた。

「ギロロ」

おもむろに口を開く。

「終わるんだね。この事件も」

「ああ。そうだな」

弥々華は焚き火に手をかざす。僅かに表情が緩んだのがギロロの目に写った。

「ギロロ」

弥々華は膝を抱えるようにして姿勢を変えた。

「あたし、みんなを護れなかったなって思うよ」

ギロロは口を挟まず、弥々華を見た。

「みんなに怪我させちゃったし、あたし自身足手まとிட்டた」

弥々華は空を見た。

「強くなりたい……」

囁くように、弥々華は呟く。

「強くなりたいよ」

「そうか。ならもつと頑張れ」

弥々華はギロロを見る。軽く目を見開いて。

「なんだ？」

ふつと弥々華が笑う。

「ありがとう」

そう言つて、弥々華は笑っていた。

「帰れるんだな」

「そうですね」

オレンジ頭に、並んだ白髪頭が返事を返す。

ほぼ同世代な彼らは過ごす時間を共有する事が多かった。

「早く帰りたいですか？」

アレンは何気なく質問をぶつけた。

「どうだろうな？」

一護はぐつと体を伸ばす。

「分かんねーや」

「そうですね」

「お前はどんなんだよ？」

「僕は……」

アレンは息を吸い込んだ。

「早く教団ホームのみんなに会いたいです。でもこのみんなと別れるのは嫌かなあ」

「どうせまた、近いうちに会えんじゃねえか？」

「そうですね」

2人は顔を見合わせ、小さく笑った。

「チエツク」

クルルは取った駒を箱に放る。そして小さく笑った。

「チエツクメイトだなあ」

「そうであるな」

クロウリーはぼんやりとチエス盤を見詰める。

「これで10勝10敗1引き分けか？」

クルルはチエスの駒を箱に詰め込んでいく。

「勝者を決めるのは次会ったとき……」

クロウリーはその言葉にハッと顔を上げた。

「それでどうだア？」

「も……もちろんである！！」

クロウリーが顔を輝かせたのを見て、クルルは陰気に笑った。

「もう会えないのかしら……」

リナリーは寂しげな表情のまま、ルキアと井上を見つめていた。

「そんな事はない」

ルキアはそう言って茶を啜る。

「そうだよ。きつとまた会えるよ」

井上はリナリーの手を握った。

「生きていて超えられぬ壁などない。そう、思わないか？」

「そうね」

リナリーはそう言って微笑んだ。

「きつとまた会えるわよね」

そうして夜は更けていった。

翌朝、8時を少し回った時刻。

朝食を終えた面々は、空間転移室に顔を揃えていた。

機器の操作は弥々華。それを両隣でタイトとリップが見守る。

エンターキーを押し込めばモニターに表示されるのは、黒の教団の空間コード。

「エクソシスト組！。準備出来たよ」

弥々華が手を上げて合図を見ると、エクソシストの面々が前に進み出た。

「ケロロさん。皆さんありがとうございます」

アレンが頭を下げる。

「みんなと会えてとても楽しかった。世界が広がった気分よ」
リナリーが笑顔を見せる。

「じゃあな」

ラビが口を開いた。

他の面々も、軽く頭を下げる。

「ケロロ小队」

それを見たケロロが、敬礼する。

「全員敬礼っ！！」

全員がケロロに習い敬礼するのを見てアレンがわずかに笑った。

弥々華はどうするか悩み敬礼をする。

「じゃあ中へ。出たらコムイ室長がいるはずよ」

リップはそう言って全員を促した。

「OK。次は死神組」

残っていた一護達が前に進み出る。

「尸魂界に送るから。向こうで穿界門に行つて」

「ああ」

一護は軽く頷いた。

「じゃあ中へ」

テイトに促されるまま、一護達は中に入る。

「じゃあな」

その一言を残して。

「行っただけありますな」

ケロ口は肩の力が抜けたのか、無意識に姿勢を崩した。

「うん。無事に帰れたみたいだよ」

弥々華はモニターに写る『転送完了』の文字を見て、安堵のため息をもらした。

「じゃあ、あたしも帰るね」

「お疲れ様であります。弥々華殿」

弥々華はふっと笑った。

「ありがとう。隊長」

A p d s c o。空間転移室。

「よく、帰ってきた」

3人を待っていたのは、キースだった。

「署長……」

見知った顔にリップの顔がほどける。

「A - 1 1 3 小隊。任務よりただいま帰還しました」

テイトの言葉にキースは視線を緩めた。

「帰還を受理した。誰も死人を出さず……よくやった」

キースの一言に弥々華の表示が僅かに緩む。

「しばらく休め。疲れただろう」

「……はい!!」

3人は元気に返事を返す。

それを見たキースは悪戯っぽく笑う。

「そつだ。報告書は今週一杯に出すように」

その言葉に弥々華が嫌な顔をしたのは言うまでもないだろう。

「あ、弥々華!!」

あの事件から数日が立った。

弥々華は視線を上げる。

「ああ、リップ。どうしたの？」

「どうしたもこうしたも……報告書サボらないでよお」

「あ、ごめん」

悪びれた調子もなく、弥々華はさらりと謝罪する。

「ごめんじゃなくてさあ……ってまたその写真見てたの？」

リップは弥々華の手元に気が付いた。その手には1枚の写真。

「ダークさん達と取ったやつ？」

弥々華は軽く頷いた。

「さっき鞆見たら入っててさ」

「そっか……でもそれより報告書、さぼらないでよね!!」

リップの一喝に弥々華が飛び上がった。

「まだやってんのか……お前ら……」

ふらりとテイトが現れたのはそれから数分後。

その時、弥々華は小さくなってリップの説教を受けていたという。

交錯した世界は元に戻った。

だが彼女らの日常は終わりを告げる事はない。

次に起こる事件とは一体なんなのだろうか？

T o b e c o n t i n u e d . . . ?

後書き（前書き）

後書きですがぐぐぐだです。

反省とかしてます。予定もメモしてます。それでも読むよって人はどうぞ。

後書き

作者の百花です。

今までCross world（以下CW）をご愛読頂きまことに
ありがとうございます！！

すっごく時間のかかった小説ですが、とても楽しく書けました。と
にかく楽しかったです。

一番楽しかったのはダークの件かなあと思います。あの3人組、
好きなんです。

最終決戦編は立ち回りを必死に考えましたが……緊迫感無かったな
と。それが悔しい。

とは言え事前にプロット（筋書きのまとめ）を作らなかつたり、時
事ネタをポンと入れたので矛盾点がエライことになってると思いま
す。書き直さないですけども。

そこが大きな反省点でした。

後はマジで喋ってないキャラがいるのも。ごめんなさい。

さてぐだぐだの反省はここまでにして、これからの予定をメモしま
す。

とにかく一番力を入れるのは『超小説版ケロロ軍曹+black &
white 2（以下超小説版2）』だと思います。

でもCWの続編も書きたいです。キャラと舞台は決まってるので、
ただいまストーリーを練ってる最中ですが。書きたいです。

どっちを優先するかは正直微妙ですが……頑張ります。

ストーリーができれば平行して書くと思います。いつになるか分か
りませんが……。

さて最後になりますがもう一度皆さんにお礼を言いたいと思います。
足掛け4ヶ月（正しくは3ヶ月半位）、一生懸命連載してきたCW。

PV数は9、967件・ユニーク数は3、479件に及びました。
これも皆さんのおかげです。

本当にありがとうございます。

ではまた次回、今度は超小説版2でお会いしましょう。
それでは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8917m/>

Cross world ～交錯する世界～

2011年5月12日11時07分発行